小説ドラゴンクエストII

悪霊の神々

上

高屋敷英夫

ENIX

DRAGON
QUEST

エニックス

ISBN4-900527-17-3 C0093 P1000E 定価1000円(本体971円・税額29円)

小説 ドラゴンクエストII

悪霊の神々 上

高屋敷英夫

小説　ドラゴンクエストII　悪霊の神々 上

ロトの末裔たちによる愛と勇気のファンタジー物語

イラスト／いのまたむつみ

序章

およそ二二〇年ほど前――。

勇者ロトの血をひくアレフは、悪の権化・竜王を倒して、二〇〇年ぶりにアレフガルドに平和をもたらした。

その後、故郷ドムドーラを再建したアレフは、新天地を求めて、ローラ姫とともに長い航海の旅に出た。

そして、はるかアレフガルド東方にある未開の大陸に上陸すると、理想の国ローレシアを建国し、その年をローレシア暦元年と定めた。

国民の多くは、勇者アレフを慕って、アレフガルドから移住して来た人々であった。

王女ローラとの間に二男一女をもうけたアレフは、さらに領地を拡大し、ローレシア暦二〇年、ローレシア大陸北方にサマルトリアを建国すると、ローレシア国を長男に譲り、二男にそのサマルトリア国を与えた。

また、二年後には、長女がロンダルキア北東部のムーンブルクの国の王子に嫁ぎ、ローレシア

とサマルトリアはムーンブルクと和親同盟を結んだ。

ムーンブルクは、古代王国の流れをくむ、長い伝統と豊かな文化を持つ大国だった。ローレシア暦四三年にアレフが、そして同四六年にローラが、高齢のために相次いで亡くなると、偉大な指導者を失った三国は、さらに結束を強めた。

こうして、ローレシアとサマルトリアとムーンブルクの三国は、アレフ亡きあとも、姉妹国として二〇〇年もの間、ともに栄えてきたのだ。

だが、今――、この三国は、かつてなかった最大の危機を迎えようとしていた。

巨大な悪が、鋭い牙をむいて襲いかかろうとしていたのだ。

ファンドリアン家の居城であるムーンブルク城は、王女セリアの十六回目の誕生日を一〇日後に控え、その準備に忙しかった。

当日は、ファンドリアン家古来の伝統儀式である「髪上げの儀」、賢者、高僧、予言者たちを前にしてのおごそかな「戴冠の儀」、さらには貴族、国中の長老や名士たちを招待しての、華やかな大舞踏会が盛大に催されることになっていた。

十六回目の誕生日は、この国では成人の日を意味した。

「髪上げの儀」で、背中まで長く伸ばした髪を後ろで束ねて結いあげると、初めて一人前の女性として認められるのだ。

そして、この日を境に、王女には国の公式行事や定例の舞踏会への出席が義務づけられるのだ。
この日の来るのを一番待ちわびていたのは、今年六十五歳になる国王のファン一〇三世だった。
国王は、まだいくらか少女のあどけなさを残しているとはいえ、美しく成長したひとり娘の王女を、目に入れても痛くないほど溺愛していたからだ。
高年になってやっと恵まれた王女だけに、無理もなかった。
それだけに王は、できるだけの贅をつくして、十六回目の誕生日を祝ってやりたいと思っていたのだ。
その日が近づくにつれ、ローレシアやサマルトリア、また他の近隣の国々の王室や貴族からも、ぞくぞくと豪華な祝いの贈り物が届けられていた。
ところがこの夜、国境の偵察部隊から、つぎつぎによからぬ情報がもたらされた。
さすがに温厚な国王も顔を曇らせ、眉間に深いたてじわを寄せた。
世界征服をもくろむ邪教徒の大神官ハーゴンが、魔界の悪霊の神々と手を組んだ、というのだ。
ムーンブルクの南方に、年中雪をかぶったぶきみなロンダルキア山脈が、巨大な大陸のようにそそり立っている。
四方を険しい山脈に囲まれたこの荒涼とした一帯は、ムーンブルクの国とほぼ同じ広さを持ち、ロンダルキア大陸のおよそ三分の一を占めている。

その山脈の奥深いところに邪教徒の神殿が祀られているというのは、昔からよく知られていたことであった。だが、その正体は謎のベールにつつまれたままだった。

一〇年ほど前、この宗派にハーゴンなる者が現れ、自らを大神官と名乗って世界征服に立ち上がったという情報がもたらされたことがあった。

ムーンブルクは警戒を強め、攻撃に備えた。だが、そのときは幸いなにも起きなかった。

また、ここ数年、ハーゴンの配下の者たちが各地で活発な布教活動を始め、その勢力を急速に拡大しているという情報が、何度もムーンブルク城にもたらされていたのだ。

そのハーゴンが、魔界の悪霊の神々と手を結んだのだ。

国王は、大きく溜息をつくと、ただちに将軍たちを招集し、国境と城下や城内の警備をさらに強化するように命じ、姉妹国のローレシアとサマルトリアにも至急この情報を伝えるよう指示した。

そして、王女セリアの悲しむ顔を想像すると心が痛んだが、「髪上げの儀」と「戴冠の儀」を身内だけで行い舞踏会を中止する、と侍従長に告げたのだ。

ファンドリアンのファンは、ムーンブルク語の古語で「月」を意味し、ドリアンは「見張る者」または「観察者」を意味する。

また、ファンドリアン家には、「ムーンブルクに災いのあるとき、それは必ずや南方のロンダルキア山脈より来るだろう」という伝承が残っていた。

それだけに、昔から、ロンダルキア山脈には眼を光らせてきたのだ。

それが、代々国王の務めでもあった。

だが、敵の動きはすばやかった。

数日後、ムーンブルク地方は突如うだるようなはげしい熱波に襲われた。

夜になっても気温が下がる気配がなく、じっとしていても玉のような汗がしたたり落ちてきた。

城下の町の人々は、寝苦しさに悶々とし、兵士たちもまた緊張感を失っていた。

そこを、大神官配下の魔物の大軍団と巨大化した怪獣の群れが襲ったのだ。

強固な城下の門をあっという間に突破した魔物の大軍団は、怒濤のように城壁の町に雪崩こんで、つぎつぎに火を放った。

虚をつかれた警備の兵士たちは、態勢を整える余裕すらなく、慌てて町の奥にそびえている城にむかって後退するしかなかった。

魔物たちは、着の身着のまま飛び出した町の人々に容赦なく襲いかかった。

女性や子供の断末魔の悲鳴があちこちから轟き、無数の血飛沫がいたるところに散って、町は地獄と化した。

魔物や怪獣たちは、残忍な笑みを浮かべながら、逃げ惑う人々の胴や腕を喰い千切り、首を切り落とし、鋭い爪で背中を掻き裂いた。

なかには、死体の血を吸いあさる獰猛な怪獣までいた。

ただちに城門が開かれ、城から援軍が出陣し、必死に抗戦した。
だが、敵の相手ではなかった。魔物の大軍団と巨大な怪獣の群れは、一瞬のうちに、援軍を血祭りにあげると、勢いよく城に雪崩こみ、城のなかにも火を放った。
城の窓という窓から、一斉にすさまじい火の粉が噴き出し、一瞬にしてムーンブルク城はまっ赤な炎につつまれた。
兵士たちは必死に抗戦した。だが、魔物たちは咆哮をあげて襲いかかり、斬り殺した兵士たちの無数の死体を踏みつけながら、いっきに城の中枢部へと突入していったのだ。
そして、人口一万二〇〇〇人を数えた城壁の町と、名城の名をほしいままにした荘厳華麗な美しいムーンブルク城は、翌日の昼まで燃えつづけたという――。
こうして、ファンドリアン家とムーンブルクは、一夜にして平和と栄華を謳歌した長い歴史にあっけなく終止符を打った。
ムーンブルク暦二〇〇三年、ローレシア暦二一七年の、暑い夏のことであった。
瀕死の兵士の早馬が、ムーンブルクのはるか北東にあるムーンペタの町にたどり着いたのは、それから九日後の夜明け前のことであった。
『ムーンブルク壊滅・国王以下全員討死』――の報に、町は騒然となった。
ただちに、通信用の二羽の伝書鳩が、まだ薄暗い東の空にむけて放たれた。

第一章　勇者ロトの末裔たち

ローレシア大陸の東側半分を占(し)めるローレシア国。

その中央を、東西を分断するように、南北に長いローレシア山脈が走っている。

この山脈の東側には、荒涼(こうりょう)とした未開の地がつづいている。

だが、その西側には、緑豊かな丘陵(きゅうりょう)地帯が広がっていて、ローレシア山脈を源流とする水量豊かなローレシア川が、この丘陵地帯をゆったりと縫(ぬ)うように流れて、西の海へと注いでいる。

この丘陵地帯のほぼ中央の、ローレシア川の川岸に、この国の政治、経済、文化の中心として栄えている、人口一万八〇〇〇人のローレシアの町がある。

そして、この町と緑豊かな丘陵地帯を見おろすように、丘(おか)の上に、ひときわ美しい白亜(はくあ)の城がそびえている。

およそ二〇〇年前、勇者アレフが十五年もの歳月(さいげつ)をかけて築城したローレシア城だ。

このローレシア城に、伝書鳩によって予期せぬ凶報(きょうほう)がもたらされたのは、瀕死の兵士の早馬がムーンペタにたどり着いた、その夜のことであった。

1　ローレシア城

カーンカーンカーンカーンカーン——！
突然、真夏の夜空に、けたたましい警鐘が響き渡った。
ローレシア城の緊急招集の鐘だ。
重臣たちは、血相を変え、われ先にと宮殿の謁見の間へ急いだ。
宮殿の玄関から謁見の間までつづく長い回廊には、壮大な絵が描かれている。
勇者アレフの物語だ。旅立ちから始まって、魔物との闘い、そして竜王との闘いとつづいて、アレフガルド城に凱旋して終わっている。
アレフの死後、アレフ二世が高名な絵師に命じて、二〇年がかりで造らせたものだ。
駆けつけた重臣たちに、国王アレフ七世が、『ムーンブルク壊滅・国王以下全員討死』の報を告げると、重臣たちは悲鳴にも似た驚愕の声をあげ、顔を凍てつかせた。
あまりの衝撃に、言葉を失い、二の句が継げなかった。無理もなかった。
ムーンブルクとローレシアとサマルトリアの三国は、定期的に国防会議を開いて情報を交換していた。その中心的役割を担っていたのがムーンブルクだったのだ。
当然、大神官ハーゴンが不穏な活動をしていることも数年前から分かっていたたし、ハーゴン

が魔界の悪霊の神々と手を結んだという情報も、つい数日前に伝書鳩が運んで来たばかりだった。
また、地理的条件から、ハーゴンに対して一番警戒心の強かったムーンブルクが、ローレシアやサマルトリアよりもはるかに強力で勇敢な戦闘部隊を擁していたのだ。
その強国ムーンブルクの居城と城下が、ハーゴン配下の魔物の大軍団によって、一夜にして壊滅したのだ。
重臣たちのだれもが、自分の耳を疑った。
謁見の間には、いいようのない重苦しい空気が流れた。
「父上！」
まっ先に口をきいたのは、国王アレフ七世のひとり息子である、若き王子アレンだった。
アレンは、今年十六歳を迎えたばかりだ。
まだ、少年のあどけなさを残しているが、きりりとした顔立ちと、聡明そうな目、意志の強そうな口許は、勇者ロトとアレフの血をひく者にふさわしかった。
「ぼくが行きます！　ぼくが行って大神官ハーゴンを倒して来ます！」
重臣たちは、驚いて互いに顔を見合わせた。
「父上！」
アレンは、アレフ七世の返答をうながした。

その目には確固とした強い意志と決意があった。
アレフ七世もまた、じっとアレンを見つめた。
今年五〇歳を迎え、髪に白いものが目立つようになったが、まだ四〇半ばにしか見えない若さを保っている。と、アレフ七世の後ろに控えていた老執事が、
「な、な、なにをおっしゃいます、アレンさま！」
慌てて叫んだ。
アレフ七世の誕生以来、五〇年もの長い間、ずっと宮殿に仕えてきたセマルゼだ。
アレフ七世とアレンの二代にわたって王子の面倒を見てきたセマルゼは、二人のもっともよき理解者でもあった。
「もしものことがあったら、どうなさるおつもりです！　この爺、命に代えてもそのようなことはさせませぬぞっ！」
「あなたさまは、このローレシアのたったひとりの王子なのですぞ！」
「そうです！　自分のお立場をよくお考えくだされ！」
「アレンさま！」
他の重臣たちも、口々に反対を唱えた。
「じゃあ、このままじっとしていろって言うのかっ⁉　ムーンブルクが壊滅させられたんだぞっ！　黙っていたら、他のところも襲われるかもしれないんだ！　今こうやっている間にもな

っ！」
アレンはそういうと、アレフ七世に詰め寄った。
「父上！　行けと命じてください！」
だが、アレフ七世は肩で大きく溜息をつくと、さとすようにいった。
「アレンよ。みなのいう通りだ」
「父上っ！」
「おまえの気持ちは分かる。だが、おまえをやるわけにはいかんのだ」
「そ、そんなに心配なら――！」
アレンは、隅に控えていた連隊長のルチアを見た。
ルチアは、ローレシアで一番剣の腕の立つ男だ。その腕と度量が認められて、弱冠二十七歳で連隊長に抜擢された、いわば、エリート中のエリートだ。
また、ルチアはアレンの剣の師範でもあった。いつの日か、ルチアの腕前を越えたいと、アレンが密かに目標にしている男でもあった。
だが、「ルチアと一緒に行かせてください！」といおうとして、アレンは思わずその言葉をのみこんだ。先日、ルチアは結婚したばかりの美しい妻を連れて、アレンのところに懐妊の挨拶にやって来た。その幸せそうな二人の笑顔を、思い出したからだ。
「とにかく、だれがなんといおうと、ぼくは行きます！」

「ならん！　わしの命令は絶対だっ！」
アレフ七世は、アレンに対して、初めて大声をあげた。
この十六年間、一度もなかったことだ。
アレンは、キッとアレフ七世をにらみつけると、そのまま踵を返し、扉を開けて飛び出して行こうとした。
「アレンッ！」
慌ててアレフ七世が呼びとめた。
「おまえはいずれわしの跡を継いでこのローレシアを守っていかねばならんのだ！　それが、王子として生まれたおまえの使命だ！」
「――！」
アレンは、哀しそうにアレフ七世を見ると、乱暴に扉を閉めた。

一時間後――。
城内のいたるところに篝火がたかれ、武装した五〇〇名の近衛兵と戦闘部隊が、城壁や城門を固めた。
同時に、六〇〇名の戦闘部隊が、城下を守るために、広場や、町のおもな通りや、街道に通じる外門を固めた。

町はいつものように、夕食後の夕涼(ゆうすず)みの散歩を楽しむ人や、酒場(さかば)でたむろしている男たちで賑(にぎ)わっていたが、『ムーンブルク壊滅』の報が流れると、人々は慌てて自分の家に飛んで帰った。

人通りの消えた通りや路地を、戦闘部隊の隊列が慌ただしく駆(か)け抜(ぬ)けて行く。

夜空に響き渡る軍靴(ぐんか)の音が、家のなかでじっと息を殺して不安におののいていた人々の恐怖(きょうふ)を、一層かき立てた。

そして、アレフ七世の伝令を持った早馬が、蹄(ひづめ)の音もけたたましく国中の町や村へ飛んで行くと、街道と町をつなぐ強固な外門の扉がぴたりと閉じられた。

建国以来一度として閉じられたことのなかったこの外門は、ローレシアの平和の証(あかし)でもあったのだ。

また、この外門のアーチの上に、『訪れる者にやすらぎを――。立ち去る者に幸いを――』と、楔形文字(せっけいもじ)の短い言葉が刻まれている。

すべての人々に開かれた町であることを願った勇者アレフが、ミトラ教の聖書の一節からとった言葉だ。

その外門が、二一七年目にして、初めて閉じられたのだ。

アレンは、宮殿の三階にある自分の部屋(へや)の窓から、慌ただしい兵士たちの動きを見ながら、自

分の体を流れている勇者ロトとアレフの血があらぶるのを、押さえきれないでいた。
アレンは、四年前の『ロト祭』で会ったファン一〇三世の温厚な顔と、気品のある王妃の美しい笑顔を思い出した。そして、あの可愛い王女セリアのことも——。
だが、どうしてもアレンには、セリアが死んだとは信じられなかった。
アレンは、『ロト祭』で二度セリアと会っている。二人が六歳のときと十二歳のときだ。
『ロト祭』は、勇者ロトの「勇気」と「正義」と「平和を愛する心」永久に讃えるために、六年に一度アレフガルドの王都ラダトームで国を挙げて行われる盛大な祭りだ。
その祭りには、ローレシアやサマルトリアやムーンブルクからも、ロトとアレフの末裔たちが集まることになっていた。
そして、ラダトーム城で行われる誓いの儀式で、参列者たちは、「勇気」と「正義」と「平和を愛する心」を、勇者ロトとアレフに誓うのだ。
四年前の十二歳のとき——。
アレンとセリアは、儀式のあとラダトーム城をこっそり抜け出して、二人っきりでラダトームの町を見物に出かけたことがあった。
セリアが、どうしても行きたいといって、だだをこねたからだ。
そのとき、セリアが夜店のおもちゃ屋で売っていた安物の翠色の小さなペンダントが気に入って、そのペンダントを二つ買うと、

「二人だけの秘密よ——」
と、そのひとつをアレンにくれたのだ。
それ以来、アレンはそのペンダントを胸からはずしたことがなかった。
アレンは、胸のペンダントをそっと手でつつんだ。
魔物たちに襲われさえしなければ、今日がセリアの十六回目の誕生日だったのだ。ちょうど今ごろ、その祝いの宴が賑やかに行われていたはずだった。
そう思うと、なおさら怒りがこみあげてきた。
「くそっ、ハーゴンめっ！」
アレンは、ペンダントをぐっと強く握りしめると、机にむかって羽ペンをとった。
すでに、心は決まっていた。

『父上、ぼくのわがままをお許しください。
必ず大神官ハーゴンを倒して来ます。
かつて、勇者ロトやアレフが、戦ったように——』

紋章入りのまっ白な便箋に、力強い字で書き終えると、アレンは心のなかで読み返した。
そして、最後の一行を、自分にいい聞かせるようにつぶやいた。

「かつて、勇者ロトやアレフが、戦ったように――」

2　脱出

その真夜中のこと――。

宝物殿の前は、いつも番をしているはずの近衛兵の姿もなく、ぶきみなほどひっそりと静まり返っていた。

他の近衛兵たちと一緒に、城内の警備に駆り出されたからだ。

アレンは、セマルゼの留守をねらって執務室から持ち出した鍵で、宝物殿の扉の頑丈な鉄の錠を開けた。

勇者アレフが、三人の子供に「ロトの鎧」と「ロトの楯」と「ロトの兜」を至宝として授けたという。

その至宝のひとつ「ロトの鎧」が、この宝物殿に収められているのだ。

勇者アレフが、竜王を倒すとき、身につけていたという伝説の鎧だ。

その鎧が、この宝物殿にあるというのは、城の者ならだれでも知っているが、アレンは今まで一度も見たことがなかった。

また、「ロトの楯」はサマルトリア城に、「ロトの兜」はムーンブルク城にあるのだ。

アレンに限らず、勇者ロトとアレフの血をひく末裔たちは、幼いころから『勇者ロトの伝説』と『勇者アレフの伝説』を聞かされて育つ。また同時に、絵本や伝記を暗記するぐらい繰り返し読まされるのだ。

かつて、神より光の玉を授かった勇者ロトが、大魔王を倒してアレフガルドに平和をもたらした――という『勇者ロトの伝説』と、その光の玉を奪ってアレフガルドを暗黒の世界に陥れた悪の権化・竜王を、勇者ロトの血をひくアレフが倒し、ふたたびアレフガルドに平和をもたらした――という『勇者アレフの伝説』を。

その伝説を聞かされるたびに、祖国や同盟国が危機に陥ったときには、かならず「ロトの鎧」と「ロトの楯」と「ロトの兜」を身につけて立ちあがろう、とアレンは子供のころから決めていたのだ。

その三つの至宝を身につければ、勇者ロトと勇者アレフが、同じ血をひく自分に、なにか見えない偉大な力を与えてくれそうな気がしたからだ。

さらにもうひとつ、「ロトの剣」も持ちたいと思っていた。

だが、勇者アレフが竜王との闘いで失った「ロトの剣」は、どこにあるのか見当すらつかなかった。

ローソクの明かりを頼りに奥に入ると、目もくらむような豪華な装飾品や、高価な宝石類、さらに名画、彫刻、陶器などの美術品や工芸品、珍しい異国の絹織物などが、ところ狭しと陳列さ

れていた。

そして、中央の陳列棚に、鏡のような光沢の立派な鎧がひとつ飾ってあった。

その鎧を見て、アレンは思わず目を見張った。

両肩に、美しい翼の飾りがほどこしてある。

胸には黄金色の美しい紋章があった。

不死鳥が雄々しく翼を広げて飛翔している紋章だ。

ロトのしるしだ。

「こ、これが、ロトの鎧かっ――！　これを着て勇者ロトとアレフが悪と戦ったのか――！」

アレンは、そっと手にとってみた。ずしりと重かった。

そして、ゆっくりとそれを身につけた。

ぴたっと体に吸いつくような感触がした。と、ぶるぶるっ――と、全身が震えた。

不思議な力が伝わってきた。

その力が、全身を駆けめぐり、胸の奥から熱い闘志がこみあげてくる。

「よーし！」

アレンは、肩で力強く息をすると、元気よく飛び出した。

そして、鍵をもとの場所に返すと、執務室の窓から庭に飛び出して、慌てて植えこみのなかに身を隠した。ちょうど、警備兵の隊列が軍靴を響かせてやって来たのだ。

隊列が通り過ぎるのをたしかめると、アレンは自分の部屋の下へ行き、植えこみに隠しておいた外出用の頑丈な革の長靴にはき替えた。

そして、旅行用の大きな革袋を肩にかけ、立派な長剣を腰に差した。

あらかじめ用意して、窓からひもで吊るして、落としておいたのだ。

革袋には、旅費や旅用のマントの他に、厨房からかすめた干し肉などの保存食や、旅に必要なさまざまな道具が詰めこんであった。

長剣は、十六歳の誕生日にアレフ七世から引き継いだ大切なものだ。

その柄にはアレフガルドのラルス家の紋章と同じ紋章である、天翔の獅子の像が刻んであり、その獅子の目には赤い宝石が埋めこまれている。

十六歳になると、ローレシア城の後継者の証として、代々この剣が引き継がれるのが、ローレシア城の習わしになっていたのだ。

そして、アレンの後継者が十六歳を迎えたとき、アレンもまたこの長剣を引き継がなければならないのだ。

当家の紋章が、ラルス家とまったく同じなのは、勇者アレフの妻ローラが、ラルス家の王女だったからだ。

ローレシアを建国したその年、アレフがローラの父ラルス十六世の承諾を得て、同じ紋章に決めたのだ。

本来なら、アレフがラルス家を継がなければならなかった。
だが、その申し出を断り、新天地を求めてローレシア大陸に来たのだ。
あえてラルス家と同じ紋章にしたのは、ラルス十六世を想うアレフのやさしさからだった。
準備を終えたアレンは、すばやく厩舎の方へと走った。
ローレシア城は、二重の城壁に守られていた。
美しい宮殿を守る城壁と、城門や兵舎、武器庫、厩舎などを守る城壁だ。その東西南北の四隅には円塔の櫓がそびえていた。
厩舎のなかは、がらんとして、静まり返っていた。兵もいない。
だが、運よく葦毛と栗毛の二頭の馬が残っていた。
おそらく、緊急用に残しておいたのだろう。
アレンは、葦毛の手綱をとった。葦毛のほうが元気そうな若駒だったからだ。
そして、兵士たちの動きに注意しながら、葦毛の馬を引いてこっそり裏門へむかった。
裏門は、背後に鬱蒼とした木々の険しい山が迫っているので、今までほとんど開けられたことがなかった。
二人組の近衛兵が、裏門の見回りに来たが、すぐ立ち去った。
警備の主眼は、眼下の城下や、そのむこうに広がる丘陵地帯におかれているのだ。
魔物とはいえ、裏山から襲ってくるのは、困難だと判断したのだ。

アレンは、裏門を抜けて、険しい裏山に踏み入った。
三時間後——。
やっと裏山を越えたアレンは、馬でローレシア川を渡った。
そして、ローレシア街道に出ると、ローレシア城のある東の方角を振りむいた。
はるかむこうの山の稜線に、美しいローレシア城の姿と、城下の荘厳華麗な大聖堂の塔が小さく見えた。
夏の朝は早い。東の空は、すでにうっすらと明るくなりかけていた。
アレンは、まず「ロトの楯」があるサマルトリア城に行くことに決めていた。
アレンは、サマルトリアのある北西の方角を向くと、
「そりゃあっ！」
力強く馬の腹を蹴った。

3　サマルトリア

アレンは、ひたすら馬を飛ばした。
三日後——。
ローレシア街道は内陸を通る北街道と、海ぞいを通る南街道に分れていた。

アレンは、迷わず北街道を選んだ。
南街道を西へむかえばローレシア第二の都市リリザの町へとつづき、さらに南街道を北上すれば、ローレシアとサマルトリアの国境でふたたび北街道と合流する。
これらの街道筋には、たくさんの宿場町や村があった。
アレンは、乗馬の腕にも優れていた。
だが、長時間乗りつづけたのは初めてだった。
走り出して、数時間もしないうちに、めまいとはげしい吐き気に襲われた。
それでも必死に手綱にしがみついて飛ばした。
だが、四日目ぐらいから、なんとか慣れてきた。
ローレシアを旅立ってから八日目の昼過ぎのこと。
アレンは、やっと国境の町グラハに入ろうとしていた。
グラハは、北街道と南街道の合流地点で、ローレシア街道最大の宿場町だ。
アレンは、ここへ来るまでに、すでに三度魔物に襲われていた。
魔物といっても、大昔からローレシア大陸に棲息している魔物だ。襲われたのは、三度とも馬を休めているときだった。
最初の魔物は、二匹のスライムだった。
ぶよぶよの、足のない、まん丸いスライムが、鋭く尖った頭の先を突き出して、体当たりして

きたのだ。見かけによらず身軽で獰猛だ。
だが、アレンの敵ではなかった。アレンの剣の腕前は、連隊長のルチアを別格とすれば、ローレシア城内でも一目置かれていたのだ。
アレンは、剣を振りかざすと、一刀のもとに胴をまっ二つにし、返す刀でもう一匹も斬り裂いた。スライムは、見る見るうちにどす黒い血の塊になって、いきなり爆発してあたり一面に飛び散った。
二度目は、ぬめぬめした粘着性の皮膚を持つ巨大な大なめくじだった。
アレンと同じくらいの大きさで、粘着性の液体を吐いて、襲いかかってきた。
だが、見かけほどは強くなかった。吐きかける液体をかわしながら、めった斬りにすると、とたんにどろどろに溶け、やがて地面に吸われて消えた。
一番手間どったのが、三度目に襲ってきた、巨大なアイアンアントだった。
鉄のように強固な表皮を持つ大アリ属のこの魔物は、何度斬りつけても凶暴なアゴでしつこく襲いかかってきた。
だが、アレンはアイアンアントの足を斬り落として体勢を崩させると、すばやく両眼を突き刺した。
そして、アイアンアントがひるんだ一瞬のすきに、高々と宙に飛び、思いっきり剣を振りおろすと、アイアンアントの首は勢いよく地面に転げ落ちた――。
グラハの町の要所要所には、五〇人ばかりのローレシアとサマルトリアの連合駐屯部隊の兵士

たちが分散して、魔物の襲撃に備えていた。

アレンは、兵士たちが制止するのもきかず、馬を走らせた。

町は、死んだようにひっそりと静まり返っていた。

街道筋にびっしりと軒を並べる宿屋や食堂、食料品店、肉屋、雑貨屋、道具屋――それらのすべての店が、ぴたりと戸を閉めていた。

あっという間に、グラハの町を駆け抜けたアレンは、さらに馬を飛ばした――。

そして、グラハを通過してから六日目の夕方。

なだらかな丘陵を越えると、前方に、まっ赤な夕日を浴びながら、森のなかに悠然とそびえている美しい城が姿を現した。

リンド家の居城サマルトリアの城だ。

おそらくサマルトリアもローレシアと同様、戦闘部隊や近衛兵が城内や城下の町の要所の警備についているはずだ。

だが、人口一万三〇〇〇人の城下の町並みが見えてくると、アレンは街道から北にそれて、馬をおりた。

そして、馬を引き、草を掻き分けながら、鬱蒼とした森の中へ入って行った。

森は、サマルトリア城の背後に連なる山までつづいていた。

アレンは、夜になるのを待ってサマルトリアの城に忍びこむつもりだった。

ひょっとしたら、通信用の伝書鳩が、「アレンが来たら引きとめろ」という知らせを、とっくにローレシアから運んでいるかもしれない、と考えたからだ。

もしそうなら、直接町に入るのは危険だ。外門で警備の兵士たちに捕まってしまうからだ。だから、ローレシアから知らせが届いているかどうかを、まずサマルトリアの王子のコナンにたしかめようと思ったのだ。

城壁を見あげるところまで近づくと、日はとっぷりと落ちていた。

城壁のなかには篝火がたかれ、兵士たちの動き回る姿が見えた。

アレンは、馬の手綱を木の幹にしっかりと結わえると、月が城の上空にあがるのを待って、慎重に城壁を登り始めた。

そして、兵士たちのすきを見て、すばやく城壁のなかに忍びこんだ。

城内や宮殿のことなら、どこになにがあるか、ほとんど知っていた。

というのは、ラダトームで行われる『ロト祭』への行き帰りに、必ずサマルトリア城に一〇日ほど滞在していたからだ。

宮殿の二階の窓に明かりがひとつ灯っていた。

それは、コナンの部屋ではなく、隣の王女マリナの部屋だった。

マリナはコナンの二歳下の妹だ。リンド六世の子供はこの二人だけだ。

二人の母である王妃シーナは、マリナを出産したあと亡くなっていた。

裏口からこっそり宮殿に忍びこんだアレンは、すばやく二階に駆けあがると、マリナの部屋の扉をノックした。
「だれ？」
なかからマリナの声がした。
「だれなの？」
しばらくして、マリナがいぶかしげに扉を開けた。
と、すばやくアレンはなかに潜りこんで、悲鳴をあげようとしたマリナの口をふさいだ。
「ぼくだよ。アレンだ」
アレンは、声を殺していった。
「――!?」
苦しそうにもがいていたマリナが、思わずアレンの顔を見た。
とたんに、脅えていたマリナの目がぱっと輝いた。
アレンが、ほっとして手を離すと、
「アレン――!? うれしい！　会いに来てくれたのねっ！」
いきなりマリナが抱きついた。
「あたしね、ずっとあなたのこと思っていたのよ」
「えっ――」

マリナの熱いまなざしにアレンはうろたえた。
この前会ったのは、マリナが十歳のときでまだ子供だった。
だが、今年十四歳になるマリナは、すっかり美しい少女に成長していた。
「また、大きくなったのね」
マリナは、まぶしそうにアレンを見あげた。
「それに、たくましくなったわ」
「マリナだってきれいになったよ」
「ほんと！　うれしい！」
「それより、コナンはどこ？　コナンを呼んでくれないか？」
「それがねえ――」
とたんに、マリナは顔を曇らせた。
「行方不明なの」
「えっ⁉」
「セリアの敵を討つって飛び出して行ったのよ。ハーゴンを倒すって」
「い、いつ⁉」
「十四日前。ムーンペタからムーンブルクが壊滅したって連絡があった夜に――。おにいさま、セリアのこと愛していたから――」

「そうか――」
六歳のときの『ロト祭』で、アレンとコナンとセリアの三人は、初めて会った。
セリアは、そのころから可愛くて、セリアに一目惚れしたコナンが、会食している一同の前で、
「ぼく、大人になったらセリアと結婚するんだ！」と、宣言したことがあった。
アレンは、ふとそのときのコナンの顔を思い出した。
「でもねえ、あのおにいさまじゃねえ。からっきしだらしがないもん」
マリナは、コナンの剣の腕前のことをいっているのだ。
コナンの稽古嫌いはアレンでも知っていた。
「こんなちっちゃな虫だって怖がるくせに。身のほど知らずよ。死ぬために行ったようなもんよ。
ま、気持ちは分かるけど――」
マリナはマリナなりにコナンのことを心配しているのだ。
「あ、あのさ、ぼくのことでローレシアからなにかいってきてない？　国王がなにかいってなか
った、ぼくのこと？」
マリナは首を横に振った。
「なにかって？　なにをしたの？」
「い、いや、知らなきゃいいんだ」
「今、おとうさま、おにいさまのことで、頭ぐちゃぐちゃなの」

「そうか――。実は、ぼくもハーゴンを倒すために旅に出たんだ」
「えーっ!?」
「その途中で寄ってみたんだけど――」
「なーんだ。そうだったの」
と、マリナはがっかりして、ちょっとすねてみせると、
「あっそう――そうなの――」
上目使いで探るようにじっとアレンを見て、いきなり大声で叫んだ。
「分かった！　アレンも内緒で出て来たのね!?」
アレンは、ドキッとした。
「やったあ！　図星ね!?」
「ち、違うって！　違うってば！」
マリナのカンのよさに妙に感心しながらも、慌てて否定した。
「ほんと、アレンはうそが下手なんだから」
マリナは、自信たっぷりに白い歯を見せると、からかうようにいった。
「だって、いくらアレンのおとうさまでも、お許しするわけないじゃない！　それによ、なんで!?
なんで、泥棒みたいにこっそり入って来たの!?」
「そ、それは――」

アレンは、うろたえた。そのときだった。
「おい、マリナ！　おったぞ！　コナンのやつがなっ！」
と、甲冑に身を固めたリンド六世が、大きな体を揺すりながら、嬉々として飛びこんで来た。
「リリザにおるんだそうじゃ！　たった今連絡があった！」
「ねえ、おとうさま、アレンもハーゴンを倒しに行くんですって！」
「アレン――!?」
リンド六世は、驚いてアレンを見た。
マリナにいわれて、やっとアレンがいることに気づいたのだ。
「ご無沙汰しております――」
アレンは、丁重に頭をさげて挨拶をした。
「ま、まことか!?　ハーゴンを倒しに行くというのは!?」
リンド六世は、あ然として見つめた。
「はい」
「内緒でお城を出て来たんですって！」
また、横からマリナが口をはさんだ。
「なにっ!?」
とたんに、リンド六世の顔が険しくなった。

「ち、違います！」
アレンは、思わず嘘をついた。
「しかと、父上のお許しを得ました」
リンド六世は、じっとアレンを見つめたまま、大きく肩で息をすると、
「まあよい。話はあとで聞こう。それより、しばらく見ないうちにすっかり立派な若者になったな」
と、顔をほころばせた。そして、
「おなかが空いとるんじゃろ？」
と、鏡台の横の小さな円卓に置いてあった陶器の鈴を鳴らして侍女を呼んだ。

4　親心

一階の食堂の食卓につくと、サマルトリア産の地鶏のシチューと温かいパンが運ばれてきた。
おいしそうな匂いが鼻をつき、アレンは急に空腹を覚えた。
十四日間、食事らしい食事をしていなかったのだ。
アレンは、むしゃぶるように食べ始めた。
食べながら、アレンは、目の前にマリナと並んで座っているリンド六世に、本当のことをいお

うかどうか迷っていた。だが、いずれ嘘はばれてしまうのだ。
アレンは、大きく溜息をつき、決心した。
「実は——」
食べる手をとめて、リンド六世を見た。
「マリナのいったことは本当なんです。ぼく、父上や執事たちに反対されたので、黙って抜け出して来たんです」
「ほら、みなさい」
マリナは、悪戯っぽく笑った。
「わたしも一緒について行っちゃおかな」
「マリナッ!」
思わずリンド六世が大声でたしなめた。そして、
「ま、どうせそんなことじゃないかと思っておったよ」
と、アレンにいった。
「えっ?」
「実はな、先日、アレフ七世から言づけが届いたんじゃよ」
「えっ!? じゃ引きとめろっていって来たんですね!?」
「いや——アレンが行ったら、くれぐれもよろしく——ってな」

「よ、よろしくって!?」
アレンは、一瞬自分の耳を疑った。
「ということは、お許しになったということですか?」
「そうなるかな」
「で、でも、どうして――!? あんなに反対したのに――!?」
アレンには、どうしても信じられなかった。
「もしアレフ七世がおまえと同じ立場だったら、きっと同じことをするだろうな。どんなことをしてでも」
「父上が――?」
「きっと、おまえのなかに、若いときの自分を見つけたからかも知れんな。それで許したのじゃろう。立場上は反対であっても、内心嬉しかったのじゃよ。おまえが飛び出すのを、内心望んでいたのかも知れん」
「で、でも――」
「いや。アレフ七世はそういう男じゃ。わしは何十年もつき合っておる。彼の気心はだれよりも知ってるつもりじゃよ」
アレンは、ハーゴンを倒しに行くといったとき、「ならん! わしの命令は絶対だっ!」と、大声をあげて怒ったアレフ七世の顔を思い浮かべていた。

あの父上が、本当は内心嬉しかったんだろうか――。
もし――、もし、本当にリンド六世のいう通りだとしたら――。
本当にそうだったとしたら――。
アレンは、心のなかで感謝した――。
「それにしても――」
リンド六世は、じっとアレンの鎧を見つめていた。そして、
「見事な鎧じゃ――」
と、ぽつりとつぶやくと、
「ロトの楯が欲しいのじゃな」
と、何気ない口調でさらりといった。
「えっ？」
弾かれたようにアレンはリンド六世を見た。
「そのために寄ったのじゃな」
「ど、どうしてそのことが――!?」
「それぐらいのことはこのわしでも察しがつく。二〇日以上かかるところを、たった十四日ですっ飛んで来たんじゃからな。ロトの鎧を身につけりゃ、ロトの楯が欲しくなる。ロトの兜も、ロトの剣もな。このわしだって、ロトの血が流れておるからな。だが、残念ながら、ここにはロト

の楯はない」
「な、ないって!?」
「コナンじゃよ。コナンが持って行ったんじゃよ」
「コナンが!?」
「実は、アレン。頼みがある。リリザに行って、コナンを連れ戻してくれんか」
「えっ!?」
「どういうわけでリリザにおるのかさっぱり見当がつかんが、わしはアレフ七世のようにコナンを許すことができんのじゃよ。ロトの血をひく者として、恥ずかしいことかも知れん。だが、どうしてもできんのじゃ――。あの子の親としてな――」
いつの間にか、リンド六世の目から大きな涙が流れていた。
「わしは、コナンが出て行ってから、ろくに寝てないんじゃ。心配で心配でな――」
「でも、もしコナンが嫌だといったら――?」
「縄を巻いてでも、連れ戻してくれ。コナンは強情なところがあるから、後悔していても素直に帰って来れないでおるのかも知れん。たとえ、コナンの決意が固いとしても、コナンにはなにひとつできんじゃろう。体だって弱いし、ちょっとした病気でもすぐ寝こんでしまう子なんじゃ。とても、ハーゴンどころじゃない。あの腕前じゃ、その辺のスライムにだって、かないっこない。あの子が魔物に殺される夢に、何度うなされたことか。たったひとりでリリザに行ったようじゃ

が、あの子にしては奇跡に近いことなんじゃよ。あの子のことは、親のこのわしが一番よく知っておる。頼む、アレン。この通りじゃ！」
リンド六世は、涙をぬぐって、深々と頭をさげた――。

翌朝――。
町の外門まで送ってくれたリンド六世とマリナに別れを告げると、アレンは思いっきり馬の腹を蹴った。
ローレシア街道を走り去るアレンの馬を見送りながら、リンド六世は、はっきりと自分の覚悟を決めなければならないときが近づいていることを感じていた。
昨夜から、ずっとコナンのことを考えていた。
もし、コナンが帰らなかったらどうしよう。そのことばかりを考えていた。
だが、明け方。東の空にゆっくり昇ってきた美しい朝日を見て、ふと思ったのだ。
どうしてもコナンの意志と決意が変わらないなら、コナンの思うようにやらせるべきではないか――と。
「正義」と「勇気」と「平和を愛する心」がある限り、精霊ルビスが、そして勇者ロトとアレフが、守ってくれるのではないか――と。
コナンも、やっとそこまで大人になったという証なのだ。

コナンだって、勇者ロトの血をひく者なのだ。

もし不幸にも、命を落とすようなことがあったら、それはそれで運命として諦めよう。親として、子にしてやれることは、今はそれしかないのだ――と。

もし、コナンが帰ってこなくても――。

いつの間にか、なだらかな丘陵のむこうに、アレンの姿が消えていた。

一陣の風が、音を立てながら、通り過ぎて行った。

それでいいだろう、シーナ――。それで――。

リンド六世は、心のなかで亡き王妃に問うた。

そして、精霊ルビスと勇者ロトとアレフに祈りを捧げた。

どうか、勇者ロトの血をひく者たちの行く手に光を――と。

5　魔物たち

ぶきみにそびえるロンダルキア山脈――。

その山脈の南に位置する巨大な洞窟のなかでのことだ。

「なにっ、まだ王女の手がかりがつかめぬというのかっ！」

空色のローブに藍色のマントを身にまとった悪魔神官は、思わず近衛軍団の幹部たちをにらみ

つけた。ローブの胸には、魔鳥が飛翔する黒の紋章がある。大神官ハーゴンを崇める邪教徒の紋章だ。
悪魔神官は、大神官ハーゴン配下の幹部会議の議長で、幹部会と人間界の布教活動を行う地区本部全体を統轄する最高責任者なのだ。
ちょうど近衛司令官のベリアルが、その直属の部下であるバズズ、アトラス、アークデーモンらの連隊長と談合していたところに踏みこんで、ムーンブルク襲撃後の情報を問いただしたのだ。
この近衛軍団は、ハーゴンが魔界と手を結んだのち、戦闘部隊として魔界から派遣されてきた凶暴な軍団で、ムーンブルクを一夜のもとに壊滅した張本人たちだ。
昔からハーゴンに仕えて来た悪魔神官を中心とする人間の集団と、新たに派遣されてきたバズズを中心とする魔物の軍団は、ことあるごとに対立していたのだ。
悪魔神官の強い口調に、魔物軍団の連隊長たちが、さっと顔色を変えて悪魔神官をにらみ返した。
だが、さすがに司令官のベリアルだけは、悠然として薄笑いを浮かべたままだ。
今回のムーンブルク襲撃の目的は、ムーンブルクの王女を捕らえることであった。
そこで、近衛軍団は独断でいきなりムーンブルクを襲って、王女を強奪しようとしたのだ。
だが、どこを捜しても王女の姿はなかった。
近衛軍団は、焼け落ちた城下の町や城内に転がる無数の死体を調べたが、それらしきものも発

見できなかった。
結果として、ただ破壊と殺戮を繰り返したにすぎなかったのだ。
その後、手分けして王女の情報を集めたが、これといった手がかりをつかめないまま、今日に到ったのだ。
「そもそも、なんでわしに相談なしにムーンブルクを壊滅したのだっ!? ムーンブルクを襲うときは、このわしに相談すると約束したはずだっ! あれほど勝手に行動するなと忠告したではないかっ!」
悪魔神官はついに、我慢の限界に達したようだ。
「それをわれわれの苦労を水の泡にしおって! わが宗派の目的はむやみに人間を殺すことではない! 多くの人間をわれわれの組織に入れて悪の道へと導くのが目的なのだ! 悪の世界をこの世に構築するのが、大神官ハーゴンさまの教えなのだっ! 王女なしでどうやって邪神の像を手に入れられようぞ! 大神官ハーゴンさまに、なんといって報告すればいいのだっ!」
「黙れ! 黙れいっ!」
アトラスが、カッとなって恐ろしい目ですごんだ。
「人間の分際でわれわれに説教するというのかっ!?」
「な、なにっ!?」
「魔物の力は万能だ!」

「その通りだ！　われわれの力でなんとでもしてみせようぞ！」
と、バズズも怒鳴り声をあげ、
「貴様ら人間どもの指図なぞ受けん！」
と、アークデーモンも怒鳴った。
そのときだった。突然、澄んだ美しい音色が静かに流れてきた。
笛の音だった——。
いがみ合っていた一同が、思わず笛の音のする方を見た。
洞窟の横に大きな穴があった。
いわば、巨大な洞窟の窓のようなものだ。
その穴の先に突き出た岩に腰かけて、ひとりの若者が横笛を吹いていた。
腰まで伸びた長い髪が、首のところでひとつに束ねてある。
そのはるかむこうの西の険しい山脈に、まっ赤な夕日が今にも沈もうとしていた。
心にしみるような美しい音色だった。だが、どこか物悲しい旋律だ。
と、さっきまで悠然としていたベリアルが、とたんに顔を引きつらせて苛立ち始め、いきなり若者を怒鳴りつけた。
「ええいっ！　やめぬかっ！」
だが、若者は無視して、笛を吹きつづけた。

「やめいっ！　やめいっ！　やめいっ！　そんな音なぞ聞きたくもないわっ！」
ベリアルは、さらに怒鳴りつづけた。
いつも冷静なベリアルにしては珍しいことだった。
若者は、おもむろに唇から笛を離すと、くるりと振りむいた。
と、風が吹き抜けて、長い髪が揺れた。
日に焼けた黒い顔をしていた。だが、その目は氷のように冷たかった。
また風が吹き抜けて行った。
と、若者の姿が、風とともにすーっと消えた。
「ふんっ！　あんなものがいいとはふしぎなものよなっ、人間はっ！」
と、吐き捨てるようにいうと、悪魔神官を鋭くにらみつけた。
「とにかく、わしらはわしらの流儀で、大神官の手助けをするまで！　二度とわしらに指図するような真似は許さん！　よーく心にとめておくんだなっ！」
「うぬぬっ！」
悪魔神官は、キッと唇を噛みしめた。
握りしめた拳は、怒りにわなわなと震えていた。
だが、それ以上なにもいえなかった——。

6　王子コナン

国境の宿場町グラハまで戻ったアレンは、今度は南街道をまっすぐ南下した。
そして、サマルトリアを発ってから八日目の夕方、やっとリリザの町に着いた。
リリザの町は人口八〇〇〇人の、ローレシア国第二の町で、この地方の交易の中心地として栄えていた。
かつてはローレシア城の重要な出城だったが、北方にサマルトリアが建国されると、その役目を終え、城壁のなかに町がつくられたのだ。
城壁の門や町の要所には、およそ三〇〇人ばかりのローレシアの駐屯部隊が、魔物の襲撃に備えて警備していた。
だが、町のなかは活気があった。
すでに『ムーンブルク壊滅』の報から二〇日以上たっていたので、町の人々からはいくらか緊張感が消え、もとの暮らしに戻りつつあるようだった。
町には、中央にそびえる聖堂の前の広場を中心に四方に通りがのびている。
アレンは、町に三軒あるという宿屋を訪ねて、コナンを捜した。
三軒目のレンガ造りの小さな宿に行くと、玄関前に二人の武装した兵士が、所在なげにぶらぶ

らしていた。
よく見ると、コナンを追跡して来たサマルトリアの兵士だった。
ローレシアとサマルトリアの兵士たちの甲冑はほとんど同じで、わずかに額と胸の紋章が違うだけだっだ。
アレンは、自分の名を名乗り、リンド六世に頼まれてコナンを連れ戻しに来たと告げると、兵士たちはさすがにほっとしたようだ。
コナンは二階の部屋に閉じこもったままで、部屋に入ろうとすると、舌を噛むとか腹を切って死ぬとかいってわめき散らすので、ほとほと手を焼いていたのだ。
アレンは、兵士たちを外に待たせて二階へあがり、コナンの部屋の扉を叩いた。
「おい、コナン！　開けてくれ！」
「うるさーい！」
すかさずコナンの怒鳴り散らす声が飛んできた。
「とっととサマルトリアへ帰れ！　これ以上いたらクビだぞっ！」
「おい、ぼくだよコナン！　アレンだ！」
「アレン――？」
「そうだよ！　ローレシアのアレンさ！　さあ開けてくれよ！」
とたんに、コナンの声がしなくなった。

「おい、聞こえてるのか⁉　アレンだよ！　開けてくれ！」
しばらくすると、扉がほんの少しだけ開いて、コナンがそのすきまから顔をのぞかせた。
額のまんなかに、三日月の切り傷がある。一〇年前、アレンがつけたものだ。
ロト祭でラダトームに行ったときのことだ。アレンとセリアが遊んでいるところに突然コナンが飛びこんで来て、「セリアと仲よくするなっ！　決闘だっ！」と、おもちゃの剣を振り回したのだ。だが、アレンがすばやくかわして剣を取りあげようとしたとき、あやまって剣の刃先を額に突き刺してしまったのだ。驚いたセリアは突然泣き出してしまった。顔中が血まみれになるほどの大きな傷だった——。
コナンは、むっとしたままアレンを見あげていった。
「チェッ。また伸びやがったな——」
四年前に会ったときも、コナンの第一声が同じセリフだった。
アレンはたしかに十六歳にすればかなり大きい方だ。
コナンだって、決して小さい方ではない。
だが、どうもアレンの背丈に劣等感を抱いているようだ。
「なにしに来たんだよ？」
「そんないい方ないだろ？　四年振りに会ったんだぜ。開けろよ！」
「父上に頼まれて来たな⁉」

「ああ――。とにかく入れてくれよ」
「だめだ！」
コナンは扉を閉めようとした。
だが、一瞬早く、アレンが靴の先を扉のすきまにはさんでいた。
ほんのしばらく扉を引っ張り合ったが、アレンが強引に扉を開けて部屋に入ると、コナンは不貞腐れてベットに仰向けになった。
「ぼくは、帰らないぜ。セリアのかたきを討つまではなっ」
「だったら、なぜこんなとこに閉じこもってんだよ」
「――」
コナンは、むっとしてアレンをにらんだ。
「おまえにぼくの気持ちなんか分かるか」
「どうして？」
「どうしてって――ここを動けないんだよ」
そういってコナンは唇を噛んで押し黙った。
だが、しばらくしてやっと口を開いた。
「今回ほど、腕の立つやつが羨ましいと思ったことはないぜ――」
そして、ぽつりぽつりと話し始めた。

サマルトリア城を出たコナンは、ローレシア大陸に渡るためにローラの門を目指して馬を飛ばした。
だが、その夜いきなり魔物の山ねずみに襲われ、なんとか逃げたが、深い森のなかで迷ってしまったのだ。
その後、何度も巨大な毒蛇のキングコブラや大アリのラリホーアントなどの魔物に襲われ、ただひたすら逃げまくっているうちに、方向違いのリリザの町にたどり着いたのだ——。
「とにかくさ、一度サマルトリアへ帰ろう。おじさん、すごく心配してたぜ。夜も眠れないってな——」
「まさかおまえ、父上の涙に騙されたんじゃないだろうな？」
「騙された？」
「あれで結構芝居がうまいのさ。ちょっと臭いけどな」
そういいながら、コナンの目はアレンのロトの鎧に釘づけになっていた。
「アレン。それ、もしかして——」
「ロトの鎧だ」
「やはりそうか——。ま、まさか、おまえ——!?　おまえもハーゴンを倒すために城を出たんだな!?」
「い、いや、それは——」

アレンは、いい澱(よど)んだ。
コナンを連れ戻すには、そのことをコナンに知られてはまずいと思っていたのだ。
「だって、六歳のときのロト祭で、セリアとぼくにいったんだぜ。もし、なんかあったら城にあるロトの鎧をつけて立ちあがるって。そうか、分かったぜ！　おまえ、ぼくを城に帰してひとりでハーゴン倒しに行く気だなっ⁉　おまえってやつは、いつだってそうだ！　いつだって、ひとりでいい子になりたがるんだ！」
「そ、そんなんじゃない！」
「ぼくは帰らないぞ！　二度と帰らない覚悟で飛び出したんだからなっ！」
「だけど、ぼくは約束したんだ！　おまえを連れて帰るって！」
「そんな約束なんか破っちまえ！　ぼくはセリアのかたきを討つんだ！」
いきなりコナンは剣を抜いて身構えた。
「な、なにするんだ⁉」
「どうしてもおまえひとりで行くなら、ぼくを斬ってから行けーっ！」
そう叫びながら猛然(もうぜん)とアレンに斬りかかった。
「うわあっ！」
アレンは、慌ててかわして逃げた。だが、
「だれがひとりでなんか行かせるもんかっ！」

コナンは、剣を振り回しながらなおも斬りかかった。
「ぼくだってな、ロトの血が流れてるんだ！」
「やめろ、コナン！」
アレンは、必死にかわしながら叫んだ。
「くそっ！　くそっ！　くそっ！」
コナンは、力任せにメチャクチャ剣を振り回した。
そして、アレンを壁(かべ)に追いつめると、
「はあ、はあ、はあ――！」
コナンは、肩ではげしく息をしながら、剣を握りなおして身構えた。
「分かった、コナン！　そこまで言うなら一緒に行こう！」
しかし、コナンは信じようとしなかった。じっと鋭い目でにらみつけたままだ。
「本当だ！　信じてくれよ！　一緒にハーゴンを倒そう！　セリアのかたきを討つんだ！」
コナンはまだにらみつけていた。だが、おもむろに剣をおろすと、
「よし、約束したぜ！」
といって、ベットの下から鏡のような光沢の楯を取り出して、
「これがそのしるしだっ！」
アレンに放り投げた。

「こ、これはっ!?」
アレンは、目を見張った。
楯の回りに黄金色の縁どりがしてあり、中央には同じ黄金色の美しい紋章があった。
不死鳥が翼を広げて飛翔している紋章だ。
ロトの鎧の胸にある、ロトのしるしと同じ紋章だった。
「こ、これがロトの楯か――」
アレンは把手を握りしめた。
ぴたりと手に吸いつくような不思議な感触がした。
「今のぼくには邪魔なだけさ」
そういって、コナンはにやりと笑うと、
「こっちの方がぼくの性格に合っている」
と、懐からぼろぼろの古文書のような書物を取り出した。呪文の書物だった。
「独学でやってるのさ。もう少しでなんとかなる」
「コナン、ひとつ条件がある」
「条件!?」
「呪文もいいが、剣の腕をあげろ。みっちり稽古をつけてやる。おじさんと約束した手前おまえが死んだら困るからな。」

「分かったよ――」
コナンはしぶしぶ答えた。

その夜――。
アレンとコナンは、サマルトリアの兵士の目を盗(ぬす)んで、リリザの町を抜け出した。
もちろん、宿にはリンド六世への手紙を残した。
『リンド六世、約束を破ったこと、お許しください。ハーゴンを倒して帰るまで、命に代えてもコナンをお守りします』――と。

第二章　悲劇の王女

ロンダルキア大陸の北端の半島の目と鼻の先に、風光明媚な海岸が広がっている。
ローレシア大陸で最も美しい海岸と言われ、いつもなら夏の間たくさんの避暑客で賑わうところだ。
またここは、かつて新天地を求めて航海をつづけていたアレフが、初めてローレシア大陸に上陸した記念すべきところであり、のちに王妃ローラの別荘が建てられたところでもあった。
この海岸の西の岬に、荘厳華麗な大理石の門が建っている。ローラの門だ。
この門から、海底の隧道を通って、ロンダルキア大陸の北端へと渡ることができる。
ローレシアとムーンブルクを結ぶ唯一の道だ。
もともとこの海底の隧道は、二七〇年ほど前、ムーンブルク国が、当時のローレシア大陸を支配していた蛮族を攻略するために、秘密に掘り始めたものだった。
魔神を崇める蛮族は、たびたびムーンブルク国を襲撃していたからだ。
だが、完成前に、この大陸に恐ろしい悪性の疫病が大流行し、蛮族はあっという間に滅亡して

しまった。
そのことは、ムーンブルク国にとって、幸運であった。
もし、隧道(トンネル)が完成し、蛮族を攻略していたら、ムーンブルクにも疫病が伝染し、蛮族と同じ運命をたどっていたかも知れないからだ。
その後、アレフが上陸するまで、疫病を恐れてだれもローレシアに近づこうとしなかった。
だが、アレフがローレシアを支配し、王女がムーンブルクの王子に嫁(とつ)ぐと、王妃ローラがその祝いの記念として友好の証(あかし)のために、両国をひとつの道で結ぶべきだと提唱し、四年の歳月(さいげつ)をかけてやっとこの隧道(トンネル)が完成したのだ。
そのことから、この門がローラの門と呼ばれるようになった。
リリザの町を出て一〇日後、ローラの門にたどり着いたアレンとコナンは、この長い隧道(トンネル)を抜けて、ムーンブルク大陸の北端へ渡った。
ここから、月光街道(げっこうかいどう)がまっすぐ南下し、ムーンペタの町をへて、ムーンブルク城へとつづいているのだ。
季節は、ちょうど夏の牛頭神(ケンタウルス)の月から、秋の一角獣(ユニコーン)の月に変わっていた。

1　商都ムーンペタ

アレンとコナンは、なだらかな丘陵地帯にえんえんとつづく、陽炎の立つ古い石畳の月光街道を、ムーンペタに向けて馬を走らせた。

リリザからここへ来るまで、二人は何度も魔物や怪獣に襲われた。

緑色の巨大な吸血コウモリのタホドラキーは、いきなり上空から攻撃してきたし、毒ガスの塊のスモークは、毒を吐き散らしながらしつこく襲いかかってきた。

アレンは、毎日最低二時間を、コナンの剣の稽古に当てていた。

だが、コナンは剣のことよりも呪文の習練に執着していて、決していい弟子とはいえなかった。

そして、魔物や怪獣に襲われると、コナンはただ悲鳴をあげて逃げ回りながら、やたら呪文を連発するだけだった。

呪文は一度として効いたためしがなかった。

そのたびにコナンは自信を失っていった。

また、魔物や怪獣への警戒と緊張と、慣れない旅の疲れからか、コナンの顔から精気が薄れ、頬はげっそりと落ち、ローラの門にたどり着いたころから、ほとんど口もきかなくなっていた。

ただ、決して弱音を吐こうとはしなかった。それだけが、救いだった。
だが、ローラの門を通過して、三日目の晩のこと。
街道脇の小川のほとりに野宿をするために、アレンが木の幹に馬をつなごうとしたときだった。
背中に殺気を感じて、
「あっ⁉」
と、振りむくと、目の前に、鋭い爪を剥き出しにした凶暴な魔物が迫っていた。
アレンより二回りも三回りも大きい、巨大な猿の化物だった。
凶暴で、巨体のわりには身の軽い、マンドリルだ。
だが、アレンが、すばやく身をかわして剣に手をかけたとき、馬が脅えて、いきなり前脚をあげてはげしく暴れ出した。
アレンは、押さえようとして、必死に手綱を引き寄せた。そのときだった。
「うっ！」
アレンは、顔を大きく歪めて、がくっと片膝をついた。
左腕に激痛が走り、軽いめまいを覚えた。
すきをついて、マンドリルの鋭い爪が、左腕をえぐった。
ざっくりと開いた傷口から、まっ赤な鮮血が噴き出していた。
身をひるがえしたマンドリルは、空中で一転しながら鋭い爪を立ててふたたび襲いかかった。

アレンは体勢をたてなおし剣を振りかざした。
だが、マンドリルの動きが、アレンよりも一瞬はやかった。
——しまった！　アレンは思わず観念した。そのときだった。
両足をしっかりと踏ん張り、頭上で高々と印を結んだコナンが、
「炎の精霊よ！　われに力を！　紅蓮の業火を！」
と、ギラの呪文を唱えると、
「たーっ！」
渾身の力で印を結んだ手を胸の前まで振りおろした。
その指から真紅の火炎の球が、ブオオッ——と、いきおいよく飛び出して、強烈な衝撃とともにすさまじい炎の嵐がマンドリルの全身をつつみこんだ。
「ギャオーォ！」
マンドリルは宙に浮いたまま悲鳴をあげてもがいた。
体毛の焼け焦げるきな臭い匂いが、剣をかざしていたアレンの鼻をついた。
「うりゃぁぁっ！」
すかさずアレンが、両手で思いっきり剣を振りおろしてマンドリルの肩口を斬り裂くと、返す剣でその心臓を突き刺した。
黄色の鮮血があたり一面に散った。

マンドリルは、地響きを立てて崩れ落ち、二度と動かなかった。
突然、コナンは、その場にへなへなとだらしなく座りこんでしまった。
呪文は、瞬時にして体力や精力を消耗させるのだ。
「き、効いたあっ——」
コナンは、やっと声を出し、信じられないような顔で、自分の指先を見つめていた。
だが、徐々にその顔が嬉々として輝いてきた。
「やったあっ——！　やったぜ——！」
コナンは、ふらつきながらもなんとか立ちあがった。
「み、見ただろ、アレン！　なっ！　見ただろっ！」
コナンは、やたら興奮していた。初めて効いたのだから無理もなかった。
「諦めなくてよかった」
コナンは白い歯を見せて笑うと、
「これでなんとかぼくも役に立てそうだぜ。アレンにもしものことがあったら、マリナに申し訳ないからな」
そう言いながら、アレンの傷の手当てを手伝った。
「マリナに？」
「ああ。だって、あいつおまえのこと好きなんだぜ。ずっと前から」

「えっ!?」
アレンは、サマルトリア城でじっと自分を見つめたマリナの、妙に大人びた熱いまなざしを、ふと思い出した。
「おまえと結婚する気でいるぜ。父上もすっかりその気でな、マリナが十六になったらおまえの父上に正式に申しこむといっていた」
「そ、そんな」
「ま、よろしく頼むぜ。結構あれでも可愛いとこあんだからさ」
「勝手に決めるなよ。親子揃って――」
アレンは、呆れて大きな溜息をついた。
だが、このことをきっかけに、コナンに前の明るさが戻った――。

そして、ローラの門を通過してから十六日目の昼過ぎのこと。
前方のなだらかな丘の上に、聖堂の尖塔が見え、その丘をいきおいよく馬でのぼりきると、目の前の谷間に、川と城壁に囲まれた美しいムーンペタの町並みが広がっていた。
ムーンブルクの商都と呼ばれるこのムーンペタは、三〇〇年ほど前まではムーンブルク城の要塞であったが、その後ムーンブルクの経済や文化の中心として栄えてきた、人口二万を越すムーンブルク一の都市だ。

そして、ファン一〇三世の命を受けたファン家遠縁の貴族と、大聖堂の大司教、町を代表する豪商の三者が、合議制で行政を司り、ムーンブルク城直属の常駐部隊によって、守られてきたのだ。

月光街道の中心として、商品や物資を運ぶ旅人やキャラバン隊で賑わうこの町は、別名出会いの町とも呼ばれていた。

昔、旅の途中立ち寄った勇者アレフの王女が、お忍びで来ていたムーンブルクの王子に見初められたのもこの町だった。

強固な城壁の門に着くと、警備についていたムーンブルク軍の常駐部隊が、ただちにアレンとコナンを取り調べた。

だが、身元が分かると兵士たちはさっと顔色を変え、横柄な態度を一変させて、丁重に城門のなかに招き入れると、報告を受けた三〇半ばの小隊長が慌てて飛んで来て、二人をファン家の遠縁に当たる貴族の館へ案内した。

通りや角の空き地には、大勢の人たちがたむろしていた。

男もいれば、老婆もいる。乳呑み児を抱えた女や、子供たちもいる。

それは、異様な光景だった。

小隊長の説明によれば、ムーンブルク城の近隣の村から、着のみ着のまま逃げて来た難民たちだという。

その数はすでに七〇〇〇人を越え、この町の三分の一にもなろうとしていたのだ。
難民たちは、町の庁舎や大聖堂、集会所、教会などのさまざまな施設に収容されているのだが、なにもすることがないので、暇を持てあましているのだという。
そして、ムーンブルク城が壊滅してから五〇日になろうとしている今なお、数多くの難民たちが助けを求めて、毎日のようにムーンペタに来ていて、最終的にその数がどれぐらいになるのかは、想像すらつかないのだという。
また、今は二〇〇〇人の常駐部隊と町の有志で編成された一〇〇〇人の自警団が町の警備に当たっているが、近いうちにこの難民たちから二〇〇〇人の兵を募って警備を強化することになっている、とも説明してくれた。
町の中心にある大聖堂の前の広場には、さらに多くの難民たちがたむろしていた。
広場を抜けると、目の前の丘に、城壁に囲まれた貴族の館が見えてきた。
かつて要塞の城が置かれていたあとが、そのまま館として使われているのだ。
ローレシア城やサマルトリア城とは比べようもないほど小規模だが、荘重な三層の館は、さすがに歴史の重みを感じさせるものがあった。
警備の兵士たちが館の門を開け、二人が小隊長につづいてなかに入ろうとしたときだった。
突然、白い子犬が吠えながら二人に駆け寄って来た。
「しっしっ！　あっちへ行け！」

小隊長は、子犬を追い払おうとした。
だが、子犬はなおも吠えつづけた。
「ええいっ！　うるさいやつだ！　あっちへ行かんかっ！」
小隊長は、剣を振り回して小犬を追い払うと、兵士たちに門を閉じさせた。
「二〇日ほど前からこのあたりでうろついて困っているのですよ。どうせ、難民と一緒にどこからか流れて来たのでしょう」
と、忌ま忌ましそうに舌打ちをした。
本館の接見の間に現れた当主のキゲル四〇世は、小柄で痩せていたが、とても七十八歳とは思えないほど元気だった。
だが、アレンに旅の目的を聞かされて、さすがに驚いた。
アレンとコナンは、さっそくムーンブルク城の様子をたずねた。
『ムーンブルク城壊滅・国王以下全員討死』の報を聞いただけで、具体的なことはなにひとつ分かっていなかったからだ。すべてが想像の域をでていなかったからだ。
「実はですのぉ――」
キゲル四〇世は、顔を曇らせ、
「わしらにもはっきりしたことが分からんので、三〇騎の特別隊をムーンブルク城に派遣したんですよ。その特別隊が、数日前戻って来たんじゃが――」

と、いって大きく溜息をついて、肩を落とした。
「城も城下も——あまりにもすさまじい惨状でしてな。いたるところに、無数の死体が転がっておったそうです。みな、肉を喰い千切られたり、腐敗してたりしてな、兵士なのか侍女なのかも、判別できないほどだったんだそうで——」
「じゃあ、国王たちはやっぱり⁉」
すかさずアレンが聞いた。
「——」
キゲル四〇世は、今にも泣き出しそうな顔で、力なく頷いた。
「折り重なった死体のそばに、国王の剣と兜が落ちてたそうです——。できることなら、このわしが身代わりになりたかった——。この年まで生きてきて、まさかこのようなことになるとはのお——」
「じゃあ王女は⁉　セリアは⁉」
コナンが聞いた。
キゲル四〇世は、黙って首を横に振った。
「で、でも！」
コナンは詰め寄った。
「も、もしかしたら、どっかに隠れているのかも知れないじゃないか⁉　助けが来るのを待って

いるのかも知れないじゃないか!?」
「わしもそう願いたい――。じゃが、そのような気配はまったくなかったそうです」
「そ、そんな! もう一度よく調べようよ!」
「いや、残念だが、今は手のほどこしようがありませんのじゃ。それに、今はこの町を守るだけで精一杯なんです。あれ以来――ハーゴン配下の魔物たちの動きが静かじゃが、わしにはどうしてもやつらに見張られておるような気がしてならんのですよ。ひょっとしたら、この町の警備が手薄になるのを待っておるのかも知れん――。とにかく、なんとしてもこの町だけは守らなければならんのです。そして、いつの日か、国王のためにもムーンブルク城を再建せねばならんのです。それが、残されたこのわしの役目です! それまではこのわしはどうしても死ねんのですよ――!」
キゲル四〇世の目に、いつの間にか大粒の涙が浮かんでいた。
その涙を見て、コナンはそれ以上いうのをやめた。
その夜、二人は、キゲル四〇世の厚いもてなしを受けた。
食卓には、ムーンペタ風燻製ハムとサラダ、子山羊とトマトのスープ、焼きジャガイモと辛味のきいた赤大根と瓜のソース添えの鹿肉、木苺や林檎などの果物など、この地方の郷土料理がたくさん並んだ。
緊張下において、これだけの料理を用意するのは大変なことだ。

二人は、精一杯もてなそうとするキゲル四〇世の気持ちに感謝した。
そして、柔らかなベッドで、翌日の昼近くまで死んだようにぐっすり眠ると、キゲル四〇世に見送られて、ムーンペタの町を出発した。
最初、キゲル四〇世はムーンブルク城に行っても無駄だといった。
だが、アレンとコナンの決意は変わらなかった。
どうしても、自分の目でたしかめなければ気がすまないからだ。
城門を出てすぐ、二人は昨日の子犬が必死に追って来るのに気づいた。
二人は、どちらからともなく馬をとめて降りると、子犬はいきなりコナンに抱きついて、しきりにコナンの額の三日月の傷あとを舐め始めた。
「人なつっこいやつだな。だけどおまえを連れて行く訳にはいかないんだ」
そういって子犬の頭をなでると、二人はふたたび馬に跨がって、
「そりゃあ！」
いきおいよく馬を飛ばした。
子犬はまた、必死に二人を追った。
だが、どんどん二人との距離が離れていった。
やがて二人の姿が月光街道のはるかかなたに消えると、子犬は追うのを諦めた。
そして、哀しそうな声で遠吠えをした。

2　哀れムーンブルク城

暦の上では初秋を迎えていたが、照りつける太陽はまだ真夏を思わせた。
だが、朝晩は、めっきり冷えこむようになっていた。
月光街道を三日ほど南下すると、道は西へ向かって大きく曲がっていた。
街道筋にはたくさんの村や民家があった。
すでに逃げ出して、も抜けの殻になっている村もあれば、人々がひっそりと家のなかに閉じこもっている村もあった。
途中、アレンとコナンは、何度も難民たちと擦れ違った。
難民は、二、三〇人の集団もあれば、一〇〇人近いものもあった。
荷車にわずかな家財道具と子供たちを乗せ、黙々とムーンペタの町を目指して行進していた。
また、途中、何度も魔物や怪獣に襲われた。
なかでも、群れをなして襲ってきた巨大なハエのリザードフライと、固い表皮を持つ巨大な兜ムカデが特に手強かった。
だが、マンドリルとの闘いでコツと自信をつかんだコナンは、さらに呪文の習練を積み、ギラの呪文の火力はより強力になっていた。

また、ギラの他に、敵の魔法を封じこめてしまうマホトーンや、闘いで受けた傷をいやすホイミの呪文も習得していた。
だから、群れをなしてはげしく跳び回りながら攻撃してくるリザードフライたちにつぎつぎにギラの火炎の球を浴びせ、ひるんだすきにアレンが片っ端から斬り落とすことができたし、何本もの足で締めつけてくる兜ムカデにもギラの火炎の嵐が炸裂し、宙に大きく跳んだアレンが、剣を振りおろして強固な表皮を斬り裂くことができた。
そして、ムーンペタを出て十四日目の夜のこと――。
アレンとコナンは、野宿に適した岩場を捜しながら、馬を飛ばしていた。
はげしい稲光が上空の暗雲を斬り裂くように走り、秋の季節にはふさわしくない、生ぬるい、ねっとりと肌にまとわりつくような風が吹いていた。
と、ピカーッ――一段とはげしい稲光がした。
「あっ!?」
二人は、同時に声をあげた。
その稲光に照らし出されて、ほんの一瞬だが、前方の丘の上に、黒々としたぶきみな城が浮かびあがったのだ。
「ムーンブルク城だ！」
二人は、さらに馬を飛ばした。

そして、城下の城門の前に馬をつなぎ、無残に崩壊した城門を入って、

「うあっ！」

思わず同時に悲鳴をあげて、顔をそむけた。

石畳の路上に、無数の白骨化した死体が転がっていて、腐敗臭が漂っていた。

骨の大きさと、ぼろぼろに破れた衣服の残りや、身にまとっている甲冑から、かろうじて大人か兵士か、あるいは子供のものかが判別できた。

「ひどいや、これは——！」

鼻と口を押さえながら、アレンはコナンと顔を見合わせると、さらに城下の中央にある大聖堂の前の広場へとすすんだ。

稲光が、いたるところに転がっている死体を照らし出した。

くそっ、ハーゴンめっ——！

アレンの胸の奥から、新たな怒りがこみあげてきた。

そのときだった。背中にぞっと冷たいものを感じたのは。

アレンは、振り返って、

「うわあっ！」

すさまじい悲鳴をあげて、数歩飛びのいた。

コナンも、腰を抜かして、

「あ、あ、あ、あ、あ――」
と、まっ青になってわなわな震えるだけで、声すらでなかった。
全身の肉がどろどろに溶けた男が、両手をだらんとさげて、ぼーっと突っ立っていた。
額から溶けた肉が右眼をふさぎ、左眼の肉は頬のほうに溶け落ちて、穴の開いたその左の眼窩が異様な赤い光を帯びている。
全身からは、息がつまるような強烈な腐敗臭を放っていた。
ハーゴンの魔力によって死から蘇った腐った死体の魔物、リビングデッドだ。
リビングデッドは、ゆっくりと両手をあげると、ずるっ、ずるっ、と両足を引きずりながらコナンに迫った。
「コナン、呪文だ！」
だが、腰を抜かしたコナンは呪文どころではなかった。逃げることもできないのだ。
リビングデッドは、どろどろの手でコナンの首を締めつけた。
「ぎゃやややーっ！」
コナンは、頭の先から悲鳴をあげた。そのときだった。
「たーっ！」
アレンは、いきおいよく飛びこんでリビングデッドの両腕を斬った。
だが、斬られたどろどろの手はコナンの首から離れなかった。

リビングデッドはむきを変えて、今度はアレンに迫って来た。
「く、くそっ！」
腐敗臭がさらにひどくなった。
アレンは、息をとめて、リビングデッドに斬りかかった。
そして、メッタ斬りにして、リビングデッドの動きをとめると、宙に大きく跳んで、首を目がけて思いっきり剣を振りおろした。
リビングデッドの首は、いきおいよく宙に飛んだ。
すると、リビングデッドは崩れ落ちて、さらにどろどろに溶けた。
アレンは、コナンの首から離れないリビングデッドの両腕を蹴飛ばすと、失神しかけているコナンに肩を貸して、城下の後方にそびえる城へむかって必死に逃げた。
城のなかも、宮殿のなかにも、兵士たちや侍女たちの白骨化した死体が、足の踏み場もないほど無数に転がっていた。
焼け落ちた宮殿の天井の上の暗雲を、稲光が切り裂いた。
その光に照らし出された、無残に破壊された無数の彫像物。焼け焦げた名画や壁画。
そして、眼をそむけたくなるような大量の血痕――。
二〇〇〇年の栄華を極めた、荘厳華麗な宮殿の面影はなにひとつなかった。
さらに奥へすすむと、いきなり後方から魔物が突進して来た。

コナンは、ふたたび悲鳴をあげて飛びのいた。だが、メタルスライムだと分かると、
「このやろー！」
と、とたんに元気になって、頭上で両手を組んで、ギラの呪文を唱えた。
だが、何度かけても炎の球は全身流白銀(ミスリル)のメタルスライムに、あっけなく弾(はじ)き返されるだけだった。
メタルスライムは、散々手こずらせて、逃げ去ってしまった。
コナンは、疲れ切ってその場に座りこんでしまった。
大量のエネルギーを使って、全身から力が抜けてしまったのだ。
そのときだった。アレンは、地下につづく階段の奥からほのかな明かりがもれているのに気づいた。それは、ほんのかすかなものだった。
「な、なんだ、あの明かりは？」
アレンはコナンを促(うなが)して、そっと階段をおりた。
階段をおりると、通路は左に折れていた。
二人は、明かりに誘(さそ)われるように、さらに奥へとすすんだ。
と、その奥の、崩れかけた壁(かべ)のむこうから明かりがもれていた。
二人は、緊張しながら、そっと壁に近づいて、なかを覗(のぞ)いて驚いた。
壁のなかの一室で、篝火(かがりび)のような大きな炎が、宙に浮いて燃えていたのだ。
と、炎がゆらゆらっと揺れ動くと、どこからともなく男の声がした。

「待っておったぞ――。勇者ロトとアレフの血をひく者たちよ――」
「うわあっ!」
コナンはびっくりしてアレンの腕にしがみついた。
「わしじゃ――。ファン一〇三世じゃ――」
声は、炎からだった。
「ファン国王!?」
アレンは、思わずコナンと顔を見合わせた。
「どうしても死にきれんからな。炎の亡霊となって、おまえたちが来るのをずっと待っておったのじゃ――」
アレンは、四年前にラダトームで会ったときの、ファン一〇三世の温厚な笑顔とやさしい声を思い出していた。
「どうしても頼みたいことがあってな――。魔物たちの襲撃によって、わしも、妃も、そしてファン家の血をひく直系の者たちもすべて死んだ――。だが、セリアだけは、どこかで生きておるはずじゃ――」
「えっ!?」
「セリアが!?」
二人の顔が、ぱっと輝いた。

「ほ、本当ですかっ⁉」
アレンは、大声で聞き返した。
「だが、おそらく何かに姿を変えておるはずじゃ」
「姿を――⁉」
アレンは、またコナンと顔を見合わせた。
「魔法によってな――」
「何に姿を変えてるんですか？」
「それは分からん――。だが、東方の沼地の奥にラーのほこらと呼ばれておる岩場がある。そこにラーの鏡が奉納されてある――。かつて妖精が使っていたといわれ、古くからこのムーンブルクに伝わっておる神器の鏡じゃ――。満月の夜に、魔術によって姿を変えられた者をその鏡に映し出せば、たちまちにして魔法が解け、真の姿に戻るといわれておる――。そのラーの鏡で、セリアをもとの姿に戻してくれ――。そして、一緒に大神官ハーゴンを倒して、わしの無念を晴らしてくれ――」
というと、炎の背後にある厚い石の扉が、ギギギィ――と、ぶきみな音を軋ませながら、ひとりでにゆっくりと開いた。
なかには、鏡のような光沢の立派な兜がひとつ飾ってあった。
「ロトの兜じゃ――」

「ロ、ロト!?」
アレンは、思わず駆け寄って兜を手にした。
左右の耳の上からは、勇ましい、そして美しい、一対の角が突き出ている。
額には、黄金色の美しい紋章がある。
ロトの鎧やロトの楯と同じ、不死鳥が雄々しく翼を広げて飛翔している紋章だ。
「そうか、これがロトの兜か――！　これが――！」
アレンは、目を輝かせて見入った。
「それをおまえたちに授けよう――」
ファン一〇三世がそう言うと、すーっと炎が消えた。
とたんに、まっ暗な闇につつまれた。
「ファン国王!?」
「国王ーっ!?」
二人は、慌てて何度も叫んだ。
だが、どこからもファン一〇三世の声はしなかった。
と、そのとき、ザザザザザ――ッ！
闇のなかの静寂を破って、すさまじい雨の音が聞こえてきた。
宮殿の外に出ると、滝のような雨が降っていた。

アレンには、この雨は、無念の死を遂げたファン一〇三世や王妃、さらに多数の兵士や町の人々の涙のように思えてならなかった。

――ファン国王。セリアを救い、そして必ずや大神官ハーゴンを！

二人は、心のなかでそう誓った。

雨は、夜が明けてもいっこうにやむ気配がなかった――。

3　ラーの鏡

王女セリアが生きている――といったファン一〇三世の言葉は、なによりも二人を勇気づけた。

アレンとコナンは、ムーンブルク城の東方にある沼地に向かって馬を飛ばした。

二人は、まずラーの鏡を手に入れてから、セリアを捜すことにしたのだ。

いつの間にか山や森は色づき始め、美しい紅葉の季節を迎えようとしていた。

ムーンブルク城を出て一〇日目の昼過ぎのこと。

二人は、森のなかに滝を見つけて、ひと休みするために、馬をとめた。

さほど大きな滝ではないが、足場のいい岩場に囲まれた滝壺は、水浴びするには十分な水量をたたえていた。

水際の水中には、まっ白で美しい可憐な花が群生している。

きれいな水域にしか生息しないといわれている、水白花だ。
二人は、乾いたのどを潤すと、埃と汗で汚れた体を洗うために裸になろうとした。
そのとき、二人は、獣の唸り声と逃げ回る犬の鳴き声を聞いた。
声は、下流からした。
二人は、怪訝そうに顔を見合わせると、そっと声のする方向にむかった。
数十歩下流へ下り、ほんの少し森に入った窪地で、
「あっ!?」
二人は、声をあげた。
と、同時にアレンはすばやく剣を抜き、コナンは両足をしっかりと踏ん張って頭上で印を結んでいた。
巨大な大ねずみが、大木の根に追いつめた子犬に、襲いかかったところだった。
子犬は、ムーンペタの町で二人を追って来た、あの子犬だったのだ。
大ねずみの鋭い大きな前歯が、子犬の首元に迫った。
そのときだった。強烈な衝撃とともに突然大ねずみの全身を火炎がおおい、いきおいよく燃えあがったのだ。コナンのギラの呪文が直撃したのだ。
大ねずみは、はげしくもがきながら振りむいた。そして、恐怖に顔を凍てつかせた。
目の前に、アレンの振りおろした剣が唸りをあげて迫っていたのだ。

「ギャアオオオーッ！」
大ねずみのぶきみな悲鳴が一帯に響き、どす黒い大量の血が飛び散った。
大ねずみの首元を鋭く斬り裂いたアレンは、返す剣でその横腹も斬り裂いていたのだ。
大ねずみは無様な格好で崩れ落ちた。
子犬は、嬉しそうに尻尾を振って、コナンに飛びついた。
「どうしたんだ、よくこんなとこまで来れたなあ」
コナンは、子犬の頭をなでると、子犬はコナンの額の傷あとを舐め始めた。
「な、なんだよ、よせよ！」
コナンは嫌がって顔をそむけようとしたが、子犬はやめようとしない。
子犬の汚れた毛から、土埃が舞った。
「おうおうおう、こんなに汚れて。よしよし、おまえも洗ってやるからな」
滝に戻ったコナンとアレンは、下着一枚になると、一緒に水を浴びながらていねいに石鹸で洗ってやった。
子犬は見違えるようにまっ白になった。
すると、子犬はいきなり吠えながらアレンに飛びついて、胸の淡い翠色のペンダントの鎖を千切ってしまった。
「あっ！　なにするんだよ！　このペンダントは――！」

アレンは、慌てて水中に落ちたペンダントを拾いあげながら、ふとセリアの顔を思い浮かべた。

そして、はっとなって、

「セリア――⁉」

思わず大声をあげて、弾かれたように子犬を見た。

「セリア⁉」

コナンは、怪訝そうに子犬を見た。

「こ、この子犬がっ⁉」

「ファン国王は、何かに姿を変えられているっていっただろっ⁉」

「で、でも、あのセリアがこの子犬だなんて――。あんまりだよ！」

「だけど、よく考えてみろ！　ムーンペタの町に着いたときからこの子犬はぼくたちにまとわりついて来たんだぜ！　おまえの額の傷あとだって、しきりに舐めてたじゃないか！　ムーンペタの町を出るときだって！　さっきだって！　きっとぼくたちに気づいて欲しかったんだよ！　それにこのペンダント――」

セリアにもらったものだ――と、いおうとして、思わず言葉をのんだ。

ペンダントのことは、セリアと二人だけの秘密なのだ。

そのことを知ったら、コナンは傷ついてしまうに違いないからだ。

「とにかく、その傷あとの秘密を知っているのは、ぼくとおまえと、セリアだけなんだからな！」

「そういわれりゃ――」
コナンにはまだ信じられないようだった。
「この犬がセリアだなんて――」
「だからぼくたちを追ってここまで来たんだよ！」
子犬はしきりに、吠えつづけた。
アレンは、セリアであることを確信した――。

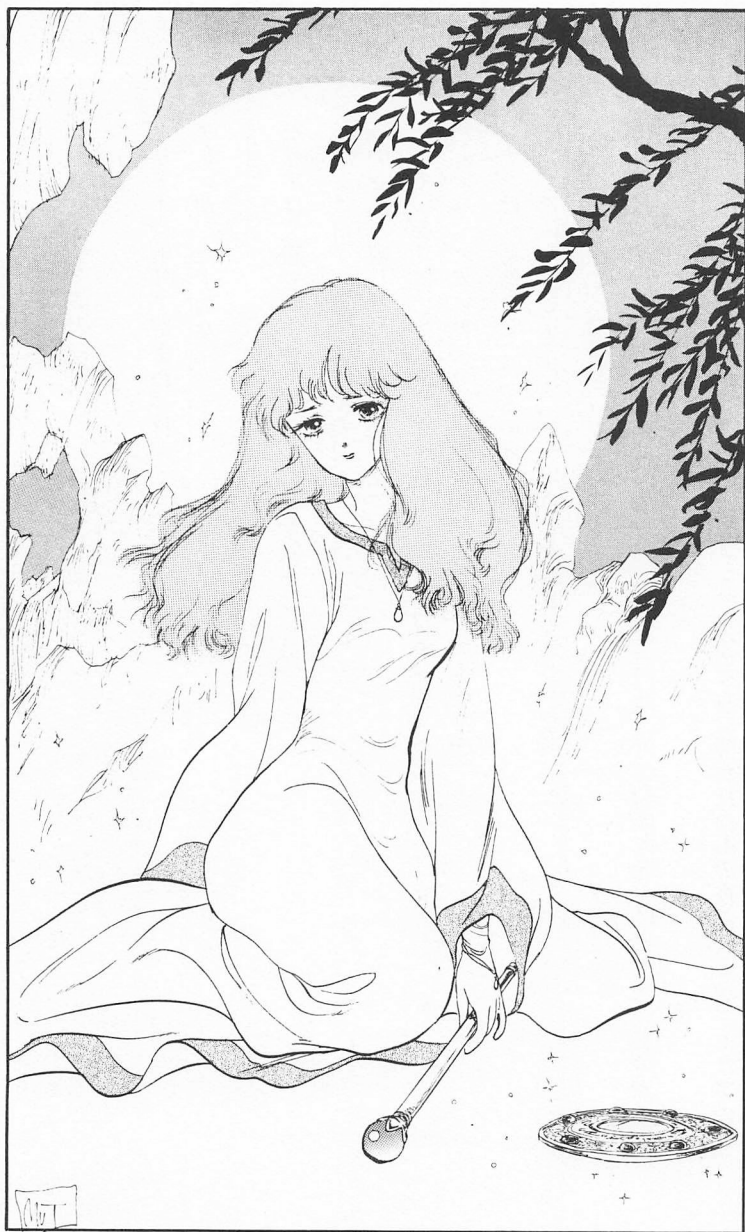
秋の日が落ちるのは早い。
ついさっきまで明るかったのが、一時間もたたないうちに、すっかり暗くなっていた。
子犬を連れて滝を出発したアレンとコナンは、翌日、馬を引きながら鬱蒼（うっそう）とした沼地の森を歩きつづけていた。
一歩踏み出すたびに、やわらかな沼地に踝（くるぶし）まで沈む。馬を走らせるのは無理なのだ。
野宿に適当な場所を捜そうとしたときだった。
急に目の前の森が開け、草原のむこうに、丘のような岩場が姿を現した。
東の空には、大きな赤い満月が出ていた。
「あ、あれだっ！」
アレンたちは、喜び勇んで岩場に駆け寄った。

馬をつないで中央の石段をのぼり、さらに奥にすすむと、洞窟の入口があった。
アレンたちは、たいまつに火を灯して、慎重になかに入った。
そのときだった。突然、闇のなかで閃光が走った。はっとなったときは、その閃光が強烈な火炎の球となって、ブオオッ――と、音を立てながらすぐ目の前に迫っていた。
「あっ！」
反射的にアレンが横に飛ぶと、すぐ後ろにいたコナンが火炎の球を浴びて悲鳴をあげながら後ろまで吹っ飛んだ。一瞬のことだった。
「何者だっ!?」
アレンは、剣を抜いて叫んだ。と、
「ふっふふふふ」
ぶきみな笑い声とともに、まっ白な仮面をつけ、白いローブに真紅のマントをまとった魔術師がおもむろに奥の岩陰から現れた。
ローブの胸には、魔鳥が飛翔する黒の紋章がある。邪教徒の紋章だ。大神官ハーゴンを崇め、悪魔神官の指示のもとに世界中で布教活動をしている下部組織の魔術師なのだ。
「これ以上なかに入れる訳にはいかぬ！」
おどろおどろした声で叫ぶと、魔術師は胸の前で印を結んで呪文を唱えた。
指から放たれた火炎の球が、轟音をあげ、ふたたびアレンを襲う。

だが、間一髪、アレンが宙に跳んでかわすと、
「ちっ!」
舌打ちしながら魔術師は、すばやくアレンの着地点を読みとり、狙いを定めて呪文を唱えた。
だが、つぎの瞬間、
「うわあっ!」
突然、強い衝撃とともに魔術師が火炎の嵐につつまれたのだ。
倒れたままかけた、コナンの渾身のギラの呪文が炸裂したのだ。
「タアーッ!」
すかさずアレンが急降下しながら、思いっきり剣を振りおろした。
ガギーン——! 骨を斬るようなすさまじい音が洞窟に響き渡った。
とたんに、魔術師の動きがとまった。
パカッ——仮面がまっ二つに割れて、地面に転がり落ちた。
「あっ?」
アレンとコナンは、声をあげて驚いた。
仮面のなかから現れたのは、アレンたちと同じぐらいの年齢の若者だったのだ。
その顔には、まだ少年のあどけなさが残っていた。
「うぬぬぬっ!」

魔術師は恐ろしい形相でにらみつけ、最後の力を振りしぼって頭上で印を結んだ。
だが、そこまでだった。身につけていたローブが見る見るうちに大量の血に染まり、滲み出た血が、ぽたっ――ぽたっ――と、足元にしたたり落ちたのだ。
やがて、魔術師は全身をはげしく痙攣させながら、ばったりと前のめりに倒れた。
アレンとコナンは、大神官ハーゴンに身も心も捧げている同世代の若者がいることを知って、さすがに驚きを隠せなかった。

さらに奥へすすむと、すぐ小さな神殿の前に出た。
その中央の祭壇に、皿のような円形の鏡が祀ってあった。
「こ、これだ！」
アレンは、おもむろに手に取った。
ちょうど両手を並べたぐらいの大きさで、ずしりと重かった。
薄翠の外枠には美しい文様が、黄金色の内枠には古代の楔形文字が彫られていた。
その中央に、灰色の鏡がはめこまれている。ラーの鏡だ。
アレンは、自分の顔を写してみた。だが、なにも写らなかった。
洞窟の外に出たアレンとコナンは、さっそく満月を背に子犬を座らせると、
――どうか、セリアでありますように。
そう祈りながら、そっと子犬の前に鏡を当てた。

と、満月の明かりを浴びた灰色の鏡の表面が、鈍い色を放って、大きく歪み始めた。
と、突然、鏡が七色のまばゆい光を放ったのだ。
「うっ！」
アレンとコナンは、思わず目を閉じた。
まばゆい光は、子犬の全身をつつむと、さらに光を増した。
やがて、まばゆい光が消えると、アレンとコナンは目を開け、
「セリア——！」
思わず顔を輝かせて、叫んだ。
薄い桃色の絹のローブをまとった、はっと目を見張るような、美しい娘が座っていた。
澄んだ大きな瞳。まっ白な肌。整った、気品のある顔立ち。肩までのびた、しなやかな艶のある美しい亜麻色の長い髪——四年前の面影と少女のあどけなさが、いくらか残っているが、まぶしいほど美しく成長していた。
手には、美しい赤い石玉のついた杖を持っていた。
胸には、アレンのペンダントと同じ、淡い翠のペンダントが輝いていた。

4　王女セリア

「セリア！　セリアだよねっ!?」
アレンが、たずねた。
「――」
セリアは、瞳を潤ませて、こっくりと頷いた。
「よかった！　心配したんだぜ！」
コナンも、嬉しさに目を潤ませた。
そして、セリアのペンダントを見て、はっと目を見張った。
アレンのペンダントと同じものであることに気づいたのだ。
コナンは、愕然（がくぜん）として二人の顔を見比べた。
だが、アレンもセリアも、コナンのその態度に気づかなかった。
「ありがとう――。アレン、コナン――」
セリアは、やっと聞きとれるような細い声で言うと、小さな肩で溜息をついて、瞳を曇らせた。
助かったことは嬉しいが、大神官ハーゴンの魔物たちに襲われたあの夜のことが、セリアの脳（のう）

裏を離れないのだ。
「でも、どうして子犬に——？」
「それは——」
アレンの問いに、セリアは話し始めた。

あの忌まわしい夜——。
セリアは、寝つかれないまま起きていた。
はげしい熱波に襲われたムーンブルクは、夜になってもうだるような暑さがつづいていた。
風はほとんどなく、ときおり思い出したように、開けっ放しの窓のカーテンが、かすかに揺れるだけだった。
と、突然、カンカンカンカンカン——！
けたたましい警鐘が鳴ったのだ。
セリアは、慌ててネグリジェからローブに着替えて廊下に飛び出すと、魔物の襲撃を告げながら駆け抜けて行く兵士たちの慌ただしい声がした。
大神官ハーゴンの魔物たちが襲撃し、城下の城門ではげしい闘いが始まったのだ。
魔物の軍団を率いるのは、近衛司令官ベリアルの直属の部下のバズズの連隊だった。
不安におののきながら、セリアはまっ青な顔で階下の国王の間に駆けつけた。

「心配ない。ムーンブルク自慢の勇敢な戦闘部隊が守っておるんじゃからな。それに、わがムーンブルクは、今までの長い歴史のなかで、一度たりとも破れたことがないんじゃ」
と、ファン一〇三世は、自信たっぷりにいい、
「そうよ、おとうさまのおっしゃる通りよ」
と、母の王妃シルサが、やさしくセリアの肩を抱いて力づけた。
国王の間には、ファン一〇三世と王妃の他に、侍従長や侍女、そして永く宮殿に仕えてきた今年一二〇歳になる女魔道士のサルキオが駆けつけていた。
そして、二時間後――。
「魔物撃退」の知らせが伝令の兵士によってもたらされると、その場に居合わせた者たちは、一斉に歓声をあげ、抱き合って喜んだ。
だが、その喜びも、束の間だった。
一旦撤退したと見せかけたベリアルは、魔力で墓場の死体を腐った死体に蘇らせ、家畜や動物を巨大化、凶暴化させると、待機していたアトラスとアークデーモンの連隊をバズズの連隊に合流させて、ふたたび襲って来たのだ。
その数は、城下と城を守る五〇〇〇の兵士たちと匹敵するほどだった。
魔物の大軍団と巨大な怪獣の群れは、あっという間に城門を突破し、怒濤のように城下に雪崩こむと、アークデーモン配下のベビルやグレムリンの大群が、空中を飛びながらつぎつぎに火を

放ったのだ。
そのあとをアトラス配下のギガンテスやサイクロプスの巨人属が、容赦なく破壊していく。
その知らせが、国王の間に届くと、さすがのファン一〇三世も顔色を変えた。
窓の眼下に見える城下の町は、一瞬にして火の海と化し、上空をまっ赤に焦がしていた。
だが、ファン一〇三世の檄もむなしく、アトラスの連隊が逃げまどう人々を殺戮しているすきに、バズズの連隊とアークデーモン配下のベビルやグレムリンの大群が、城内に雪崩こんで、火を放ったのだ。
たちまち宮殿は、轟音を立てて燃えあがる炎と、すさまじい黒煙につつまれた。
壁や天井に血飛沫が飛び、立ちむかって行った兵士たちがつぎつぎに倒れ、その屍を踏み越えて、バズズの連隊が、あっという間に国王の間に侵入して来たのだ。
生き残った将軍や近衛兵たちが、ファン一〇三世や王妃やセリアの前に厚い壁をつくり、必死に抗戦した。
だが、バズズの配下のシルバーデビルやデビルロードが、兵士たちをつぎつぎに血祭りにあげるすきに、バズズはファン一〇三世と王妃とセリアの前に、立ちはだかった。
サルキオは、すばやくセリアの腕を引いて逃げた。
だが、つぎの瞬間、王妃の悲鳴が。バズズが巨大な牙で王妃の喉元に嚙みついたのだ。そして、かばおうとしたファン一〇三世の心臓に、巨大な鋭い爪を突き刺した。

王妃とファン一〇三世は、もつれるように、床（ゆか）に倒れた。
「おとうさま！　おかあさま！」
思わずセリアは長い髪を振り乱して泣き叫んだ。
だが、血まみれの王妃はすでに息絶えていた。
ファン一〇三世は、遠のいていく意識のなかで、最後の力を振りしぼって叫んだ。
「サ、サルキオ、ひ、姫（ひめ）を頼んだぞ、ひ、姫を——！」
そのときだった。轟音を立てて、頭上から巨大な火柱が天井とともに落下した。
地響きとともに、すさまじい火の粉が舞いあがり、一瞬にしてファン一〇三世との王妃の姿が炎のなかに消えてしまった。
サルキオは、狂（くる）ったように泣き叫ぶセリアの腕を引いて逃げた。
だが、バズズは、執拗（しつよう）にセリアを追って来た。
サルキオは、愛用の呪文の杖を振りかざし、ギラの呪文をかけながらバズズの攻撃をかわして必死に逃げた。
だが、セリアの身をかばうたびに、バズズの巨大な鋭い爪が何度もサルキオの体を切り裂いた。
なんとか運よく地下室の物陰まで逃げて身を隠したが、すぐさまセリアはファン一〇三世のところへ駆け戻ろうとした。だが、全身血まみれのサルキオが、
「な、なりませぬ、姫——！」

と、セリアの両肩をわしづかみにして、必死にとめた。
ごつごつした骨だらけのサルキオの指が、セリアの肩に喰いこむのではないかと思われるほど、力がこめられていた。
「ひ、姫だけでも生きのびてくだされ――！　せ、せめて姫だけでも――！」
サルキオは、苦しそうに喘ぎながらいった。その目から、涙が流れている。
「ム、ムーンペタの町へ――お、お逃げ下され――」
「ムーンペタ？」
「わ――わたしの魔法で――。お、おそらく大神官ハーゴンは――、じゃ、邪神の像を手に入れるために――あ、あなたさまが欲しいのでしょう――」

そこまで言うと、セリアは小さな肩を震わせて泣いた。
あの夜の惨状を思い浮かべると、泣かずにはおれないのだ。
目の前で、愛する両親が殺されたのだ。
多くの人々や兵士たちが殺されたのだ。
生まれ育った、城を焼かれたのだ。
アレンは、慰める言葉もなかった。
「くそっ――ハーゴンめ――！」

コナンも、ペンダントのことを忘れて、怒りに目を潤ませていた。
「ところで、その邪神の像って一体なんなんだ？」
アレンは、たずねた。
「わたしも同じことを聞いたわ——」
セリアは、気を取り直して、さらにそのときの様子を話し始めた。

「どうして？　なぜわたしが？　なぜそれを手に入れるために、わたしが必要なの？」
だが、サルキオは、哀しそうに首を横に振った。
「わ、わたしには——そ、それ以上分かりませぬ——。いずれ——あ、あなたさまの前に——あ、あなたさまと同じ——ロ、ロトの血をひく若者が現れるでしょう——」
「ロトの血をひく若者——？」
セリアは、まっ先にアレンのことを思い浮かべた。
そして、つぎにコナンのことを。
「そ——その若者と一緒に——か、風の塔に行きなされ——。そ、その塔に棲む魔女が——邪神の像のことを——お、教えてくれるでしょう——。こ、これを——」
と、サルキオは震える手で、先に赤い石玉のついた愛用の呪文の杖を手渡し、
「き——きっと——あ、あなたさまの——お、御身をお守りするでしょう——さ——さらばじゃ

——姫——！」
そういうと、印を結んで、最後の力を振りしぼり必死に呪文を念じた。
と、サルキオの全身がはげしく震え、突然印を結んだ指先から、黄金色のまばゆい光が発せられ、その光がセリアの全身をつつんだ。と、
「うぉぉぉ——！」
すさまじい声で絶叫すると、サルキオの目がまっ赤な光を帯びた。
そして、力尽きばったり倒れた。すでに、こと切れていた。
「サルキオ！」
セリアは思わず叫んだ。
そのとき、すーっと光が消え、セリアの姿も光とともに一瞬にして消えてしまったのだ——。
「それで、魔物たちに見つからないように、子犬に変えられてしまったのか——」
と、アレンがいうと、
「ええ、たぶん——」
頬を伝う大粒の涙を拭おうともせず、セリアが頷いた。
「気がついたら、ムーンブルクとムーンペタの間の、街道筋の小さな村にいたわ——」
「で、風の塔ってどこにあるんだ？」

アレンが、たずねた。
「ここから東の方角よ――」
「よし、そこへ行って、魔女に邪神の像の正体を聞くんだ。なぜ、セリアが必要なのか。なぜ、大神官ハーゴンが手に入れたがっているのか」
「――」
だが、セリアはなにも答えず、ローブの袖口から美しい短剣を取り出して、鞘を抜いた。
月の明かりに、鏡のような刃がキラリと光った。
護身のためにと、十五歳の誕生日にファン国王から貰った短剣だ。
「あっ!?」
アレンとコナンは、思わずセリアから短剣を奪い取ろうとした。
悲しみのあまり、もしや――と、思ったのだ。
だが、セリアは、しなやかな艶のある美しい髪の毛を首元で束ねると、キッと唇を噛んで、まっ赤な満月を見つめた。
そして、バサッ――と、いきおいよく長い髪を切り落とした。
アレンとコナンは、あ然として見ていた。
セリアは力強く涙を拭いて、立ち上がった。
その瞳は、怒りと決意に燃えていた――。

第三章　風の伝説

ロンダルキア大陸の東部に、年中風が吹き荒れている一帯がある。
この一帯の、ほぼ中央に位置する草原に、風の塔がそびえ立っている。
およそ二〇〇〇年ほど前、古代ムーンブルク王朝が、ロンダルキア山脈を見張るために築いた四つの塔のうちのひとつだ。
だが、一〇〇〇年ほど前にその役目を終え、古代の遺跡として、ムーンブルクの人々に、わずかに語り伝えられてきただけだった。
また、今から二〇〇年ほど前、かつて勇者アレフとともに旅をしたと伝えられるガルチラが、この風の塔を居城として、この地方に風の国と呼ばれる国を興したが、ガルチラの死とともに、わずか数十年でその歴史に幕を閉じたという。
風の塔を目指して、ラーのほこらを旅立ったアレンとコナンとセリアの三人は、一旦西に戻ると、月光街道をさかのぼり、途中から月光街道をはずれて、険しい山脈へと入った。
そして、山脈を越え、東の海岸に出ると、海にそって南下した。

いつの間にか、紅葉から落葉の季節になり、一雨ごとに寒さが増すようになってきた。
暦も、一角獣の月から、犬頭神の月に変わっていた。

1　風の塔

東の海上から、容赦なく冷たい風が吹きつけてくる。
海に添って南下してから四日目、砂漠のような大きな砂丘を越えると、アレンたちは進路を西に変え、大草原へと馬を飛ばした。
一〇日ほど前、月光街道にある小さな宿場町で、アレンたちは馬を一頭手に入れた。
その宿場町の老人や女、子供たちはすでにムーンペタの町に避難していたが、長老や町の有志たちおよそ六〇人ほどが、魔物や怪獣たちの襲撃から町を死守するために、自警団を組織して、残っていたのだ。
アレンたちが町にたどり着くと、王女の姿を見た自警団の人々は、歓声をあげ涙を流しながらその無事を喜んだ。
最初は、警戒してセリアのことを信じようとしなかったが、ムーンブルク城に何度か招かれたことのある長老が、セリアの顔をよく知っていたのだ。
そして、アレンたちから、ムーンブルク壊滅後のいきさつや旅の目的を聞いた長老は、『王女生

存』の報をキゲル四〇世に伝えるために、二人の自警団員をムーンペタへと旅立たせると、緊急用に確保しておいた三頭の馬のうち、一番毛艶のいい元気な一頭を、セリアのために提供してくれたのだ。

もちろん、長老は、ムーンペタの要職者以外の者には決して『王女生存』のことを口外なさらぬようにとキゲル四〇世への親書にしたためた。

また、自警団の人々にも、決して口外してはならぬと命じた。

ハーゴン配下の魔物たちにそのことを知られたらまずい、という配慮からだった。

大草原に入るとさらに風が強くなった。

見渡すかぎりの、一面の枯れ草が、荒れた海のように、はげしく波打っている。

アレンは、セリアを助けてからのコナンの態度が気になっていた。

コナンは、セリアにはやさしくて親切だった。

沈みがちなセリアを励まそうと、わざと明るく振る舞った。

だが、アレンとなかなか顔を合わそうとしなかったのだ。

また、明るく振る舞っていたかと思うと、ふと急に思いつめたような顔をして押し黙ってしまうことがしばしばあった。

こんなことは、二人で旅しているときにはなかったことだ。

セリアはセリアで、必要なこと以外、ほとんど口をきかなかった。

いつも、思いつめたような哀しい顔をして、四年前の、あの吸いこまれるようなまぶしい笑顔を一度も見せなかった。
それだけ、セリアの悲しみが深いのだ。
コナンがなぜアレンをさけるのか、そして急に思いつめた顔をするのか？
アレンは最初、セリアの呪文が自分の呪文より強力だったことに、ショックを受けたのだろうか——とも考えた。
セリアと再会した翌日のこと。以前ムーンブルク城へむかう途中襲ってきたあの兜ムカデが、今度は群れをなして現れたのだ。兜ムカデは四匹だった。
コナンはすかさず一匹に狙いを定め、印を結んでギラの呪文を唱えた。
だが、それより一瞬はやく、呪文の杖を頭上にかざしていたセリアが、渾身の力をこめて振りおろした。杖の先の赤い石玉が、唸りをあげて空を斬った。
その瞬間、すさまじい真空の渦が、鋭い刃物のように四匹の兜ムカデを襲った。
たちまち兜ムカデの硬い表皮が裂けて、薄緑色の体液が一面に飛び散った。
強烈なバギの呪文だった。
火炎の球を飛ばすギラの呪文は、魔物一匹にしか効果がない。
それに対して、真空、つまりかまいたちによって敵にダメージを与えるバギ系の魔法は複数の敵に有効なのだ。

その一発で、兜ムカデはすでに虫の息だった。
だが、セリアは容赦せず、立てつづけにバギの呪文をかけた。
一瞬の後、巨体をバラバラに切り裂かれた四匹の兜ムカデは、無残な死骸を枯れ草の上にさらけだしていた。
セリアは、額に汗を浮かべ、小さな肩で苦しそうに息をしながら、憎しみをこめてその残骸を見つめていた。
アレンとコナンは、あ然としてセリアの呪文の威力を見ていた。
コナンのギラの呪文より、はるかに強力で破壊力があった。
コナンは、あきらかにショックを受けていた。
だが、そんなことにいつまでもこだわるようなコナンではないことは、アレンが一番よく知っている。
その後、アレンは、食事の最中に、じっと思いつめたようにセリアの美しい横顔を見つめているコナンに気づいた。
また、アレンは、何度かコナンの刺すような視線を感じた。
はっと見ると、コナンは慌てて目をそらした。
やはり――と、アレンは思った。コナンは、アレンとセリアが、同じペンダントを持っていることに気づいてショックを受けていたのだ――。

アレンにはそれ以外に思い当たることがなかった。
子犬に滝で鎖を千切られてから、アレンのペンダントは革袋の底に仕舞われたままだった。
大草原をさらにすすむと、風は一層強くなった。
地鳴りのようなすさまじい唸りをあげ、黄色い砂塵を巻きあげて、龍巻のような烈風が容赦なく襲いかかってきた。
空まで黄土色に染まり、目を開けているのさえやっとだった。
そして、大草原に入って二日目の夕方。
夕日のなかに悠然とそびえ立っている風の塔が見えてきた。
巨大な八層のこの石造りの円塔は、かすかに傾いて見えた。
近づくと、想像していたよりもずっと荒れ果てていた。
何百万という気の遠くなるような石を積み重ねて造られた塔だが、いたるところの石壁が無残に崩れ落ちて、風と砂塵にさらされている。
塔のなかにはいると、そこも廃墟同然に荒れ果てたままだった。
床を吹き抜ける砂塵。崩れかけた石壁と石柱。それしかなかった。
アレンたちは、比較的頑丈な石柱に馬をつなぐと、慎重に奥へとすすんだ。
奥の突き当たりに、上にあがる長い階段があった。
階段の、ひとつひとつの段の角は、まるで削られたように丸く擦り減っている。

二〇〇〇年もの長い間に、数えきれないくらい多くの人々がのぼりおりしたあとだ。
その階段をあがったときだった。突然、前方の暗がりから、魔物が咆哮をあげて猛然と襲いかかって来た。鋭い刃物のような前歯を持った巨大なお化けねずみだ。
三人は、すばやく三方に飛んでかわすと、すかさずコナンが印を結んでギラの呪文をかけた。
つぎの瞬間、骨が軋むような強烈な衝撃がお化けねずみを襲い、すさまじい火炎の嵐が全身をつつんだ。お化けねずみは、奇声をあげて苦しそうに暴れた。
立てつづけに、杖をかざしていたセリアがバギの呪文をかけると、
「ギャアアアアッ！」
いきなり、お化けねずみが悲鳴をあげて、はげしく全身を痙攣させた。
黒焦げの毛が炎とともに飛び散り、ビシッビシッビシッ――と、肉が裂け、紫色の血飛沫が噴き出し、一瞬にして血まみれになった。
そして、剣を構えたアレンが疾風のように突進した。
二度目にお化けねずみが悲鳴をあげたとき、アレンの剣が心臓を突き刺していた。
アレンは、剣を抜くと、今度は肩口から思いっきり斬り裂いた。
お化けねずみは、ふらふらっとよろけて数歩後退すると、階段から足を踏みはずした。そして、悲鳴をあげながらまっさかさまに長い階段を転げ落ちて行った。
三人は、さらに上の階にあがって、奥の階段へむかった。

すると、突然吐き気をもよおすような腐敗臭が鼻をつき、
「うっ――！」
三人は、思わず鼻と口をふさいで振りむくと、
「うわあっ！」
まっ青になって飛びのいた。
いつの間にか目の前に、ムーンブルク城で襲って来たあの全身の肉がどろどろに腐ったリビングデッドが、だらんと両腕をさげて突っ立っていたのだ。
ムーンブルク城襲撃のため、ハーゴン配下の近衛司令官ベリアルの魔力によって無数の魔物たちが死界から蘇ったが、襲撃後、そのほとんどが新しい獲物や住処を求めて西へ東へとぞろぞろ散って行ったのだ。
おそらくこのリビングデッドやさっきのお化けねずみもその一部で、いつの間にか流れて来て、この風の塔に棲みついたのだ。
「く、くそーっ！」
コナンが、必死に臭いをこらえながら、印を結んでギラの呪文をかけた。
つぎの瞬間、強烈な衝撃がリビングデッドを襲い、まっ赤な火炎が全身をつつんだ。
だが、腐敗臭と焼け焦げる臭いが混ざって、さらに異様な臭いになったのだ。
つづいて、セリアも必死に臭いをこらえてバギの呪文をかけた。

すさまじい真空の渦に、リビングデッドのどろどろの肉が無数に千切れて吹っ飛び、一瞬にしてリビングデッドは骨だらけになってしまった。

床のいたるところに、足の踏み場もないほど、どろどろの肉の塊が散乱した。

すかさずアレンが斬りかかろうとしたが、ばらばらに肉が散乱したために、さらに腐敗臭が強烈になったのだ。

アレンは、一瞬ひるんだ。その臭いが、目にまで染みてひりひり痛んだ。

三人は、慌てて口や鼻や目を押さえて吐き気をこらえた。だが、

「だ、だめだっ――！」

コナンが叫び、三人はたまらずその場から逃げだした。

骨だらけのリビングデッドは、足を引きずりながら三人を追った。

だが、一直線に歩いて行って、突きあたりの壁にぶつかると、バラバラになって崩れ落ちた。

三人は必死に逃げた。上の階から、さらに上の階へと逃げると、そこは大広間になっていた。

そのほぼ中央まで行って、やっとひと息ついた。そして、あたりがすっかり暗くなっているのに気づいて、たいまつに火をつけたときだった。

突然、ぶんぶんぶんぶん――というぶきみな羽音が接近してきた。

はっとして見ると、巨大なハエの魔物リザードフライの大群が四方から襲いかかってきた。

二〇匹、いや三〇匹近くいる。一匹の大きさは大人の人間とほぼ同じくらいだ。

「こっちだ！」
アレンが叫んで、一番近い壁まで逃げた。
壁を背にすれば、後ろからの攻撃を気にしなくてすむからだ。
セリアは、呪文の杖を身構えて、すばやくバギの呪文をかけた。
とたんに、数匹のリザードフライの動きがとまり、ビシッビシッ——と、音を立てて硬い殻や羽や触角がひび割れた。
すかさずアレンが斬り落とし、コナンもギラの呪文で攻撃した。
だが、バギの呪文を運よく逃れた残りのリザードフライは、体勢を立てなおすと、ふたたび群れをなして襲いかかった。
セリアは立てつづけにバギの呪文をかけた。
だが、斬っても斬っても、その数はなかなか減らなかった。
また、呪文をかけるたびに、セリアとコナンの体力が消耗し、その効果も薄くなった。
そして、やっと最後のリザードフライを斬り落としたとき、セリアとコナンはぐったりとして床に倒れてしまった。
また、アレンも両腕がしびれて、剣を持つのさえやっとの状態だった。
だが、そのあとも、つぎつぎに魔物たちが襲いかかってきた。
昔から塔に棲みついている兜ムカデやスモーク、ラリホーアント、タホドラキーたちだ。

そして、数時間後――やっと三人は八階にあがる階段にたどり着いた。
八階にあがると、吹き荒れるすさまじい風の音に混じって、バタン――バタン――と、機（はた）を織る音が聞こえてきた。
三人は、息を殺して、そっと奥へすすんだ。
崩れかけた石壁を曲がると、奥の一室からほのかな明かりが見えた。
ちりちり燃える一本のローソクの前で、赤いマントをまとった小柄（こがら）で痩（や）せた老婆（ろうば）が、古い小さな織り機にむかってマントを織っていた。この塔に棲む魔女（まじょ）だ。
魔女の顔はしわだらけで、頬（ほお）はげっそりと落ちている。手も指も骨だらけだ。
魔女は、機織りの手をとめて、
「お待ちしておりましたぞ――」
と、しわがれた声でいいながら、三人を見た。
だが、その両目はつぶれていた。盲目（もうもく）なのだ。
「勇者ロトとアレフの血をひきし者たちよ――」
魔女は、親しみをこめてそういった。

2　風のマント

「ど、どうしてぼくたちのことを⁉」
アレンは、驚いて、思わずたずねた。
「こう見えても魔女ですから、すぐ分かります——。わしは、あなたさま方が来るのを、ずっとここで待っておりました——。精霊ルビスさまのお言葉に従って——」
「精霊ルビスの⁉」
「はい——。精霊ルビスは、こうおっしゃられたのです——。勇者ロトとアレフの血をひきし者たちがここを訪ねて来るとき、そのときはローレシア、サマルトリア、ムーンブルクの三国が最大の危機に陥ったとき——。そして、この世に巨大な邪悪が君臨しようとするとき——と。——その日が来ぬことを祈りながら、ずっとここでこうして機を織りながら、長い間待っておったのでございます——。だが、とうとうその日が来てしまったようでございます——」
そういって、魔女は悲しそうに肩で大きく溜息をついた。
セリアはじっと魔女を見つめると、
「実は、サルキオから聞いて来たのです——」
と、重い口を開いて、ここへ来た目的を話し始めた。

大神官ハーゴン配下の魔物たちによってムーンブルク城と城下が壊滅し、国王や王妃以下、すべての者が殺されたこと。老魔道士サルキオのこと。そして、謎の邪神の像のこと——を。

「そうでございましたか——」

魔女は、また肩で大きく息をついた。

「——しかし、邪神の像のことについては、それ以上のことは知りませぬ——。魔道士サルキオが知っていた以上のことは——。なぜなら、ロンダルキア大陸のはるかかなたの東方の大海にある邪神の像を手に入れるには、王女さまが必要だということを、姉から聞いていただけなのですから——。そう——あれはまだアレフさまが竜王を倒す前のことでございます——」

「あ、姉って——!?　どこにいるの!?」

アレンが思わずきいた。

だが、魔女は首を横に振った。

「——分かりませぬ。もう二〇〇年近くも会っておりませぬゆえ——。ただ、この地にやって来たとき、ひとりの盲目の魔女がドラゴンの角の北の塔に棲んでおるということを、風の噂で聞いたことがあります——」

「ドラゴンの角!?」

「はい——。ロンダルキア大陸とルプガナの海峡をはさんで、二つの塔が角のように建っておるんだそうでございます——。ロンダルキア側は南の塔、ルプガナ側は北の塔——。北の塔に棲む

魔女は、おそらく姉か妹かのどちらかではないかと──。どちらにしろ、きっとあなたさま方がお見えになるのを、待っておるのでございましょう──。それがわしたち三姉妹の使命なのでございますから──。実は──わしは、いやわしたち三姉妹は、かつて竜王に仕える魔女だったのでございます──」

「えっ!? 竜王にっ!?」

三人は、驚いて、思わず顔を見合わせた。

およそ二二〇年ほど前──。

魔女の三姉妹は、竜王の間諜(スパイ)として、アレフガルドの王都ラダトームに潜伏(せんぷく)していた。

当時、まだ二〇歳(はたち)前後だった三姉妹は、はっとするような美貌(びぼう)の持ち主だった。

だが、勇者アレフによって、竜王が倒されると、三姉妹はラダトームから逃亡(とうぼう)し、各国を転々として、やっと未開の大陸にたどり着いたのだった。

ところが、新天地を求めてアレフガルドを旅立ったアレフとローラ姫(ひめ)が、その大陸に上陸して、ローレシア国を建国したのだ。

ひっそりと身を隠(かく)していた三姉妹は、ふたたび逃亡しようとしたが、兵士たちに捕(つか)まって、国王アレフの前に引き立てられたのである。

「国王、なにとぞこの魔女どもを断罪に!」

竜王に対する憎しみが冷めやらない重臣たちは口々に進言した。
だが、アレフの慈悲によって三姉妹は救われたのだ。
「刑によって命を奪うことは簡単なことだ。だが、もう一度人間として、世のなかのために生きてみようと思うのなら、精霊ルビスの名によって許してやってもよい。もし、精霊ルビスを信じ、心の支えとして生きていくのなら、いつの日にか必ずやルビスがそなたたちの罪をお許しになるはずだ——」
アレフは、そういって、免罪追放を命じたのだ。
ところが、アレフの言葉に、自分たちの罪を恥じた三姉妹は、自らの手で両目を突き刺して、永久に光を絶ってしまったのだ。
それが、三姉妹の、アレフへの忠誠の証のつもりだった。
そして自らに下した罰であった。
その後、精霊ルビスの啓示を受けた盲目の三姉妹は、それぞれ離れ離れになって、遠い異国へと旅立って行ったのだ——。
アレンたちは、痛々しそうに、魔女の両目の傷あとを見ていた。
「そして、わしは異国を放浪しながら、この地にたどり着いたのです——。勇者アレフさまが竜王を倒すために旅をおつづけになっているとき、一緒に旅をしたお方がおりました——」

「ガルチラだ！」
アレンの横にいたコナンが思わず叫んだ。
「ガルチラも知ってるの!?」
アレンたちは、勇者アレフの伝説に出て来るガルチラのことも、子供のころから耳にたこができるぐらいよく聞かされていたのだ。
「はい――。そのガルチラさまが、ムーンブルクの国王に頼まれて、ちょうどこの地に風の国を建国なさったばかりでした――」
そういって、今度はガルチラの話を始めた。

ガルチラがこの風の塔に居城を構えると、無口ながらも心根のやさしいガルチラを慕って、多くの人々がこの地にやって来た。
魔女がこの地に来たときには、すでにこの風の塔を中心にして、人口四〇〇〇人の美しい町ができあがっていたのだ。
そして、ガルチラと一緒に旅をつづけた巨大な大鷲は、この国のシンボルとなった。
もともと、この大鷲は、ガルチラを育ててくれた養父が飼っていたものだ。
だが、アレフガルド国王の間諜だったガルチラの養父は、竜王配下の六魔将のひとりザルトータンの息子の魔界童子にその正体を見破られ、無残にも命を奪われた。

その復讐に燃えて、ガルチラは大鷲と一緒に旅をつづけ、アレフと知り合ったのだ。
だから、ガルチラは竜王に対して人一倍強い憎しみを抱いていた。
そのガルチラが、特に魔女に親切にしてくれた。
魔術の心得のあった亡き養父と同じような感覚の魔女に同情したからなのか、あるいは魔女を許した親友アレフの慈悲に応えるためなのかは、定かではなかった。
魔女は、そんなガルチラに感謝し、この地に骨を埋める決心をした。
魔女が風の国に来てから二〇年後、何度アレフが縁談を持ちかけても見むきもしなかったガルチラが、突然若い娘と結婚した。
花嫁は、美人だがどこといって取柄のない娘のように思えたが、注意深く見れば、どことなく若き日のローラ姫に似ていた。
翌年、ガルチラの妻は、玉のような男の子を出産した。
だが、さらに翌年――突如としてこの地を恐ろしい悪性の疫病が襲ったのだ。
一夜のうちに命を落としてしまう、恐ろしい伝染病だ。
ガルチラは、ただちに妻と子をはるか西方の安全な地に疎開させ、必死に疫病の対策に奔走したが、疫病は猛威を増すばかりだった。
そして、ついにガルチラも発病してしまったのだ。
魔女の必死の看病にもかかわらずガルチラは無念の死を遂げ、それから一〇日もしないうちに、

町から人の姿が完全に消え、いたるところに疫病で倒れた死体が転がっていた。
廃墟の町を、すさまじい風が吹き荒れるだけだった。
ガルチラが亡くなると、大鷲もまた老齢のために、あとを追うようにして死んだ。
魔女は、悲しみに毎日泣きつづけた。
ある夜のこと。生きる望みを失った魔女は、自らの手で命を絶つことを決心した。
そのときだった。どこからともなくやさしい声が谺した。
精霊ルビスの声だった。
「――いつの日にか、勇者ロトとアレフの血をひきし者たちが、ここを訪ねて来るときがあるでしょう。そのときはローレシア、サマルトリア、ムーンブルクの三国が最大の危機に陥ったとき――、そしてこの世に巨大な邪悪が君臨しようとするときなのです――。その日まで、そなたは生きつづけなければならない運命にあるのです。そなたの姉も、そして妹も――。それぞれの使命を持って生きつづけなければなりません――。そなたは、勇者ロトとアレフの血をひきし者たちのために、大鷲の残した柔らかな羽毛で風のマントを織りつづけるのです。それがそなたの残された使命なのです――。それがそなたの使命――。それが――。」
そういいながら、精霊ルビスの声は遠のいていった。
魔女は、慌てて精霊ルビスの名を呼んだ。
だが、二度と精霊ルビスの声は聞こえなかった――。

「これが――」

魔女は、織り終えたばかりの風のマントを織り機からはずすと、

「これが、あなたさま方がお見えになるのを待ちながら、毎日毎日心をこめて織りつづけてきた風のマントでございます――」

丁重にアレンに差し出した。

「こ、これが――」

アレンは、マントを広げてみた。

薄空色のマントはふんわりしていて、ほとんど重さが感じられないくらい軽かった。

「その風のマントをまとって、高いところからうまく風に乗ると、鳥のように空を飛ぶことができますのじゃ――」

「鳥のように空を⁉」

「はい――もっとも、鳥のようにどこまでも、という訳にはいきませぬ。だが、きっといつかお役にたつはず――」

「ありがとう――」

「これで、わしの役目は終わりです――。もう二度とお目にかかることはありますまい――」

魔女は、そういって微笑むと、

「ただ――わしには、ガルチラさまのご子孫がどこかで生きのびておるような気がしてなりませぬ――。ガルチラさまは、王妃と王子を安全な地に送られたとき、銀の横笛（よこぶえ）をお二人に託したのでございます――」

「銀の横笛――!?」

アレンが聞いた。

「あの、ガルチラが肌身（はだみ）離さなかったという銀の横笛のこと!?」

「はい――。魔界童子に殺された養父の形見でございます。おそらく、あのときガルチラさまは、死ぬお覚悟（かくご）を決めておったのでしょう――。もし、ご子孫が生きのびておれば、必ずや銀の横笛を持っておるはず――」

「分かった！　旅をしながら捜してみるよ！　もし見つけたら、ガルチラがアレフと一緒に旅したように、ぼくたちの仲間になってくれるかもしれないからね！」

と、アレンがいうと、

「もし、そのようなことになれば――」

魔女は、嬉（うれ）しそうに頷（うなず）いた――。

いつの間にか風がやみ、空には三日月が出ていた――。

アレンたちを見送ると、魔女はつらそうにゆっくりと織り機のそばに横たわった。

二四〇年の命の精気が、急激に消え失せていくのが、魔女にははっきりと分かった。
魔女は、覚悟を決め、胸の上で両手を組むと、
「精霊ルビスよ――」
最後の力を振りしぼって、祈るようにつぶやいた。
「これで、安心して、アレフさまのところへ行けます――。そして、愛するガルチラさまのところへも――。ただ――生きのびられておられるなら――一度でいいから、ガルチラさまのご子孫にお会いしとうございました――。それだけが心残りでございます――」
織り機の横のローソク立ての明かりが、風もないのにかすかに揺れた。
そして、すーっと静かに消えた。まるで、魔女の命のように――。
と、そのとき、織り機がピカーッとまばゆい光を放って、砕け散った。
キラキラと輝く白銀色の飛沫が、横たわった魔女の上に雪のように降りかかると、魔女の全身から怪し気な湯気がゆらゆら立ちのぼった。すると肉や骨や身にまとっているものまでが、見るうちにどんどん風化し、そのあとにさらさらに乾燥した、灰のような粉塵だけが残った。
それを待っていたかのように、すさまじい風が渦を巻きながら吹き抜けていった。
ふたたび静寂が戻ると、魔女の姿はあとかたもなく消えていた――。

3　嫉妬（しっと）

ロンダルキア大陸のほぼ中央に、広大な中海がある。
この中海とムーンブルク北の外海がつながっているところに、中海と外海を遮断（しゃだん）するように大きな島が浮かんでいる。
ロンダルキア中部から陸路を通ってドラゴンの角へ行くには、この島に渡り、さらに島の西海岸にあるほこらを抜けて、対岸のロンダルキア西部に渡らなければならない。
この対岸から北西にむかって、ルプガナ街道がのびているのだ。
風の塔を旅立ってから二〇日後、島のほこらから対岸のロンダルキア西部に渡ったアレンたち三人は、ルプガナ街道を北西にむかって、馬を飛ばした。
ロンダルキア西部は、古代王朝時代からのムーンブルク国の領地だ。
だが、ムーンブルク城やムーンペタのある中部や北部の緑豊かで豊沃（ほうよく）な土地と違（ちが）って、荒涼（こうりょう）として痩（や）せた土地と砂漠ばかりのこの地方は、これといった産業や文化もなく、中部や北部の人々からは、辺境の地としてしか見られていなかったのだ。
ロンダルキア西部に渡ってから一〇日目の午後――。
烈風が吹きすさぶ荒涼とした砂漠のルプガナ街道を走りつづけて来た三人の目の前に、突如と

して黒々とした森が姿を現した。
森の南には美しい湖があり、そのほとりに戸数八〇あまりの小さな宿場があった。
ルプガナ街道の、ほぼまんなかに位置する宿場だ。
日はまだ西に傾きかけたばかりだったが、秋の日は落ちるのがはやい。
三人はこの宿場で一泊して、ゆっくり休むことにした。
セリアと再会してからすでに五〇日を過ぎているが、一度も宿に泊まったことがなかったからだ。
宿場は急ごしらえの木の柵で囲まれ、村人は魔物の襲撃に備えて厳重な警備を敷いていたが、宿場の入口にある小さな宿屋へ行くと、宿の主人は快く泊めてくれた。
だが、ここへ来るまでのコナンのアレンに対する態度は、前と同じだった。
相変わらずセリアにはやさしくて親切で、わざと明るく振る舞いセリアを元気づけようとするが、アレンには、なかなか顔を合わせようとしないのだ。
だが、翌朝のこと――。
アレンは、なんとか話すきっかけをつかみたいと思って、渋るコナンを無理矢理朝霧に煙る湖の水辺まで引っ張り出して、久々に剣の稽古をつけた。
セリアと再会してから、コナンはほとんど剣の稽古をしなくなっていたのだ。
だが、セリアの呪文に刺激されてか、以前よりもさらに呪文の習練に精を出していた。

その腕前も威力も、セリアと同レベルまであがっていた。
この朝は、いつもより冷えこみが厳しかった。吐く息もまっ白だ。
コナンは、かじかむ手で、木の枝を削った特製の木剣を持つと、
「くそーっ！」
いきおいよくアレンに突進してきた。
アレンは、後退しながら軽くかわした。
だが、コナンは、今まで教えた剣の基礎をまったく無視して、
「くそっ！　くそっ！　くそっ！」
ただがむしゃらに木剣を振り回すだけだった。
「どうしたコナン⁉」
「うるさいっ！」
コナンは、なおも力任せに木剣を振り回した。
そのコナンの目を見て、アレンは思わずはっとなった。
今までの稽古のときの目と違う目だったのだ。
一〇年前、決闘を申しこんだときと同じ、憎しみに燃えた目だった。
アレンは、横に飛ぶと、いきおいよくコナンの木剣を払った。
木剣は宙で一回転して、コナンの足元に転がり落ちた。

だが、コナンは、木剣を拾おうともせず、鋭い目でアレンをにらみつけたまま、肩で荒い息をしていた。
「どうした⁉　そんなんじゃ敵にすぐやられちまうぞ！　さあ来いっ！」
「嫌だっ！」
「なんだって⁉」
「嫌なんだよっ！」
「どうして⁉　ちゃんと稽古をやるって約束じゃないかっ！」
「そんなんじゃない！　セリアのことだ！」
「セリア⁉」
「そうだ！　どうしておまえとセリアは同じペンダントを持っているんだっ⁉」
「そ、それは――！」
とたんに、アレンは口ごもった。
なるべくなら、その話題に触れたくなかったのだ。
触れると、なおさらコナンが傷つくと思ったし、これ以上気まずくなると、一緒にいるのがつらくなるからだ。
それに、コナンの額に三日月の傷あとを残したことに、負い目を感じていたのだ。
だが、コナンはペンダントのことに気づいたときから、何度もそのことを聞こうと思っていた。

魔物たちを警戒していつも三人は離れないでいたから、聞くに聞けなかったのだ。
セリアの前では恥ずかしくて、とてもそんなことは聞ける訳がないのだ。
嫉妬している自分を、セリアに見せるのが嫌だからだ。
男としてのプライドが許さないのだ。死んでも嫌なのだ。
だから、アレンと二人だけになるのを待っていたのだ。
「つぎのロト祭までは互いに抜けがけをしないって約束したじゃないかっ！」
「で、でも——！」
約束といっても、もともとコナンが一方的に言い出したことなのだ。
しかも四年前のロト祭が終わり、ラダトーム城からサマルトリアに帰る途中のことだった。
セリアにペンダントをもらったのは、それよりも数日前だったのだ。
だが、それをいっても、いい訳にしかならないのだ。
「汚ねえぜっ！　こっそりそんな真似するなんてさっ！　おまえが贈ったんだろっ⁉　おまえだろっ⁉」
「——」
なんと答えていいか分からず、アレンは黙って目を伏せた。
「見損なったぜっ！　卑怯者っ！」
コナンは今にも泣き出しそうな顔で叫ぶと、

「いいかっ！　ぼくだってセリアを愛してるんだっ！　どこのだれよりもなっ！　世界で一番愛してるんだっ！」

いきおいよく森に向かって走り出した。

アレンは、溜息をついて見送るしかなかった。

また、コナンは、走りながら、問いただしたことを後悔していた。

ここまで来る旅の途中、コナンはペンダントについてあれこれ推測した。偶然同じものだったのか？　アレンが贈ったものなのか？　それともセリアが——？　セリアが贈ったものだとしたら——それが、コナンの一番恐れていた答えであった。

うそでもアレンが贈ったものであって欲しかったのだ。

だが、アレンを責めた自分が、急に惨めで情なくなってきたのだった。

自分で自分が嫌になったのだ。コナンは、立ちどまると、

「くそっ！」

思いっきり拳で木の幹を突いて、やり場のない自分への怒りをぶつけた。

そのときだった。突然後ろから、ズズズズッ——と、なにかを引きずるようなぶきみな音がして、はっと振りむくと、巨大なまっ赤な花がすぐそばまで接近していた。

「ヒエーッ！」

思わずコナンは悲鳴をあげて飛びのいた。

大神官ハーゴンの近衛司令官ベリアルの魔力によって生み出された怪物で、巨大な人喰植物のマンイーターだ。
コナンは、慌てて呪文をかけようとした。
だが、一瞬はやく、マンイーターが花粉を撒き散らしながら襲いかかって来たのだ。
マンイーターは、花弁の中央にある毒々しい赤褐色の口から、異様な臭いの息を吐きかけた。
「うわっ！」
思わずコナンは鼻と口をふさいだ。
ねっとりと湿った、吐き気のするような強烈な息だ。
とたんにコナンの頭が痺れて、睡魔に襲われた。
「くそっ！」
コナンは、また呪文をかけようとしたが、力が入らなかった。
マンイーターはさらに強力な息を吐きかけた。
「うっ――！」
さらに頭が痺れ、コナンは我慢できずに膝をついて倒れた。
そのときだった。アレンとセリアが駆けつけたのは。
アレンとコナンを捜しに来たセリアが、水辺にいるアレンを見つけたとき、ちょうどコナンの悲鳴が聞こえたのだ。

セリアは、すかさずバギの呪文をかけた。
ピシッピシッ——と、コナンを喰おうとしていたマンイーターの花弁や茎や葉が一瞬にして裂けた。花粉がいきおいよく宙に舞った。
マンイーターが苦しそうにのけぞると、アレンはすばやく花弁を斬り落とし、返す剣で太い茎をまっ二つに斬り裂いた。
青い汁液が噴き出た。マンイーターは、たちまちどす黒い腐敗色に変色した。
アレンは、コナンを抱き起こそうとした。
「大丈夫か、コナン!?」
だが、コナンは、乱暴にアレンの手を払い除けた。

ゴォォォォッ——と、地鳴りのようなすさまじい唸りをあげて、冷たい烈風が大地を払うように吹き抜けていく。
朝一番の教会の鐘とともに、湖の小さな宿場を出発した三人が、半日かけて森を抜けると、ルプガナ街道はふたたび烈風の吹きすさぶ砂漠地帯に突入したのだ。
砂や細かい石がバラバラと容赦なく体に当たる。目を開けているのもやっとだ。
上空にはうっすらと日が差しているが、昼になっても気温があがらなかった。
三人はひたすら馬を飛ばした。一刻でも早く、この砂漠を抜けたいのだ。

この三人が走り去るのを、崖の上から馬に跨がってじっと見ている男がいた。
日に焼けた黒い顔。氷のような冷たい目。
腰までのびた長い髪と、身にまとったマントが烈風にはげしくなびいている。
歳は二〇歳前後か。背が高くてがっしりした若者だ。
以前、大神官ハーゴン配下の悪魔神官と近衛司令官一派が、ロンダルキア山脈の巨大な洞窟でいがみ合っていたとき、ひとり静かに笛を吹いていた、あの若者だ——。

4 ドラゴンの角

湖の宿場を出発してから八日目の午後——。
ルプガナ街道をひたすら飛ばして来たアレンたち三人は、大きな峠を越えると、
「おおっ！」
思わず顔を輝かせた。
目の前のなだからな丘陵のむこうに、巨大な二つの塔がそびえていた。
手前の六層の塔は南の塔。そのむこうの海峡の対岸にある七層の塔が北の塔。
双子の塔ともいわれている、ドラゴンの角だ。
「そりゃ！」

三人は、馬の腹を蹴ってさらに飛ばした。
ルプガナ街道は、塔の手前で戸数三〇〇ばかりの城壁に囲まれた小さな町に入った。
城門には、魔物の襲撃に備えて、二〇人ばかりの兵士たちが警備に当たっていた。
大通りを直進すると、すぐ断崖絶壁の上にそびえる塔の前に出た。
ここでルプガナ街道は、一旦途切れるのだ。
そして、目と鼻の先にある対岸の北の塔から、ふたたびルプガナ島の中心地であるルプガナにむかって街道がのびているのだ。
塔は、風の塔と同じように何百万個もの石を積み重ねて造られた壮大なものだった。
ところどころ石壁が崩れかけているが、風の塔よりは、はるかにしっかりしていて、何度も修復の手が入れられたことが、容易に想像がついた。
だが、三人が最も驚いたのは、二つの塔を遮断している断崖絶壁の海峡だった。
歩けばほんの四、五分で届きそうな狭い海峡を、はげしい海流が無数の大渦を作り、その渦と渦が轟音を立ててぶつかり合いながら流れているのだ。
その大渦の衝突が、狭い海峡の気流を変化させ、すさまじいいきおいで上空に吹きあげてくる。うっかりすると吹き飛ばされそうな強風だ。
「どうやって渡るんだよ、こんなすごい海峡⁉」
コナンは断崖の柵にしがみつきながらいった。

気まずい関係にあるが、そんなことにこだわっている状況ではないのだ。
「とにかく、あの人たちに聞いてみよう」
塔のそばに足場を組んだ作業現場があった。
巨大な弓が設置され、数人の人夫たちが、大量の綱を滑車に巻きあげていた。
アレンが、その人夫のひとりに聞くと、
「どうしたら渡れるかって？　はっははは。ま、あと一〇年待つんだな。今おれたちが塔と塔を結ぶ吊橋を造ってるところさ。それが嫌なら、空でも飛んで渡るんだな」
と、相手にもしてくれなかった。要するに、渡る方法はないのだ。
アレンは、溜息をついて空を見た。
白い海鳥が数羽、翼を広げてゆったりと舞っている。
空か――アレンは心のなかでつぶやくと、ぱっと顔を輝かせた。
魔女に授かった風のマントのことを思い出したのだ。
「そうだ、風のマントを使ってみよう！」
「えっ⁉」
コナンとセリアが驚いた。
「ほ、本気かよ⁉　いくら風のマントだって、この海峡じゃ無理だぜ！」
「やってみないと分からないじゃないか。あの北の塔に行くには、どうしてもこの海峡を渡らな

きゃならないんだ」

そういわれると、それ以上コナンは反論ができなかった。他に方法がないのだ。

「そうと決まれば――」

アレンはふと顔を曇らせた。そして、自分の馬の鼻面をやさしくなでた。

コナンもセリアも、溜息をついてそれぞれの馬を見た。

風のマントで海峡を渡るには、馬を置いて行かなければならないからだ。

それに、三人は二度とこの南の塔には戻って来るつもりはないのだ。

北の塔に渡った後、三人は港町のルプガナに行って船をさがし、邪神の像があるというロンダルキア大陸のはるかかなたの東方の海に船出しようと、風の塔を出たときから決めていたのだ。

アレンは先頭に立って、馬の手綱を引きながら町へ引き返した。

馬を預かってくれる人がいるかどうか、町の長老に聞いてみることにしたのだ。

広場には精霊ルビスを祀った聖堂があり、その裏の高台に瀟洒な長老の館があった。

館の門で用件を言うと、使いの男が玄関横の部屋に案内して長老を呼びに行った。

今年九〇歳になるという白髪の小柄な長老は、部屋に入ると、はっとなって弾かれたようにセリアを見た。そして、感激に体を震わせながら涙を浮かべて、

「王女さま――。よ、よくぞ――ご無事で――」

と、平伏した。

半年前、ムーンブルク城に招かれたときに、セリアを見て知っていたのだ。
長老は、さっそく三人を二階の豪華な部屋へ案内した。
窓からは、対岸の北の塔がよく見えた。
セリアからムーンブルク壊滅の様子を聞いて、長老はしきりに涙を拭いていた。だが、涙がおさまると、
「馬ならわしがお守りいたしましょう」
と、申し出た。
「ありがとう」
アレンが礼をいった。
「ずっと一緒に旅して来たから、大事にして欲しいんだ」
「承知しております。しかし、馬を置かれてどうなさるおつもりです？」
「あの北の塔に渡るんだ」
アレンは、窓のそとの塔を指さした。
「えっ⁉　わ、渡るっ⁉」
長老は驚いた。
アレンは、革袋から風のマントを取り出して、風の塔の魔女のことを話した。
「——あの塔に棲む魔女に会いたいんだ」

「たしかに、あの最上階に棲む魔女が、月夜の晩に糸を紡いでおるという噂は聞いたことがありますが――。吊橋さえ焼かれなければ、馬と一緒に苦労しないで渡れたのですが――」

「焼かれた？」

「はい。北の塔の四階と南の塔の三階にかかっておったのでございます。北側は、こちらよりちょっと地形が低いものですから――。そのころは、けっこうこの町も賑わっておったのですよ。ルプガナからやって来る観光客で――。それに、ここはムーンブルクの国とは言え、一番結びつきの深いのは対岸のルプガナなのです――。食料も衣料もなにもかもが、すべてルプガナの町から吊橋を通って運ばれて来ていたのです――。ところが八年前――何者かによって吊橋は無残にも焼かれてしまいました。同時に、この町の精霊ルビスさまを祀る聖堂も――」

「聖堂も!?」

アレンたちは思わず顔を見合わせた。

「当時、邪教徒が急に増えましてな――。ルビスさまから邪教徒に鞍替えする者も結構いましてね――。ところが聖堂が焼かれると、この町から邪教徒たちが突然姿を消してしまったのです――。今にして思えば、すでにそのころから大神官ハーゴンがその邪教徒たちを操っておった――ということでしょうな――。聖堂はなんとか復元しましたが、吊橋の工事は思うようにすすまんのです――。綱を一本通せば、その綱を伝って人夫たちをむこうへ送ることもできますし、作業も簡単になるんですが、その最初の綱が通せんのですよ――。追い風の日を選んで、巨大な弓で綱を

結んだ矢を射ったのですが、何度やっても北の塔まで届かないのです——。ですから、今もっと強力な弓に作り変えておるところなんですよ——」

「じゃあ、ぼくたちが綱を運んで行ってあげるよ！」

突然、コナンが立ちあがって長老にいった。

アレンたちは、驚いてコナンを見た。

「もし、ほんとに三人が風のマントで海峡を渡れるならよ、綱ぐらい引っ張って行けるだろ⁉　体にぐるぐる巻きつけてさ！」

「そりゃ、名案だ！　長老、やってみようよ！」

アレンも賛成した。

「ほ、ほんとですか？」

「そりゃあ、やってみなきゃなんともいえないけど——」

いい出してみたものの、さすがにコナンも不安は隠せなかった。

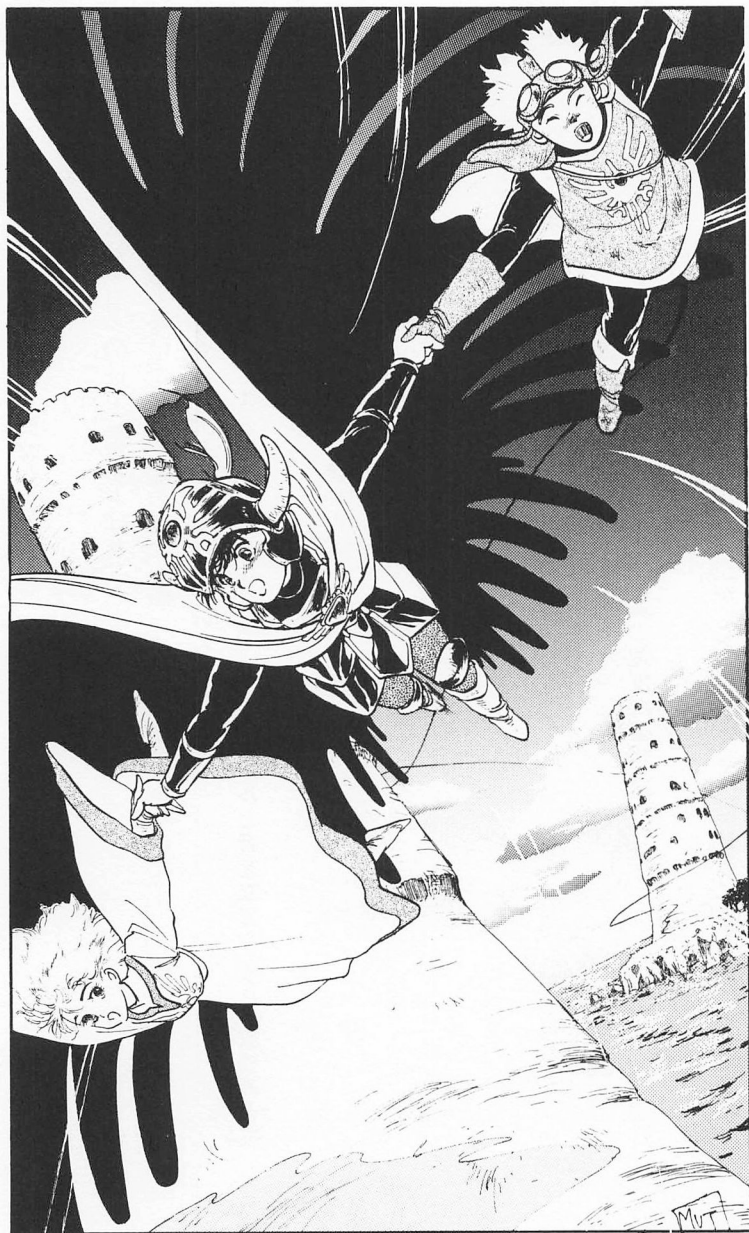
もし、風のマントがうまく空を飛べなければ、はげしい渦がさか巻く海峡に落下してしまうからだ。

二時間後——。

はるか西の空に、大きな夕日が今にも沈もうとしていた。

綱を体中に巻きつけた三人が、南の塔の三階のもと吊橋がかかっていたところに立った。

まんなかのアレンが風のマントを身にまとっている。
綱の反対側は、三階の床に組みこまれた巨大な滑車にぐるぐる巻きつけてある。
その横には長老と、十数名の人夫たちが待機している。
準備はすべて完了していた。
塔の下には、長老からの知らせを聞いて駆けつけた町の幹部や町の人々約二〇〇名が、固唾をのんで見守っている。
三人の足元には、目のくらむような断崖絶壁と、その下を渦を巻いてすさまじいいきおいで流れている海流が見える。
「や、や、やっぱり、一度試した方がよかったんじゃないか⁉」
恐怖に震え、歯をガチガチ鳴らしながらコナンがいった。
セリアも、まっ青な顔をして緊張している。
「とにかく、精霊ルビスに祈るんだ。心をこめて、必死にな！」
アレンは自分に言い聞かせるようにいった。アレンも不安なのだ。
三人は、手をつなぐと、目をつぶって精霊ルビスに祈った。
――精霊ルビスよ。われらに力を――。主の力を与えたまえ――！
「さあ行くぞっ！　勇気を持って思いっきり跳ぶんだ！　それっ！」
アレンが号令をかけ、三人が一緒に宙に大きく跳んで両手を広げた。

MUT

三人の体が急に浮上した。海峡から吹きあげてくる強風も味方したのだ。
「うわあっ！」
思わず三人は、目を開けて歓声をあげた。
三人は全身に風を受けながら、北の塔にむかって空を飛んでいたのだ。
風のマントが風をはらみ、大きくふくらんでいる。
三人に巻きつけた綱が、まるで凧の糸のように、シュルシュルと音を立てながら、放物線を描いた。
見守っていた人々から大歓声が沸いた。

5　雨露の糸

「す、すげえっ！」
コナンは興奮して思わず叫ぶと、大きく深呼吸した。
まるで鳥になった気分なのだ。
三人が上を向くとさらに上昇し、水平になると速度が速まる。
自分たちの思い通りに空を飛べるのだ。
アレンもセリアも、顔を輝かせながら、空から見えるすべての風景を見逃すまいとして必死に

目をこらしていた。
感激のあまり言葉がでないのだ。
精霊ルビスよ——アレンは心のなかで感謝した。
目の前に北の塔が接近してきた。
「それっ！」
三人は体勢を整えると、北の塔の四階の床を両足でしっかりと踏んだ。
そして、床に埋めこまれた鉄の柱に綱をぐるぐる巻きつけてきつく結わえると、三人は自分たちの綱を解いて、
「やった、やったーっ！」
口々に叫びながら、小躍りして喜んだ。
コナンは、満面に笑みを浮かべて、アレンに握手の手を差しのべた。
「コナン——！」
アレンは、今までのことがあるので、余計嬉しかった。
だが、アレンが手を握ろうとすると、はっとコナンが顔色を変えた。
今までのことをすっかり忘れて、つい手を出してしまったことに気づいたのだ。
コナンは、すばやく手を引っこめて、そっぽをむいてしまった。
「——」

アレンは、溜息をつくと、手を振って南の塔に終了の合図を送った。
その合図を見て、南の塔の人夫たちが一斉に巨大な滑車の歯車を反対側に回転させて綱を巻き始めた。
海峡の上にだらんとぶら下がっていた綱がピィーンといきおいよくのびた。
こうして、八年振りに、南の塔と北の塔が一本の綱で結ばれたのだ。
人々からまた拍手と大歓声があがった。
そして、三人は風のマントを革袋に仕舞うと、階段をさがして五階にのぼった。
なかは、複雑な迷路になっていた。
通路をいくつも曲がって、やっと前方に六階へのぼる階段を見つけたときだった。
突然、頭上の暗がりで、ぶきみな眼がピカーッと光ったのだ。
三人は、とっさに身構えた。
一瞬、天井の隅に巨大な毒蜘蛛が巣を張っているように見えた。
だが、よく見ると、蜘蛛とは似ても似つかぬ別の魔物だった。
中心に巨大な目玉が一個あり、それを何十本ものぬるぬるした太い髪の毛のようなものがおおっていた。太い髪の毛に見えるのは、なんとみんな毒蛇だった。
魔物は、悪の魔力によって無数の毒蛇が合体したメドーサボールだ。
毒蛇たちが鎌首をもたげると、メドーサボールが急降下しながら襲いかかって来た。

コナンは、ギラの呪文を唱えて、火炎の球を放った。
だが、火炎はメドーサボールに吸いこまれてあっけなく消えた。メドーサボールにギラの呪文が効かないのだ。コナンの目の前に、メドーサボールが接近した。
「うわあっ！」
コナンは慌てて床に伏すと、メドーサボールはコナンをかすめて急上昇した。
メドーサボールは、身軽で敏速だった。態勢を変えると、ふたたび急降下してコナンに襲いかかって来たのだ。そのときだった。セリアがバギの呪文をかけたのは。
すさまじい真空の渦が炸裂した。宙に浮いたまま動かなくなったメドーサボールの表皮を、たちまちにして斬り裂いた。
すかさずアレンが、巨大な目玉に剣を突き刺すと、宙に大きく跳んでメドーサボールをまっ二つに斬り落とした。
そして、落下してはげしくもがいているメドーサボールに、ふたたびセリアの強烈なバギの呪文が炸裂したのだ——。
メドーサボールにとどめを刺して六階にあがると、今度は空中を漂うくらげのような姿のホイミスライムの大群が襲いかかった。さらに、獰猛なマンドリルや、全身の肉がどろどろに腐ったあのリビングデッドも襲って来たのだ。
魔物たちを倒し、やっと七階への階段にたどりついてほっとしたときだった。

階段の上からかすかに糸車の回る音と、か細い歌声が聞こえてきた。女の歌声だ。
歌詞はよく聞きとれなかったが、物悲しい旋律だった。
三人が、そっと七階にのぼると、奥の一室で、藍色のマントをまとった白髪の老婆が、紡ぎ機の糸車をカラカラ回しながら小さな声で歌っていた。魔女だ。
窓のそとは、いつの間にかすっかり暗くなり、満月が出ていた。
三人は、しばらくの間じっと見ていた。
すると、魔女は歌うのをやめて、糸を紡ぐ手をとめた。
だが、糸を紡いでいたはずなのに、糸はどこにも見当たらなかった。
「お待ちしてましたよ――。勇者ロトとアレフの血をひきし者たちよ――」
しわがれ声でそういって、三人の方をむいた。
風の塔の魔女と同じように、目はつぶれて、頰はげっそりと落ちていた。
「わしは、こうして糸を紡ぎながら、あなたさま方の来るのをずっとお待ちしておりました――。精霊ルビスさまのお言葉に従って――」
「実は、邪神の像のことを聞きたくてやって来たんだ」
アレンは、風の塔の魔女と会って風のマントをもらった話をした。
「そうですか――。上の妹が風の塔で――」
魔女は、嬉しそうに微笑むと、

「しかし、わしも邪神の像がどこにあるのか知りませぬ。ロンダルキア大陸のはるかかなたの東方の大海——と、いう以外は——。ただ——邪神の像を手にするには、その前に満月の塔に隠されておるという月のかけらを手に入れなければならぬそうです——」
「月のかけら⁉」
「はい——」
「その満月の塔というのはどこにあるんだ⁉」
「それ以上のことは——」
魔女は、首を横に振ると、
「わしたち三姉妹が、竜王配下の魔女だったという話はお聞きになりましたか——？」
「ああ。聞いたよ」
魔女は、満足そうに頷くと、
「わしは、妹たちと別れてから、あちこち異国を放浪しました——。そして、やっとこのドラゴンの角の北の塔にたどり着いたとき、悪性の熱病にかかっておりました——。毎日毎日、熱にうなされて——。もう死ぬものとばかり思っていました——。ところが、夢のなかで、精霊ルビスさまの声を聞いたのです——。『——いつの日にか、勇者ロトとアレフの血をひきし者たちが、ここを訪ねて来るときがあるでしょう。その日まで、そなたは生きつづけなければならない運命にあるのです。そして、そなたの妹たちも——。それぞれの使命を持って生きつづけなければなり

ません。そなたは、勇者ロトとアレフの血をひきし者たちのために、心をこめて雨露の糸を紡ぎつづけるのです。それがそなたの残された使命なのです――』そうおっしゃいながらルビスさまの声は遠のいていったのです――。わしは、はっと目が覚めました――。すると、わしの熱がさがっていたのです――。そして、わしの横にこの紡ぎ機が置いてあったのです――」

魔女は、いい終わると、紡ぎ機の錘（おもり）の上にそっと手を広げた。

すると、天井からすーっと一本の光が差しこんできて、魔女の手の平に突き刺さったのだ。

そして、その光が、まっ白な美しい一巻きの糸に変わった。

「これが――あなたさま方を待ちながら、心をこめて紡いだ雨露の糸です――」

魔女は、そういってアレンに差し出した。

「きっといつか、お役に立つ日がくるでしょう――。それから――下の妹にもぜひ会ってください――。きっと、あなたさま方がお見えになるのを待っておるでしょう――」

「どこにいるの!?」

アレンが聞いた。

だが、魔女は首を横に振った。

「三人が別れ別れになったとき、アレフガルドに行くようなことを申しておりましたが――。その後、なんの噂も聞いておりません――」

「アレフガルドに!?」

「これで、わしの役目は終わりです——。もう二度とお目にかかることはありますまい——」

魔女は、そういって微笑んだ——。

そして——。

アレンたちが立ち去ると、魔女はやっとの思いで震える手を糸車にかけた。

これが、最後の、残された力のすべてだった。

「精霊ルビスよ——。これで、安心して、アレフさまのところへ行けます——。そして、上の妹のところへも——」

魔女は、穏(おだ)やかな笑みを浮かべながら、精霊ルビスに感謝した。

と、糸車にかけていた手が滑(すべ)り落ちて、魔女の体もゆっくりと崩れ落ちた。

カラカラカラカラ——糸車は音を立てて回転した。だが、やがて、とまった。

突然糸車がまばゆい光を放って炎のように燃えあがり、魔女の体に燃え移ったのだ。

そして、その光が消えると、魔女の姿もあとかたもなく消えていた。

もちろん、アレンたちは知るはずもなかった——。

第四章　自由貿易都市ルプガナ

ルプガナ島は、ローレシア国の三分の一の面積を持った広大な島だ。
この島を南北と東西に走るルプガナ連峰（れんぽう）が、北と南に二分している。
北部は未開の森林地帯だが、南部は豊沃（ほうよく）な丘陵（きゅうりょう）地帯だ。
この丘陵地帯のまんなかを、連峰にそうように、ルプガナ街道（かいどう）が走っている。
同じルプガナ街道でも、ドラゴンの角（つの）を境に、辺境の地ムーンブルク西部のそれとは、まったく様相が変わっていた。
街道筋には、たくさんの宿場町や村があった。
また、ルプガナ島は、自由自治の国としても知られていた。
その中心が、ルプガナ街道の終着地でもある、自由貿易港のルプガナだ。
島の政治、経済、文化の中心として栄えてきた人口二万二〇〇〇人のルプガナの町は、また異国の船で賑（にぎ）わう国際都市でもあった。
ドラゴンの角の北の塔（とう）を出発してルプガナ街道を北上したアレンたちは、三〇日後、このルプ

ガナの町の手前まで来ていた。
季節は冬を迎え、暦は犬頭神の月から竜の月に変わっていた——。

1　美少女

はるか遠くに見えるルプガナ連峰は、日ごとに白さを増していた。
一〇日前には、山頂付近にしかなかった雪が、いつの間にか中腹まで白く埋めている。
このルプガナ連峰を背に、アレンたち三人は、美しいポプラ並木がつづく運河ぞいのルプガナ街道を旅していた。
歩数にして五〇歩ほどの幅しかないが、水量豊かな運河だ。
この運河の河口に、ルプガナの町があるのだ。
「大丈夫か？」
先頭を歩いていたアレンが額の汗を拭きながら、セリアとコナンに声をかけた。
朝晩の冷えこみは厳しいが、昼にこうして歩いていると、汗でびっしょりになる。
セリアは黙って頷いたが、コナンは顔もあげようとしなかった。
だが、二人ともしっかりした足どりで、古い石畳の街道を歩いていた。
ドラゴンの角の北の塔を出て半日もしないうちに、コナンとセリアは両足に大きなまめをいく

つもつくった。
その後、予定を変えて、無理しないように旅をして来たが、それでも途中の宿場町で四日も逗留しなければならなかった。
二人のまめがつぶれ、アレンもまめをつくったからだ。
馬での旅は慣れていたが、歩くことには不慣れなので、無理もなかった。
だが、二〇日過ぎたころから、三人は歩くペースをやっとつかんだのだった。
また、街道筋の宿場町や村々では、兵士たちが通常の警備をしているに過ぎなかった。
ムーンブルク壊滅からすでに一五〇日近く過ぎているせいか、町の人々や旅人たちは、何ごともないように普通の生活をしていたし、兵士たちにも緊張感が見られなかった。
運河の水門にかかる跳橋にさしかかったときだった。
「あっ」
思わずセリアが声をあげて、白い指で空を指した。
上空を三羽のカモメがゆっくりと舞っていた。
それは海が近いことの証明だ。ルプガナの町はもうじきなのだ。
三人の足は、自然と速まった。
やがて、両側に急峻な山が迫ってきた。
ポプラ並木の運河と街道は、その山と山を縫うように蛇行していた。

最後の山を曲がったときだった。三人は、

「やったあっ！」

思わず歓声をあげて喜んだ。

ポプラ並木のはるか前方に、大聖堂の尖塔と城壁が見えたのだ。ルプガナの町だ。

三人は、運河ぞいの宿場でひと休みしてから、かれこれ二時間近く歩きつづけていた。

だが、その疲れも忘れて、さらに足を速めた。

城門や大聖堂の形がはっきり見えるところまで来ると、左手に樹齢何百年も数える、天を突くような巨大な杉の並木があった。

この並木の奥に、広場があり、さらにその奥に何百段もある長い急な階段があった。

その階段の上に、太陽の光を浴びて神殿の白い円堂がそびえていた。

三人が、ちょうど並木の前にさしかかったときだった。

突然、奥の広場から、馬のいななきとともに女の悲鳴があがったのだ。

三人が慌てて駆けつけると、二頭立ての豪華な馬車の横に年配の馭者がうつ伏せに倒れていて、その奥の杉木立のなかで、少女が魔物に追いつめられていた。

魔物は、全身に緑の苔が生えた、巨大な猿の化物・バブーンだった。

冬になって、獲物を求めて山奥からおりて来たのだ。

コナンは、印を結んでギラの呪文を唱えた。

だが、バブーンは身軽で敏速だった。とっさにコナンの放った火炎の球をかわしながら宙に跳び、ぶきみな奇声を発しながらアレンに襲いかかったのだ。
アレンは慌てて身を伏せると、巨大な鋭い爪が唸りをあげて首元をかすめた。
アレンの後方に着地したバブーンは、すばやく宙に跳んで杉の枝に飛び移ると、今度は呪文をかけようとしていたセリアとコナンに襲いかかった。
二人は、慌てて飛びのいて身をかわした。そのとき、
「いたっ！」
コナンが思わず倒れこんで、右足首を押さえた。
木の根のように地面に露出していた岩を踏みはずして、足首を挫いたのだ。
それを見たバブーンは、奇声をあげながら宙を跳んでコナンの背後から襲いかかった。
「危ないっ！」
セリアは、頭上にかざしていた呪文の杖を渾身の力で振りおろした。とたんに、
「ギャオオオオーッ！」
バブーンの悲鳴が、杉木立に響き渡った。
すさまじい真空の渦が、たちまちバブーンの体を切り裂いたのだ。苔状の体毛が宙にいきおいよく舞った。バブーンは、コナンの目の前にぶざまな格好で落下した。
「くそっ！」

さらにコナンが、渾身の力をこめてギラの呪文をかけた。
コナンが今までかけたギラの呪文のなかで、一番大きい強烈な呪文だった。
爆風のようなすさまじい火炎の嵐を浴びて、バブーンの巨体が後ろに吹っ飛んだ。
そこを、すかさずアレンが斬りかかった。
黄色い鮮血が飛び散った。アレンはさらに、斬りかかった。
血まみれのバブーンは、必死にもがきながら、アレンの首に鋭い爪を突き立てようとした。
だが、そこまでだった。バブーンは、突然カッと目を見開くと、そのまま地響きを立てて崩れ落ちた。一瞬はやく、アレンの剣が心臓をひと突きにしていたのだ。
「しっかりしろ！」
アレンは、剣についた血痕を振り落としながら、馬車のそばに倒れている馭者に駆け寄って抱き起こした。
馭者は、すぐ気がついた。幸い、傷はなかった。
いきなりバブーンに後頭部を殴られて、気を失って倒れたのだ。
だが、コナンが起きあがれないでいた。
「だ、大丈夫ですか!?」
少女は、慌ててコナンに駆け寄った。
アレンたちと同じくらいの年齢で、色白の、涼しげな瞳をした、可憐な少女だった。

整った顔には、気品すらあった。身にまとっているものも最上級の絹だ。
一目で裕福な家族の娘であることがわかった。
「な、なんのこれしき――！」
コナンは、必死に立ちあがろうとした。だが、
「うっ！」
大きく顔を歪めて、ふたたび足首を押さえて倒れこんだ。
「わたしどものところへおいでください。すぐお医者さまに診ていただかなければ――」
「へ、平気だよ――。ほっときゃすぐ治るさ――」
「いけません」
少女は強い口調でいうと、
「それではわたしの気がすみません。それに、おじいさまにも叱られます」
じっと哀願するようにコナンを見つめた。
どうしても諦めそうもなかったので、アレンたちは少女の言葉に従うことにした。アレンたちを乗せた二頭立ての馬車が、杉並木から街道に出ると、馭者は鞭を打って加速した。
少女は、レシルと名乗り、祖父の使いで神殿に来たのだといった。
アレンが、何の神殿なのかたずねると、レシルは一瞬キョトンとした。ルプガナの人なら、だれでも知っている神殿だからだ。

レシルは、神殿には海の神である竜神が祀られていて、航海の安全を願う船乗りたちが出航前に必ず詣でるところだと説明して、

「ルプガナは初めてなのですか？」

と、逆にたずねた。

「ぼくたちは大神官ハーゴンを倒すために旅をしてるのさ」

アレンに代わってコナンが答えた。そして、自分たちの名を明かした。

レシルは驚いて、三人の顔を見ていた。

目の前に、荘重な三層建ての城門が迫ってきた。

城門のアーチの上に、翼を広げて飛翔する海鳥の像があって、その下に見なれない古代文字の短い言葉が刻まれていた。

アレンは、ローレシア城下の外門に刻まれた『訪れる者にやすらぎを――。立ち去る者に幸いを――』という言葉を思い出して、レシルに意味をたずねると、

「『すべての者に自由の翼を――』。この町を蛮族から守った人の言葉ですわ」

レシルは、誇らしげに微笑んだ。

およそ四〇〇年ほど前――。

ルプガナの町は、グフト王朝の王都だった。

だが、ある夜、突如北部の蛮族の大軍に襲われたのだ。

蛮族は、町を制圧すると、荘厳華麗なルプガナ城に火を放ったのだ。
こうして、一〇〇〇年つづいたグルフ王家は滅亡し、町は蛮族の支配下におかれた。
だが、蛮族の支配にたまりかねた町の有志が、「ルプガナ奪還」に立ちあがり、町は戦場と化したのだ。当時から貿易港として栄えていたルプガナの町は、もともと自由の気風の強いところだった。
そして、二年におよぶ闘いの末、やっと蛮族の大軍を倒すと、「自由と平和」の旗印のもとに、自分たちの手で町を治めることに決めたのだ。
こうして、自由自治の国ルプガナが誕生したのだ。
馬車は、城門の薄暗いアーチを抜けて町に入った。
町は活気に満ちていた。さまざまな商店が軒を並べ、買物客で賑わっている。
その上空を、たくさんのカモメが鳴きながら舞っていた。
馬車は、大通りを慌ただしく駆け抜けて、町の中心である大聖堂前の広場まで来ると、前方の道のむこうに大型帆船が停泊している港の光景がちらっと見え、アレンは思わず身を乗り出した。
だが、馬車は港の方にはむかわず、大聖堂の横を左に折れた。
やがて、前方の小高い丘に、城壁に囲まれた荘厳な館が見えてきた。

2　ラーミア号

案内された館の部屋の窓から、ルプガナの美しい町並みとたくさんの大型帆船が停泊している港、さらには岬に囲まれたルプガナ湾までが、一望に見渡せた。

また、部屋は船のキャビンを模して作られていて、壁にはいくつもの美しい帆船の絵画が、棚には珍しい地球儀や帆船の模型や、異国情緒たっぷりな壺や、遺跡から発掘されたと思われる古い石像や古代文字の刻まれた青銅の鏡が飾ってある。

アレンとセリアが、この部屋で待っていると、やがて右足首に包帯を巻いたコナンが松葉杖をつきながら、レシルと七〇過ぎの白髪痩身の老人につき添われてやって来た。

館に到着すると、すぐ当家の主治医が呼ばれ、別室で治療を受けていたのだ。

老人は、主治医ではなく、当家の主・ハレノフ八世だった。

「ようこそ、おいでくださいました――」

ハレノフ八世は、レシルとそっくりな涼しげな目で微笑むと、

「レシルの祖父で、貿易商のハレノフ八世でございます――」

と、丁重に挨拶をした。

物腰のやわらかい、気品にあふれた仕種に、二人は思わず見惚れた。

「コナンさまの足は一〇日もあれば、もと通りに歩けるようになるそうでございます」
ハレノフ八世はそういって、アレンとセリアに椅子を勧めた。
レシルは、コナンの手を取って椅子に座らせた。
「ま、それまでご遠慮なく、ごゆっくりと、この館でお過ごしくだされ――」
「ぜひそうしてください」
レシルも、微笑んだ。
「でも、これ以上迷惑をかける訳には――」
戸惑いながらアレンがいうと、
「いいえ。迷惑だなんて、おそれ多い――。可愛い孫娘を魔物から救っていただいたんです。それに、アレフ七世さま、リンド六世さまにも――」
「父上たちを知ってるんですか？」
思わずコナンがハレノフ八世の言葉を遮ってたずねた。
「はい。それに、ファン一〇三世も――」
ハレノフ八世は、悲しそうにセリアを見た。
「何度かお会いして、仕事のことで、いろいろと便宜を図っていただきました――。ですから、どういたしましても――」
アレンたちは、互いに顔を見合わせた。そして、言葉に甘えることにした。

「よかった」
レシルは、嬉しそうにハレノフ八世を見て微笑んだ。
「セリアさま――」
ハレノフ八世は、小さく溜息をつくと、顔を曇らせていった。
「よかったら、ムーンブルクでのできごとをお聞かせ願いませんか――？」
「はい――」
セリアは、テーブルに視線を落として、おもむろに話し始めた。
セリアの話が終わると、
「そうでしたか――。お可哀相に――」
ハレノフ八世は、そっとハンカチで涙を拭った。
「さぞ、国王も無念だったことでしょう――。わたしもできるだけのことはいたします。なんなりとお申しつけくだされ――」
「邪神の像――って聞いたことがありますか？」
さっそくアレンがたずねた。
「邪神の像？」
「はい――」
アレンは、魔女に聞いたことを話した。

だが、ハレノフ八世は首を横に振った。
「わたしは、世界中を航海してますが、残念ながらそのようなことは――。でも、あとで船乗りたちに聞いてみましょう。で、これからどうなさるおつもりです?」
「アレフガルドに渡るつもりです」
「アレフガルドへ?」
「船があるかどうか知りませんか? ラダトームへ行く?」
「それなら、たった数日前に定期船が出航したばかりです。次の便は来月にならなければ――。夏場なら、月に三便あるのですが、冬場は海が荒れますので――」
「そうですか――」
アレンたちは、顔を見合わせて溜息をついた。
「そういえば、アレフガルドの国王が、ムーンブルクが壊滅した直後からどこかにお隠れになってしまったとか――」
「えっ?」
アレンたちは、驚いてハレノフ八世を見た。
「代わって、遠縁にあたる方が国を治めておるという噂を聞きましたが――」
「ど、どういうことなんだ?」
アレンは、四年前会ったときの、恰幅のいい温厚なラルス二十二世の顔を思い浮かべた。

二〇〇年前――当時のアレフガルドの国王ラルス十六世は、王女ローラと結婚した勇者アレフに国王を継承して欲しいと思っていたが、アレフがローレシア大陸にローレシア国を建国したために、しかたなく王妃方の血縁の貴族に王位を譲って、ラルス家を継がせたのだ。

その結果、ラルス十六世を最後にして、アレフガルドでのラルス家の血が絶えてしまったのだ。

だが、ラルス家は六年に一度のロト祭を主催しなければならない重要な任務を持っていた。

そして、代々の国王がその職務を果たしてきたのだ。

また、現国王のラルス二十二世も、四年前までは立派に務めたのだ。

さらに、二年後に迫ったロト祭を成功させなければならない責任があるのだ。

「だらしがないなあ。なにを考えてんだあ？」

コナンは舌打ちをした。怒りを越えて呆れてしまったのだ。そして、

「しかし、あとひと月かあ――」

と、肩で大きく溜息をついた。

「船、どうにかならないの、おじいさま」

レシルが気の毒になってたずねた。だが、ハレノフ八世は、

「一口に船と言ってものぉ。五、六〇人の船乗りを――」

と、いってはっと顔を輝かせると、

「そうだ。いい船がある。小さいが非常に性能がいいよくできた船でして、四、五人でも動かす

ことができます。よかったら、この船を差しあげましょう。しばらく放ってあるので、かなり手を入れなければなりませんが、さっそく行ってみましょう」

と、立ちあがった。

「船の名はラーミア号というんです」

馬車に乗ると、ハレノフ八世がいった。

「ラーミア――？　ラーミアって、あの伝説の不死鳥のことですか？　精霊ルビスを乗せて天界からやって来たという――？」

思わずアレンが聞くと、

「そうです。昔、このルプガナのはるか南方にあるベラヌールに、船を造らせたら右に出る者がいないといわれた船造りの名人がおったそうです――」

と、いって話し始めた。

およそ三〇年ほど前のことだ――。

ハレノフ八世の友人のベラヌールの貿易商が、この船造りの名人に、素晴らしい船を造って欲しいと依頼した。

それまでに、名人は何隻も貿易商の船を造っていたからだ。

また、名人は九〇に手が届こうとしていたので、これが名人の最後の仕事かもしれない、と思

ったからだ。
だが、もう船は造りたくない、とそっけなく断られたのだ。
諦めきれない貿易商は、何度も足を運ぶと、名人は最後に、好きなように造らせるなら、と答えたのだ。貿易商は、喜んで承知した。
貿易商は、当然のように、素晴らしい大型船が完成すると頭に描いていた。
ところが、貿易商の意に反して、名人は小さい船を造っていたのだ。
驚いた貿易商は、こんなに小さくては商売の荷が積めないではないか、壊して大型船を造り直せ、と命じたのだった。
だが、名人は、頑として受け入れなかったのだ。何度説得しても、首を縦に振らなかったのだ。
貿易商は、渋々帰るしかなかった。
こうして、五年の歳月をかけてやっと船は完成したのだ。
船首には美しいラーミアの像が飾られていた。
だが、完成した翌朝のこと。若い弟子が、完成したばかりの船の甲板に横たわっている名人を発見して悲鳴をあげた。名人はすでに息を引きとっていたのだ。
その顔はおだやかで、微笑んでいるように見えたという――。
「それで、その船はラーミア号と呼ばれるようになったのだそうです。ところが――」

ハレノフ八世は、ひと息入れて、さらに言葉をつづけた。
「それから数年後。友人の船が航海中に遭難して、大損害をこうむったのです。金に困った友人は、わたしにこの船を買ってくれないかと持ちかけてきたのです。そこでわたしが特別に高い金で買い取って、ルプガナまで持って来たのです。しかし、この船は小さすぎて商売には使えませんので、そのままドックに入れておいたのです――」
ハレノフ八世の話が終わると、ちょうど馬車は港に出た。
四、五〇〇トン級の大型帆船が幾隻も波止場に停泊していた。
「すげえっ！」
アレンは、その壮観さに、思わず目を見張った。
コナンもセリアも、ただ驚いて目を丸くしていた。
甲板や帆柱にのぼって作業していた船乗りたちが馬車に気づくと、慌ててハレノフ八世に会釈を送った。
この港に停泊している船の半分はハレノフ八世のものだとレシルがいった。
そのなかで、ひときわ大きな帆船があった。
「これもおじいさまの船よ。七〇〇トンもあるの。ほら、あの船首飾りを見て。素敵でしょ？」
レシルが、船首の剣を構えた女性の騎士像を指さした。
「大昔、蛮族からこの町を守るために、先頭に立って闘った勇敢な女性の像よ」

「春になると、毎年船団を率いて航海に出るのですよ。レシルも一緒（いっしょ）に」
そういって、ハレノフ八世は笑った。
レシルは、二歳のときに船の遭難で父を、四歳のときに母を病気で失ったのだ。
それ以来、ずっとハレノフ八世が育ててきたのだという。
また、ハレノフ八世の扱（あつか）う物資は多岐（たき）に渡っていた。小麦などの穀物（こくもつ）、食用油、お茶、香辛（こうしん）料（りょう）、衣料、燃料などの生活物資から、金銀の貴金属類、美術品や骨董品（こっとうひん）、必要とあれば武器までも扱うのだ。それらの物資を売買しながら航海をつづけ、秋に帰港するのだという。
やがて馬車は、巨大なドックの前でとまった。
ドックのなかでは、たくさんの船大工たちが二隻の大型帆船を修理していた。
その奥に、埃（ほこり）をかぶった白銀色のラーミア号がつながれていた。
だが、その姿の美しさは、埃をかぶっていても変わらなかった。
「かっこいい！」
思わずコナンが叫（さけ）んだ。
船首飾りの見事なラーミアの首の像。翼を想像させる美しい優雅（ゆうが）な船体。
二本帆柱（マスト）の、長さ一〇尋（ひろ）、最大幅三尋ほどの小さな船だが、横から見るとまるで飛翔しているラーミアの姿そのものだ。
今にも空にむかって飛んで行きそうだ。

ひと通り船体に目を通すと、ハレノフ八世はいった。
「思っていたよりはるかにしっかりしている。これなら、一〇日もあればなんとか格好がつくでしょう」
「だけど——」
コナンが、急に不安な顔をしてアレンにいった。
「ぼくたちだけでどうやって動かすんだよ。三人じゃ、ここから出すことだってできないぜ」
「ご心配はいりません。ガナルをお供させましょう」
と、ハレノフ八世がいった。
「海のことならなんでも知っている男です。多少偏屈なところがありますが——」

3　セリアの涙

ガナルは、目が異様に鋭い、色黒で小柄な老人だった。
猫背で、白髪まじりの髪を短く刈っている。一見七〇歳近くに見えるが、力も強いし、身のこなしもすばやかった。見た目よりずっと若いのかも知れない。そのうえ、無口で、無愛想だった。
「あれでも、見かけによらず、気がやさしいところがあるのよ」
レシルはそういって、航海中はハレノフ八世のそばで小間使いのような仕事をしているが、豊

富な経験と知識から船乗りたちから一目置かれているのだ、と説明してくれた。
翌日から、このガナルの指揮で、船大工たちがラーミア号の修復工事を始めた。
昼休みになると、ガナルがアレンたち三人を小船に乗せて、冷たい北風の吹く湾に漕ぎ出した。
理由もいわず、強引に乗せたのだ。
空はどんよりと曇り、風は身を切るように痛かった。
そして、湾のなかほどまで行くと、
「ご無礼かと存じますが――」
といって、いきなり三人を冷たい海に突き落とすと、振り向きもせず小船を漕いで港に引き返して行ったのだ。
アレンたちは慌てて泳ぎ始めた。
アレンたちは、毎年のように夏には海の別荘に行っていた。
アレフ七世は南ローレシアに、リンド六世はローラの門の近くに、ファン一〇三世はロンダルキアの中海に、それぞれ大きな別荘を持っていたから、三人はなんとか泳ぎの心得はあったのだ。
だが、突き落とされたところから港まで、気が遠くなるほど距離がある。そのうえ、波が荒い。濡れた洋服が体にぴったりと吸いついて鉄のように重い。手を休めると、とたんに海の底に引きこまれそうになる。
三人は、必死で泳いだ。特に、足首を傷めているコナンはかわいそうだった。

ガナルは、ドックのそばの岸壁で焚火をし、湯を沸かしながら、目の細かい金網で豆を煎っていた。やがて豆が香ばしい匂いを放つと、その黒く煎った豆をやわらかな白い布に移して、鉄の棒の先で丁寧に細かく砕いた。

三人はやっと港まで泳ぎ着き、最後の力を振りしぼって岸壁に這いあがった。

ふらふらして、立っているのがやっとだった。体は完全に冷えきっていた。奥歯をがたがたさせながら、三人はつづけざまに大きなくしゃみをすると、

「なんてことすんだよっ！」

右足を引きずりながら、コナンがガナルに喰ってかかった。

「ぼくは足を痛めてるんだぜ！　それにセリアは女性だ！」

「なぜやったかちゃんと説明してくれないか」

アレンも抗議した。すると、

「板一枚下は恐ろしい海なのですよ。けが人も女も関係ねえ。みんな同じ運命を背負ってるんでさあ。それが海ってもんでしてね――」

ガナルはそういいなから、細かく砕いた豆に沸騰した湯を通して、銅のポットに溜めた黒い液体を三個のカップに分けると、

「これで体を温めてくだせえ。南の島で教わったんでさあ」

と、三人にカップを渡して、肩を丸めながらドックのなかに消えた。

カップのなかの飲物はまっ黒な色をしているが、なんともいえず香ばしい匂いがする。三人は、そっと啜った。だが、とたんに吹き出して、
「に、にげえっ！」
コナンは、思わず手で口を拭いた。
ハレノフ家の夕食の食卓には、鮭の燻製、野ガモとキノコとレバーのテリーヌ、野菜とキジ肉のスープ、タラの白身とジャガイモの細切りの揚げもの、鹿肉のステーキ、サラダなどの豪華な料理が並んだ。
食事をしながら、そのことをハレノフ八世に話すと、
「はっははは。それはとんだ災難でございましたな」
と、笑った。
「笑いごとじゃないよ」
コナンは、むっとした。
「いや失礼しました。それは昔からこの港に伝わる、船乗りたちの儀式なのです。船乗りになると、必ず最初の日に、先輩たちが湾に連れ出して、海に投げこむのです。そして、無事泳ぎ戻ると、やっと仲間として認められるのです。最初の日に、海の厳しさを叩きこむのです」
「それしても――」
まだコナンはむっとしていた。

「それから、例の邪神の像のことですが――」
アレシたちは、思わずハレノフ八世を見た。
「船乗りたちに、当たってみさせたのですが、だれひとり知りませんでした」
「そうですか――」
アレンは、溜息をついた。
そんなに期待していた訳ではなかったが、やはり落胆した。
どんな些細なことでもいいから情報が欲しいからだ。藁をもつかむ心境なのだ。
それに、昨日と今日の二日間ルプガナにいるだけで、アレンは少し苛立ちを覚えていた。一歩でも前へ進んでいなければ、気がすまないのだ。不安になるのだ。焦ってくるのだ。ルプガナでの生活が平和でのどかなだけに、余計そうなのだ。
一瞬、会話が途切れた。すると、レシルが、
「もう少し出発をのばすことができないんですか？」
と、まむかいのコナンにたずねた。
「だめだよ。一刻でもはやくもうひとりの魔女を捜して、邪神の像のことを聞かなきゃならないんだから」
コナンが、食べながら答えると、
「そう――。そうよね――」

レシルは、寂しそうに笑った。
「みんなでこうやって楽しく食事するの、生まれて初めてなの。いつも、おじいさまと二人っきりの食事でしょ——」
「おいおい、そんなにわしと食事するのがつまらんのか」
ハレノフ八世は、苦笑した。
「そうじゃないけど、三人がずっとこのままいてくれたらいいなあって、ふと思ったの——」
実際、アレンたちとレシルは、昔からの知り合いだったようにすぐ仲よくなった。
控え目でおとなしかったレシルが、三人と一緒にいると、生き生きしていた。よくお喋りをするし、楽しそうに笑った。
ハレノフ八世は、こんな明るいレシルを見るのが初めてだった。
また、ハレノフ八世自身も、レシルと三人のやりとりを見ていると、なんとなく心がなごんだ。
こんな気持ちになるのは、久しくなかったことだ。少なくとも、レシルの父親が死んでからは。
ハレノフ八世は、三人が滞在していることに、心から感謝していた。
コナンが、まっ先に自分の料理を食べ終えると、
「ああ。おいしかった——！」
と、満足そうに腹をさすってみんなを見た。
だが、隣の席のセリアは、ほとんど料理に手をつけていなかった。

セリアは、ナイフとフォークを握ったまま視線を落として、じっと思いつめたように一点を見つめていた。その瞳が潤んでいた。

「どうしたのセリア？」

コナンは、思わずたずねた。

だが、セリアは小さな肩を震わせて、泣き出したのだ。

「セリア——？」

コナンとアレンは、驚いて顔を見合わせた。

すると、セリアはナイフとフォークを置いて、いきなり立ちあがった。

そして、泣きながら、食堂から飛び出して行ったのだ。

「セリア！」

アレンとコナンが立ちあがったのが同時だった。

コナンは、すかさず松葉杖をつかんで足を引きずりながら追って行った。

アレンも追おうとしたが、一瞬コナンの方がはやかったのだ。

「わたし、なにか悪いこといったかしら——？」

レシルは不安そうにアレンを見た。

「ひょっとしたら、ムーンブルクのことを思い出したのかも知れない。ファン一〇三世や王妃のことを——」

「そう――」
レシルは、心配そうにハレノフ八世と顔を見合わせた。
しばらくして、コナンが血相を変えて戻って来た。
「アレン！　部屋にもどこにもいないよ！」
「えっ？」
「きっと外へ飛び出したんだ！」
「外へ？　ちょっと捜して来ます！」
そういって、アレンは慌てて飛び出して行った。
コナンも慌ててアレンを追った。そして、レシルも――。
アレンは、中庭に飛び出した。だが、セリアはどこにもいなかった。
夜になって風はやんでいたが、そのかわり寒さが厳しさを増している。
アレンは、館の門を出て、通りに飛び出した。
だが、通りには、人影（ひとかげ）もなく、ひっそりと静まり返っていた。
アレンは、港の方へ足を向けた。
波止場に停泊している外国船の船室から、明かりが漏（も）れていた。
そして、船体にぶつかる波の音にまじって、ときおり船室から船乗りたちの談笑している声が聞こえてきた。

この船の栈橋の先端で、セリアがうつむいたままたたずんでいた。
アレンは、そっとセリアの背後に近づいて、声をかけた。
おもむろに、セリアが振りむいた。大粒の涙が頰を流れている。
セリアは、じっとアレンを見つめると、いきなりアレンの胸に顔を埋め、声をあげて泣いた。
アレンは、やさしくセリアの肩を抱きしめた。慰める言葉もなかった。ただ、気がすむまで泣かせてやるしかないのだ。
やがて、セリアが泣きやむと、
「ごめんなさい――。みんなに悪いことしたわ――」
と、やっと聞きとれるような小さな声でいった。
「ファン一〇三世や王妃のことを思い出したのか――」
アレンは、そういいながら、そっと指でセリアの涙を拭いてあげた。
「――」
セリアは、小さく頷いた。
ラーのほこらでアレンたちと再会してからすでに九〇日、ずっと緊張の連続だった。
いつも、思いつめたような哀しい顔をしていたが、長い髪をばっさり切り落としてからは、一度として涙を見せたことがなかったのだ。
だが、安全なルプガナに来て、レシルやハレノフ八世とうち解けると、やっと緊張感から解放

されたのだ。
そして、今夜のなごやかな食事の雰囲気に、ふとムーンブルク城での楽しい食事の光景がよみがえって、ファン一〇三世と王妃のやさしい顔を思い出したとたんに、涙をこらえきれなくなったのだ。今まで耐えていた悲しみがどっと襲ったのだ。
そのとき、ふわっと白いものがセリアの頬に落ちて、すっと消えた。
「あっ――」
セリアは、思わず空を見あげた。
まっ暗な空から、白いものがふわりふわりと舞い落ちてくる。雪だった。
「ずっと、あなたのことを待っていたわ――」
雪を見つめながら、セリアはつぶやくようにいった。
「勇者ロトとアレフの血をひく若者が助けにやってくるってサルキオに聞かされてから、ずっと――。犬に姿を変えても――。うれしかった――」
そういって、セリアは自分の胸の翠色のペンダントを握りしめた。
「ペンダント――かけていてくれたから――」
「ぼくもだよ、セリア――」
アレンはペンダントを、鎖を千切られてから、ずっと革袋の底にしまったままだった。
「ほんと――？」

「この四年間、一日としてセリアのことを忘れたことがなかった――」
二人は、熱いまなざしで見つめ合った。
「ほんとは――あなたの胸で泣きたかった――。何度そう思ったことか――。でも――コナンも一緒だし――。それに――再会してから、なんだかあなたは冷たかったわ――。嫌われているのではないかと思った――」
「ぼくも、すぐ抱きしめたかったさ――。でも、コナンのことを思うと――」
アレンは、四年前に互いに抜けがけしないとコナンに約束させられたこと、さらにはペンダントのことでコナンとやり合ったことを話した。
「そうだったの――」
セリアは、ふたたびアレンの胸に顔を埋めた。
「セリア――」
アレンは、セリアの背中を抱きしめた。
そのときだった。セリアを捜しながらやって来たコナンが、倉庫の角を曲がりかけて、愕然として立ちどまってしまった。
そこへ、コナンを追ってレシルがやって来て、「どうしたの――？」と、声をかけようとして、栈橋の先端のアレンとセリアの姿に気づいた。
コナンは今にも泣き出しそうな顔でキッと唇を噛みしめると、乱暴にレシルを押しのけて、今

来た道を逃げるように松葉杖をつきながら駆け去った。
あ然として、レシルはコナンを見送った。
このとき、初めてレシルはコナンがセリアを好きだということを知った。
レシルの心は急にざわめいた。生まれて初めて感じる感情だった。
そして、コナンに好意を抱いている自分に気づいた。
と、同時に、セリアに初めて嫉妬を覚えたのだ――。

4　出航

修復工事が始まってから六日目、外装工事が終わると、ラーミア号はドックを出て桟橋につながれた。
そして、九日目に船室の内装工事が終わると、さっそく水や食糧が積みこまれた。
その間、アレンたちは、綱の結び方や帆のあげ方、海図や星座の見方、羅針盤での方位の測り方などの基本知識をガナルから教わった。
桟橋でアレンとセリアを見かけた夜、コナンは隣のベッドで眠っているアレンに気づかれないように、布団を頭からすっぽりかぶって朝まで泣いた。涙が流れてとまらなかった。
だが、翌朝からは、桟橋でのことはおくびにも出さず、以前と同じような態度でセリアに接した。

そんなコナンを、レシルはいじらしく思った。もちろん、レシルも桟橋でのことを口にしなかった。コナンが傷心に耐えているかぎり、絶対に口外しまいと固く自分に誓ったのだ。

また、アレンもセリアも、二人の関係をコナンに悟られまいとして、以前と同じようにコナンに接した。

だが、あの夜を境に、セリアが変わった。思いつめたような暗い顔をすることが少なくなった。いくらか明るくなったのだ。ときおり、笑顔も見せるようになった。

そして、ルプガナに到着してから一〇日目の朝――。

その日は、めずらしくよく晴れていた。絶好の出航日和だった。

雪が降ってからは、どんよりと曇った日がつづいていたのだ。

数日前には、航海安全の祈願をしに、郊外の神殿にも行って来た。

すべての準備が完了していた。

アレンたちは、ハレノフ八世とレシルに別れを告げると、ガナルが待つラーミア号に乗りこんだ。

ラーミア号の帆柱の上で、女性の騎士像をあしらったハレノフ家の旗がなびいている。

この旗があれば、どこの港でも自由に出入りできるのだ。

ガナルが錨をあげた。白い帆を張った白銀色の美しいラーミア号が、ハレノフ八世とレシルが見送る桟橋をゆっくりと離れると、突然、ハレノフ八世所有の大型船の銅鑼が一斉に港に響き渡った。

船乗りたちが航海の安全を祈って、銅鑼を鳴らしてくれたのだ。
涙を流しながら必死に手を振るレシルの姿が、だんだん小さくなった。
コナンは、握りしめていた美しい水色の石をそっと見た。
レシルがこっそりくれた、親指の爪ほどの大きさの、六角形の宝石だ。
朝食後、コナンを呼びとめたレシルが、
「大神官ハーゴンを倒したら、必ずルプガナに来てね」
と、熱いまなざしでコナンを見つめていった。
「わたし、いつまででも待っています――」
「えっ？」
一瞬、意味をはかりかねてコナンはキョトンとした。
すると、レシルは顔をまっ赤にしてうつむいて、
「これ――お護(まも)りだと思って大事にしてください――」
と、この美しい石をくれたのだ。
石はもともと一対(いっつい)の石で、レシルが成長したら耳飾りにしようと思って、亡き父がレシルの誕生祝いに異国から買って来たものだ。いわば、亡き父の形見のようなものだった。
いつのころからかレシルは、好きな人ができたらこの石のひとつを愛の証(あかし)として渡そうと考えていたのだ。もちろん、レシルはそのことをコナンにはいわなかったし、コナンもまたこの石にこ

められた意味を知るはずもなかった。
やがてラーミア号は湾を出ると、ルプガナの美しい町並みが、岬の陰に隠れた。
急に波が高くなった。風も強くなった。帆がいきおいよくはらんだ。
前方には、見渡すかぎりの大海原が広がっている。
このはるか東に、目指すアレフガルド大陸があるのだ。
アレンたちは、水平線を見つめて、大きく深呼吸した――。

5　悪魔神官

「いつまで待たせれば気がすむのじゃ！」
大神官ハーゴンのおどろおどろしたぶきみな声が、大理石の神殿に響き渡った。
近衛司令官ベリアルと悪魔神官がひれ伏している中央の祭壇の奥の大理石に、巨大な黒い影がゆらゆらと揺れながら写っている。ハーゴンの仮の姿だ。
「おまえたちを魔界から呼び寄せたのは、一刻もはやく邪神の像を手にするため！　ムーンブルクの王女ごときのことで、もたもたするでないっ！」
「はっ、申し訳ございませぬ！　しかしながら大神官さま、今しばらくのご辛抱を――！　かならずや、近いうち――！」

ベリアルが、答えた。
「当てはあるのじゃなっ！　当てはっ！」
「は、はっ――」
ベリアルは、額の冷汗（ひやあせ）を拭いた。
当てなどないのだ。直属の部下のバズズやアトラスやアークデーモンが、相変わらず王女を捜していたが、なんの手がかりもつかめてないのだ。
そのとき、横から悪魔神官が口をはさんだ。
「大神官さま――！」
「なんじゃ！」
「ロトとアレフの血を引きし者ども、邪神の像を手に入れようと旅をつづけておるのだそうです」
「なに⁉ロトとアレフの⁉」
「しかしながらご安心くだされ！　王女はかならずやこのわたくしが――！」
悪魔神官は、ベリアルを見てにやりと笑うと、自信たっぷりに答えた。
王女セリアが今ルプガナにいるという情報を、ついさっき手に入れたばかりなのだ。
「もはや王女はこの手にあるも同然！　近々、ご朗報をお届けいたしましょう！」
「な、なにっ？」
驚いてベリアルは悪魔神官を見た。

「ど、どういう意味だっ？　手にあるも同然とはっ？」
だが、ハーゴンは一喝した。
「だれでも構わん！」
「ははっ！」
ベリアルと悪魔神官が、ふたたびひれ伏した。
「とにかく、一刻でもはやく捕まえるのじゃっ！　これ以上の無駄は許さぬ！」
そういうと、ハーゴンのぶきみな黒い影はさらにはげしく揺れ、やがて消えた。
すると、ベリアルが、悪魔神官の腹を探るように鋭い眼でにらみつけた。
「かたはら痛いわ。われわれ魔物を差し置いて、おぬしら人間に何ができるっ？」
「いずれ近いうちに答えは出る。ただ力が強いだけが能じゃないということがな」
悪魔神官は、悠然と答えて立ち去った。
そして、自分の部屋に戻ると、
「ガルドよ——！」
と、叫んだ。
だが、返事がなかった。
「ガルドッ！」
さらに、声をあげて叫んだ。

そのときだった。かすかに笛の音が聞こえてきた。
「ちぇっ——」
悪魔神官は舌打ちをした。
粉雪が舞う神殿の外の回廊の手すりに腰かけて、若者が静かに横笛を吹いていた。烈風の吹きすさぶ砂漠のなかのルプガナ街道で、アレンたちの動きを崖の上から氷のような冷たい目でじっと追っていた、あの若者、ガルドだ。
悪魔神官に王女セリアやアレンたちの情報を伝えたのは、このガルドなのだ。
悪魔神官は、足ばやに回廊に出て来た。だが、ガルドの後方で立ちどまると、苛立ちながら笛が終わるのを待った。
以前、悪魔神官が急用があって、笛を吹いていたガルドから強引に笛を取りあげようとしたことがあった。だが、目の前からガルドが姿を消したと思った瞬間、悪魔神官は喉元に剣の刃先を突きつけられていたのだ。そして、
二度と笛の邪魔をするんじゃねえ——。
冷酷な目でそういわれたのだ。以来、どんなときでも、笛の終わるのを我慢して待つことにしたのだ。怒らせたら損だからだ。
それにしても——ガルドの後ろ姿を見ながら、悪魔神官は心のなかで呟いた。
王女の居所をわかっていながら、なぜ捕まえて来なかったのか、疑問に思ったのだ。

なぜだ――？　ガルドともあろう者が――と。
やがて、ガルドが唇から笛を離すと悪魔神官はいった。
「ただちに王女を捕まえてくれ！　一応配下の者どもにも命じてはおくが、あてにならぬのでな！　それに、新参者(しんざんもの)の魔物らにだけは先を越されたくない！」
「――」
おもむろにガルドが振りむいて、じっと氷のような目で見ると、
「王女がいるだけで、ほんとうに邪神の像を手に入れることができるのか――」
「ど、どういう意味だっ？」
ガルドは、さぐるようにじっと悪魔神官を見ていた。
それ以上のことは何も聞かされていないからだ。
だが、そんなことはガルドにとってはどうでもいいことなのだ。
「ふと、思っただけだ――」
ガルドはそういって、にやりと笑った。
「とにかく頼む！　礼はたんまり弾むっ！」
「――」
ガルドは、ふたたび唇に笛を当てた。
粉雪のなかに、美しい笛の音色(ねいろ)が流れた――。

第五章　なつかしのアレフガルド

冬の海は荒れていた。
好天に恵まれたのは、出航したその日だけだった。
荒れ狂う高波と、容赦なく吹きつける横なぐりの風に、小さなラーミア号は木の葉のようにはげしく揺れた。
ルプガナ港を出航して五日目の朝、前方のはるか東の海に、潮に煙るアレフガルド大陸が見えてくると、ラーミア号は針路を変え、大陸にそって南下し、さらに西南の岬を回って、東に針路をとった。
そこで、ラーミア号はすさまじい冬の嵐に見舞われた。
だが、やっとこの冬の嵐を乗り切ると、勇者アレフが竜王の島へ渡る前にローラ姫とたどり着いたという聖なるほこらのある最南端の島の手前を北上し、潮の流れの速い海峡を抜け、かつて竜王の島があったというアレフガルド大陸の中海に入った。
中海は外洋に比べれば、おだやかだったが、それでも冬の海には変わりはなかった。

ルプガナ港を出航してからすでに二〇日、暦（こよみ）はあと一〇日で、竜（ドラゴン）の月から寒さの一番厳しい王（キング）の月に変わろうとしていた——。

1　和解

アレンは、舵輪（だりん）のそばの手すりにつかまりながら、前方の海上を見つめていた。
頬（ほお）はげっそりと落ちている。目はうつろだった。
体には、毛布を巻きつけているが、それでも震（ふる）えるほど寒かった。
一番寒い夜明け前だから、なおさらだった。
手すりをつかんでいる手の感覚は、ほとんど麻痺（まひ）していた。
それでも手すりから手を離（はな）すことができないのだ。
いきなり大きな横波を受けて、はげしい衝撃（しょうげき）とともに、船が揺れるからだ。
もし振（ふ）り落とされたら、高波にのまれて、一巻の終わりだ。
だが、帆（ほ）は力強く風を受け、船は順調に北上していた。
夜は、六時間ずつ、二交代で番をすることに決まっていた。

アレンとコナン、ガナルとセリアの組合わせは、最初から変わっていなかった。
それにしても、嵐の後遺症が大きかった。
嵐を抜けて五日たった今でも、全員が疲れ果ててぐったりしているのだ。
はるか頭上からのみこむように襲いかかってくる怒濤。横なぐりのすさまじい吹雪。
それは、地獄のような嵐だった。
波を受けるたびに、船は大きく軋みながら、上下左右にはげしく揺れた。
たちまちアレンたち三人は船に酔い、最悪の状態になったのだ。
船のことはガナルに任せて、三人は苦しさにのたうち回り、ベッドの縁にしっかりつかまっていた。でなければ、はげしい揺れにいきおいよく放り投げられて、船室の板壁にいやというほど全身を叩きつけられてしまうからだ。
胃のなかのものを全部吐き出すと、胃はなにも受けつけなくなり、三人の体力は見る見るうちに消耗していった。
特にセリアがひどかった。最後は、ベッドの縁につかまっている体力さえもなくなり、ベッドに綱で結わえつけなければならなくなった。
そのうえ、怒濤が容赦なく船室を襲い、必死に浸水を防がねばならなかった。
四人は、何度も死を覚悟した。
嵐は七日間もつづいた。嵐をなんとか切り抜けると、

「いろんな海を航海してきたが、こんなひどい嵐は初めてでさあ。この船だから、なんとか切り抜けられたが、普通の船なら二日と持たねえ――」
さすがのガナルも疲れきって、声を出すのもやっとという状態だった。
「さすがは、ゲバルデじいさんだ――」
「ゲバルデ――？」
アレンも、やっと声を出していった。
「この船を造った、船造りの名人のことでさあ――」
「――？」
コナンもセリアも疲れきった顔をあげてガナルを見た。
「昔、ベラヌールに行くと、よく世話になったもんでさあ――。一度、じいさんに、こんな話を、聞いたことがある――」
そういって、ガナルが、ゲバルデの話を始めた――。

ゲバルデは、若いころ船乗りだった。
だが、二〇歳のとき、嵐にあって船が遭難し、荒れ狂う海に放り出された。
やがて波にのみこまれたゲバルデの意識は遠のいていった。
ところが、突然すさまじい激痛を覚えて、はっと気がつくと、右足を恐ろしい鮫に食われてい

たのだ。
さらに数匹の鮫が、血の臭いに誘われて接近してきた。ゲバルデは、観念した。
そのときだった。突然まばゆい銀色の光につつまれたかと思うと、その光とともにゲバルデの体がすーっと浮上し、海中から海上へ、さらに空へとどんどん上昇したのだ。
だが、海上へ出たところで、ゲバルデはすでに気を失っていた。
そのあと、どうなったかゲバルデにはわからなかったが、突然ゲバルデは、まばゆい光を放ちながら空を飛翔する美しい鳥を見たという。
まばゆい銀の翼を広げて優雅に舞うその美しい姿に、ゲバルデは心を奪われた。
その翼の色は、ゲバルデをつつんで上昇したあのまばゆい光と同じ色をしていた。
鳥は、精霊ルビスが天界から来るときに乗っていたという、伝説の不死鳥ラーミアだった。
ラーミアは、何度もゲバルデの上空で舞うと、やがて空高く飛んで行って消えた。
そして、はっと気がつくと、ゲバルデは美しい島の浜辺に打ちあげられていたのだ。
命を助けてくれたのは、伝説の鳥ラーミアだ——ゲバルデはそう信じて疑わなかった。
だが、ゲバルデは、大事な右足を失っていた。
船乗りを諦めたゲバルデは、その後船大工になった。自分でも驚くほど、腕がよかった。
そして、いつの間にか名人と呼ばれるようになったのだ——。

ガナルは、苦しそうに何度も大きく息を吐くと、さらに言葉をつづけた。
「一日も――ラーミアの美しい姿を忘れたことがなかったそうでさ――。年をとっても――美しいラーミアの姿が目に焼きついて離れない――っていっていた――。そして、死ぬ前に――ラーミアのような美しい船を造りたい――。造ってから――死にたい――ってね――。ラーミアのように美しくて――優雅で――それでいて速い船を――。それが――自分に残された――使命だ――って――。じいさん――いつの日か――役立つ――ときがあるって――知ってたんです――ね――。現に――こうして――勇者ロトの――血をひく者たちを乗せて――るんですから――」
いい終わると、すでにガナルが眠っていた。はげしい睡魔に襲われたのだ。
三人もまた、睡魔に襲われていた。
四人は、まる一日死んだように眠りつづけた。
だが、それでも体力は回復しなかった。空腹感はあるのに、相変わらず胃はなにも受けつけようとはしなかった。口に入れても、すぐ戻してしまうのだ。
とにかく、今は一刻でもはやくラダトームの港に着きたいのだ。
やっと東の空が、うっすらと白くなりかけてきた。
アレンは、目をこらして、水平線を見た。そのときだった。
「おい、代わろうぜ。下で休めよ」
毛布を巻いたコナンが、甲板の手すりにつかまりながら船室から出て来ると、持って来た望遠

鏡で前方の海上を見た。
だが、アレンはそこから動こうとしなかった。
そろそろラダトームのある大陸が見えてきてもいいころだからだ。
二人は並んで、しばらく水平線を見ていた。
聞こえてくるのは、風の音と波の音ばかりだ。
「すまなかったな――」
突然、コナンがつぶやくようにいった。
「えっ？」
風に消されて、アレンにはなんといったのかわからなかった。
「セリアのことさ――」
コナンは、照れ臭そうに笑った。
「負けたよ。セリアがおまえを好きなんだから仕様がないよな。いくらぼくが頑張ったって――。
セリアにペンダントのこと聞いたんだよ――」
アレンは、驚いてコナンの顔を見ていた。

嵐のあとのことだった――。
疲れきった四人が、まる一日中眠っていた、その翌朝のこと。

最初に目を覚ましたのは、コナンだった。
自分のベッドで眠っていたコナンが、重い体をやっと起こすと、むかいのベッドで眠っていたセリアが、額に汗を浮かべながら苦しそうに喘いでいたのだ。
コナンは、タオルを濡らして、そっと汗を拭いてやった。
セリアが目を覚ました。
「ありがとう――」
セリアは、力なく微笑んだ。顔は青ざめ、やつれ切っている。
「なんか食べる?」
食糧を捜そうとしたが、水浸しの船室は、足の踏み場もないほど散乱していた。
だが、セリアは首を横に振った。
「じゃあ水は――?」
また、セリアは首を横に振ると、
「ちょっと風に当たりたいわ――」
そういって、ふらつきながらやっと立ちあがって、船室から甲板に出た。
相変わらず、冷たい風が吹いていた。
コナンは、持って来た毛布をやさしく肩にかけてやった。
「ねえ、コナン――」

セリアは、意を決して話し始めた。
「ずーっとあなたはやさしかったわ――。子供のころから――」
「な、なんだよ急に改まって――？」
「わたし――いろいろ考えたの――。でも――こういうことってはっきりしておいた方がいいかと思って――。あなたの気持ちは嬉(うれ)しいんだけど――。ごめんなさい――」
「――」
コナンは、怖(こわ)い顔でセリアを見ていた。
「このペンダント――。わたしが買ったの――。同じものを二つ――」
「えっ？」
コナンは、愕然(がくぜん)とした。一瞬(いっしゅん)、自分の耳を疑った。
「う、うそだっ！」
思わずコナンが叫(さけ)んだ。
「ほんとよ――。そして、ひとつをアレンにあげたの――」
「うそだっ！」
今にも泣き出しそうな顔でコナンがまた叫んだ。
「わたし――ずっと――好きだったの、アレンのことが――。そして、今も――」
「うそだっ！」

たまらずコナンは帆柱の方へ駆け出した。

「正直いってショックだったよ――」

コナンは、大きく肩で溜息をつくと、

「ま、そんなこともあってさ、ここ数日いろいろ考えたけど、男の嫉妬ってのはみっともないからな――。いつか、ペンダントのことで、一度おまえに喰ってかかったことがあったよな。剣の稽古していて。おまえとセリアが同じペンダントを持っていたことがショックだったからな――。だけど、あのあと、自分が惨めになってな、ますます落ちこんでしまったんだよ――。こんな嫉妬深い、度量の小さい男なんて、セリアを愛する資格がない――ってな」

そういってコナンは自嘲した。

だが、セリアがコナンに自分の気持ちを打ち明けたあと――。

コナンが、帆柱の方に駆け出すと、

「待って！　ねえ、お願い聞いて――！　でも、こんなことで三人の関係をぎくしゃくさせたくないの！　コナンとアレンには、いつまでも仲よくしていて欲しいの！　だって、あなたたち、昔から兄弟みたいに仲よしだったでしょ！」

セリアは瞳を潤ませながら叫んだ。

「ぼ、ぼくは、アレンなんか大嫌いなんだよ！　昔っから大嫌いなんだ！　あいつはぼくより背が高いし、頭だっていい！　腕だって立つ！　度胸だって勇気だって、ぼくはあいつにはかないっこないんだ！　だけどさ、だけど、セリアのことだけは負けたくなかったんだ！　セリアだけは、ぼくのものにしたかったんだ！」

　いつの間にか、コナンの目からも大粒の涙がぼろぼろこぼれていた。

「うそよ！　あなたは、アレンのことが一番好きなのよ！　それにあなたはやさしいし、度胸だって勇気だって、その気になればアレンに負けないくらいあるわ！　とにかく、今はわたしのことでアレンと仲違いしないで！　ねえ、お願い！　わたしたちは、三人で力を合わせてハーゴンを倒さなきゃならないのよ！　それが、勇者ロトの、勇者アレフの血をひくわたしたちの役目じゃない！　だから、アレンと仲直りして！　ねえ、お願いコナン！」

　だが、コナンは返事をしようとしなかった。

　キッと唇を噛んで、はるか海上をにらみつけていた。

　その目から、とめどなく涙が流れていた――。

　だが、コナンはあえてこのことをアレンには話さなかった。

　そこまでいうのはコナンのプライドが許さなかったからだ。

　ライバルに対する精一杯の抵抗でもあった。

「――という訳でさ、ま、今のとこは、セリアのことはこっちに置いて――。三人で力を合わせてハーゴンをやっつけようぜ」
照れ臭そうにコナンが握手(あくしゅ)の手を差し出した。
「ありがとう、コナン――」
アレンは、力強くコナンの手を握(にぎ)りしめた。
「ただし、これだけはいっておく。ぼくはだれよりもセリアを愛してる。それだけは忘れるなっ。それからもうひとつ。これ――」
と、コナンは、額の三日月の傷あとを指して、
「気にされると迷惑(めいわく)なんだよ。けっこう気に入ってんだ」
といって、にやりと笑った。
そのときだった。水平線いっぱいに横たわる大陸の影(かげ)が見えてきた。
「あっ?」
すかさずコナンは望遠鏡で見た。そして、
「ラダトームだっ! ラダトームが見えてきたぞーっ! おいセリア! ガナル! ラダトームだぞーっ!」
望遠鏡をアレンに放(ほう)って、嬉々(きき)として船室に駆けおりた。
アレンも慌(あわ)てて望遠鏡をのぞいた。

雄大な大陸が見えた。その中央にかすかに町が見える。
ラダトームの港だ――。

2　ラダトーム

なだらかな丘陵地帯を越えてラダトーム平野に入ると、前方に巨大な円塔のラダトーム城と、人口一万三〇〇〇人のラダトームの町の城壁が見えてきた。
アレンたち三人は駐屯部隊の連隊長に先導されながら、港街道をラダトーム城にむけて、馬を飛ばした。
港街道は、ラダトームの港と町を結ぶ唯一の道だ。
空はどんよりと曇り、ときおり冷たい風が砂塵を巻きあげながら吹き抜けていく。
水平線のかなたにラダトームの港が見えてから四時間後、アレンたちのラーミア号は無事ラダトームの港に入港した。
ラダトームの港は、人口五〇〇〇〇人のアレフガルド最大の港町で、数隻の大型帆船が停泊していた。そのなかに、ルプガナからやって来た定期船もあった。
三人にとって、四年振りのなつかしいラダトームの港であった。
ロト祭のときに、各国の国王の専用船がこの港に入港するからだ。

「修復に最低でも七日はかかるでしょう」
ラーミア号の損傷を調べながらガナルはそういうと、しばらく休養してからラダトーム城に行ったらどうかといった。
三人は、気の毒なくらい疲れ果てていたからだ。
だが、港からラダトーム城まで、馬でなら一時間とかからない。
三人はガナルを船に残すと、馬を借りるために、ハーゴン配下の魔物の襲撃に備えて厳重な警備を敷いているアレフガルド軍の駐屯部隊にむかった。
そして、三人の顔を知っていた部隊長は快く馬を提供し、ラダトーム城まで先導すると申し出たのだ――。
目の前に、厳重な警備のラダトームの町の城門が迫ると、四人は左の道へ折れた。
その前方の小高い丘に、ラダトーム城がそびえている。
城壁の東西南北には四つの円塔がそびえ、その中央にはさらにそれよりも数倍もある巨大な円塔が平野を見おろすようにそびえている。その円塔の左に赤い屋根の荘厳な建物が見えた。ラルス家の宮殿だ。
要塞のような城門に到着すると、おもむろに跳橋があがって、四人を迎え入れた。
城内の警備も厳重だった。いたるところに武装した兵士が配置され、円塔のなかからは兵士たちが四方に目を光らせていた。

城の中門をくぐり、噴水のある中庭を抜けて宮殿に案内されると、宮殿の玄関で顔見知りの近衛隊長とラルス二十二世の遠縁に当たるミラジオ将軍が、なつかしそうにアレンたち三人を迎えた。

ローレシア城の宮殿と同じように、この宮殿の玄関から奥の国王の間までつづく長い回廊には、壮大な絵が描かれている。

勇者ロトの物語だ。旅立ちから始まって、魔物との闘い、そして大魔王との闘いとつづき、国王の間で凱旋して終わっている。

国王の間に案内されると、

「いやあ、まいりました。国王のわがままには――」

今年四〇歳になるまだ若いミラジオ将軍は、溜息をついて苦笑した。

この将軍が、姿を隠したラルス二十二世に代わって国を治めているというのだ。

だが、将軍は玉座につこうとしなかった。ラルス二十二世が決めたこととはいえ、ローレシアからもサマルトリアからもムーンブルクからも承認された訳ではないから、はばかれるのだ。

「でも、どうしてラルス二十二世が――?」

アレンがたずねると、将軍はまた大きな溜息をついた。だが、

「国王はどこに隠れているのです?　ぜひ国王に聞きたいことがあるんです!」

しつっこくいうと、

「わかりました――」
といって、将軍はラルス二十二世の隠れ家に案内した。
なんと、ラルス二十二世は、ラダトームの町の大聖堂の裏通りにある、みすぼらしい壁の崩れかけた小さな家の地下室に隠れていた。
だが、地下室は想像していたよりも深く、そこへ行くまでにはいくつもの強固な鉄の扉を通らなければならなかった。
「おおっ、よくぞ来た！」
ラルス二十二世は、三人を見ると嬉しそうに迎えた。
温厚な顔立ちと樽のような体型は変わらないが、自慢の口髭をすっぱり落とし、服装も町人が着るような粗末な物を着ていた。町人に変装しているつもりなのだ。
「いやいや、去年の夏から、持病の神経痛と腰痛に悩まされておってな、ま、そんな訳でこのミラジオに国を任せたんじゃよ。はっははは」
聞かれもしないのに、自分からいい訳をし、
「それにしても、姫が生きのびておったとはのお――。すっかり美しくなられて――」
うっとりとセリアの顔を見つめた。
「なにいってんだよ！」
コナンがむっとして強い口調でいった。

「そんなことで逃げ出すなんて卑怯じゃないか！　先頭に立ってハーゴンの魔物から城や町を守るのが国王じゃないか！」
「しかしな、わしのような臆病者には、その、なんだ、到底勤まらんのじゃな。こういう有事の際はっ。そこで、わが血縁で一番優秀で勇敢なミラジオに任せたんじゃ。賢明な選択だと思うがな」
ラルス二十二世は、わるびれた様子もなくあっけらかんとしていた。
アレンたちは、呆れて顔を見合わすしかなかった。
「ま、頑張ってハーゴンを倒してくれ。おまえたちならできるかも知れん。勇者ロトとアレフの血が流れておるんじゃからな」
「えっ？　どうして知ってるんですか？」
驚いてアレンがたずねると、
「ムーンブルクが壊滅したあと、アレンが行ったらよろしく頼むって連絡があったんじゃよ。アレフ七世からな」
「そうですか――父上が――。実はアレフガルドに来たのは――」
アレンは、盲目の魔女の噂を聞いたことがあるかどうかたずねた。
「盲目の魔女？」
「二〇〇年ほど前、アレフガルドに流れて来たそうです。今でも生きているはずです」

「二〇〇年――？　はて――？　聞いたこともないが――」
ラルス二十二世は首をかしげると、後方に控えていた将軍の顔を見た。
だが、将軍も首を横に振った。
「じゃあ、邪神の像についてなにか知りませんか？　なんでもいいんです？」
「邪神の像――？　なんじゃ、それは？」
「ぼくたちにもわからないのです。ただ――」
ロンダルキアのはるか東方の大海にあるということ、ハーゴンたちが手に入れたがっているということ、手に入れるためにはセリアが必要だということを、アレンはかいつまんで話した。そして、そのためにハーゴンはムーンブルクを襲わせた――と。
「そうだったのか――。じゃが――」
ラルス二十二世はまた首をかしげると、将軍を見た。
将軍は、また首を横に振った。
「そうですか――。盲目の魔女を捜せばいろいろわかるんじゃないかと思ってラダトームまで来たんですが――」
アレンは溜息をついた。
「竜王に仕えていた魔女の三姉妹のひとりなんですが――」
「り、竜王の――？」

とたんに、ラルス二十二世は将軍と顔を見合わせた。
「どうしたんですか？」
「いや、実は――」
ラルス二十二世に代わって、将軍がいった。
「昔から、竜王の島に何者かが住んでるという噂があるのですよ――」
「竜王の島に？」
アレンたちは、驚いて顔を見合わせた。
「でも、アレフが竜王を倒したとき、大地震で海底に沈んだんじゃなかったのですか？」
「いえ――完全に沈んだわけではなかったのですよ。それに、毎年少しずつ隆起してましてね、今ではちょっとした島になっているんです。ちょうど難破船が岩礁に乗りあげたような奇怪な姿をした岩だらけの島なんですが、その一帯だけが年中濃い霧につつまれてまして、漁師たちも恐れて近づこうとしないんです――」
「魔女だ！」
思わずコナンが叫んだ。
「きっと魔女が住んでるんだ！」

3　竜王の島

ガナルがいった通り、ラーミア号の修復に七日かかった。
だが、その間アレンたちはゆっくり休養できたので、出航するときにはすっかりもとの元気な体に回復していた。
将軍や近衛隊長たちの見送りを受けてラダトームの港を出航した翌日の夕方、前方の海上にぶきみな濃い霧が見えてきた。その一帯だけが霧につつまれているのだ。
ラーミア号は速度を落として霧のなかをすすむと、まさに将軍がいった通りの、難破船が岩礁に乗りあげたような奇怪な小島が姿を現した。
帆柱（マスト）が無残に折れたような形の、無数の巨大な石が島をおおっている。
しかし、あと二〇〇歩あまりのところで、岩礁のためにラーミア号はすすめなくなった。
島の周囲を、ぐるりと岩礁が取り巻いているのだ。
ガナルが仕方（しかた）なく錨（いかり）を落とすと、アレンたちはガナルを船に残し、積んであった小舟（こぶね）を漕（こ）いで島に接近、上陸した。
「こ、これは――？」
思わず三人は目を見張った。

まるで古代の遺跡のような島だった。
帆柱が無残に折れたような形をした無数の巨大な石は、海水や潮風に曝された大理石の円柱だった。巨大な大理石の円柱が、何本も崩れ落ちて折り重なっているのだ。
よく見ると、円柱には、見事な彫物がほどこされている。そのなかでも、ほぼ原形をとどめている円柱があった。その彫物を見て、
「あっ？」
三人は、思わず息をのんだ。
竜だった。今にも襲いかかってきそうな、おどろおどろしい竜の彫物だった。
「そうか、ここは竜王の宮殿だったのか――」
アレンは、あらためて周囲を見回した。
勇者アレフの伝説によると、断崖絶壁の岬の上に、濃霧につつまれたぶきみな異形の竜王の宮殿が、アレフガルド中を威圧するようにそそり立っていたという。
その宮殿が、竜王を倒した直後に襲った大地震で無残に崩壊して、怒濤にのみこまれて海底に姿を消したのだ。
その宮殿の跡が、隆起したのがこの島なのだ。
そして、この宮殿の下には、幾層もの迷路があり、さらにその下の熔岩のなかに浮かんだ巨大な竜王の地下宮殿があったのだ。

「おい、アレン！」
コナンが呼んだ。
「ここに、下に入れる穴があるぞ」
アレンが行ってみると、倒れた円柱の下に、人がやっとひとり入れるほどの穴がぽっかり開いていて、その奥に深い闇がつづいていた。
「もしかしたら、魔女はこの奥にいるかもしれない」
そういって、コナンは革袋からたいまつを出して火をつけると、先頭に立って穴のなかに入って行った。
なかは複雑な迷路になっていた。あちこち崩れていて、床も斜めに傾いている。
三人は、奥へすすむと、さらに下に通じる階段があった。
その階段をおりて、さらに奥へすすんだときだった。突然、
「キャーッ！」
後ろにいたセリアが悲鳴をあげた。
思わずアレンとコナンが振り向くと、巨大な毒蛇がセリアの胴を太い尻尾で巻きあげて、はげしく絞めつけていた。
悪の魔力によって巨大凶暴化したバシリスクだ。
「ううっ！」

セリアの顔が大きく歪んだ。体中がしびれて苦しいのだ。
バシリスクの恐ろしい牙が、必死にもがくセリアの顔に迫ったときだった。
コナンの放った火炎の球が、バシリスクの顔面を直撃した。
強い衝撃とともにバシリスクの顔面を猛烈な火炎の嵐が吹き荒れたのだ。
バシリスクは苦しさにのけぞり、セリアを床に落とした。
すかさずセリアは杖をかざし、バギの呪文を唱えながら渾身の力で振りおろした。
すさまじい真空の渦がバシリスクを襲った。
「ギャオオオオッ！」
バシリスクの悲鳴が暗闇に響き渡った。
一瞬にして、肉まで斬り裂いた。どす黒い血が噴き出した。
と、宙に跳んでいたアレンが、
「たーっ！」
思いっきり剣を振りおろした。
ザク――！　たしかな手応えがあった。
バシリスクの首が宙に吹っ飛んだ。
三人はさらに下の階におりて、奥へすすんだ。
と、突然、ブオオオッ――頭上の暗闇からまっ赤な炎が襲ってきた。

三人は、慌てて飛びのいた。
真紅の巨大なトンボの群れが炎を吐きながら頭上から襲いかかってきた。
ドラゴンフライだ。その数はおよそ一〇匹。
すばやくセリアが、バギの呪文を唱えながら杖を振りおろした。
すさまじい真空の渦が、ドラゴンフライの群れを襲った。
たちまち三匹の動きがとまり、複眼や羽や胴を斬り裂いた。
その二匹をアレンが斬り落とし、コナンも火炎の球で一匹を焼き落とした。
残ったドラゴンフライたちは体勢を立てなおして、一斉に炎を吐いた。
三人はたまらず奥へ逃げた。だが、ドラゴンフライはしつこく追って来た。
振りむきざまに、セリアがバギの呪文で数匹の胴体を斬り裂き、アレンとコナンがとどめを刺すと、また奥へ逃げた。
こうして、同じ攻撃を繰り返しながら、さらに奥へ、そして下へと逃げた。
最後のドラゴンフライを倒すと、コナンとセリアはぐったりとしてその場に座りこみ、肩で大きく息をした。そのときだった。
ブオオオッ――と、また頭上から炎が襲いかかった。
「くそっ！　しつこいやつらだっ！」
アレンは、すばやく斬りかかった。

また、ドラゴンフライかと思ったのだが、別の魔物だった。

青い角と羽の生えた、悪魔だった。体の大きさは、人間の子供ぐらいしかない。グレムリンだ。

だが、グレムリンは身軽で敏速だ。自在に飛び回りながら炎を吐いた。しかも、アレンが斬りつけても、ホイミの呪文で一瞬にして傷を回復させてしまうのだ。

「くそっ！　セリアッ！」

コナンは、印を結んで高々と頭上にかざしながらセリアを見た。

セリアは、すぐコナンの作戦を理解した。連携呪文一発で倒すつもりなのだ。

セリアは杖をかざすと、コナンと呼吸を合わせて、一気に振りおろした。その直後、

「ウギャーッ！」

すさまじい悲鳴とともにグレムリンの額からいきおいよく血飛沫が飛んだ。

一瞬にして、猛烈な火炎の嵐と真空の渦を浴びせ、額から胸にかけて鋭く斬り裂いたのだ。

ギラの呪文とバギの呪文が同時に炸裂することによって、破壊力が倍増したのだ。

ちょうど、剣をかざしていたアレンが振りおろそうとしたときだった。だが、その必要はなかった。

黒煙をくすぶらせながらグレムリンは落下すると、大きく床に弾んで転がり、それっきり動かなくなった。

ふたたび、コナンとセリアはその場に座りこんでしまった。

やがて、気を取りなおすと、三人は階段を探して下におりた。
つぎつぎに魔物たちが襲って来る。鋭い牙を持った獰猛なサーベルウルフや、メドーサボールの同種で無数の毒蛇が合体したゴーゴンヘッドたちだ。
だが、三人は必死に魔物たちを倒して、さらに下へ下へとおりた。そして、ひときわ長い曲がりくねった階段をおりて、
「あっ？」
思わず声をあげた。
巨大な地底に出たのだ。前方に大理石の宮殿が見える。だが、その宮殿は無残にも崩壊していた。
その回りを、まっ赤な熔岩が、ボコッ、ボコッ、ボコッ――と、恐ろしい泡を立てている。
三人は、そっと崩壊した宮殿跡の奥へすすんだ。
異様なほど静まり返っていた。ときどき熔岩の泡の音がするだけだ。
だが、さらに奥へすすむと、「ゼィゼィ――ゼィゼィ――」という、かすれ声とも唸り声ともつかないぶきみな音が、かすかに聞こえてきた。
三人は、緊張した。ぶきみな音は、奥から聞こえてくる。
さらにすすむと、その奥に、広い空間があった。
ここも他と同様に、巨大な円柱や天井が無残に崩れ落ちている。

かつての竜王の間だ。
三人は、この竜王の間にすすんで、
「あーっ？」
思わず恐怖に顔を凍てつかせた。
巨大な爪。鋼鉄のような鱗と翼と背びれ。大きく裂けた口。鋭い二本の角――。
アレンの一〇倍、いやそれ以上もある巨大なドラゴンが、恐ろしいまっ赤な眼で三人を見おろしていたのだ。
ゼィゼィ――というぶきみな音は、このドラゴンの息をする音だった。
「こ、こいつは――？」
アレンは、愕然とし、一瞬自分の目を疑った。
コナンもセリアも、同じだった。
竜王が生きているはずがないからだ。だが、目の前にいるドラゴンは、壁画や絵画や絵本に描かれている竜王にそっくりなのだ。三人が知っている竜王そのものなのだ。もしほんとうにそうだとしたら、竜王は死の世界からふたたびよみがえったのだ。
「くそっ！　竜王めっ！」
アレンは身構えた。

4　竜王の子孫

「竜王！　覚悟ーっ！」
すかさずコナンが印を結んでギラの呪文をかけ、セリアも杖を振りおろしてバギの呪文をかけた。
同時に、アレンも剣をかざして疾風のように突進した
だが、コナンの放った強烈な火炎の球は、鋼鉄のような鱗に弾き返されて消え、セリアの放ったすさまじい真空の渦も、なんの衝撃も与えなかった。
渾身の力で振りおろしたアレンの剣も、カキーン――と乾いた音を立てて、あっけなく鱗に弾き返された。
「ふっふふふふ――」
ドラゴンはぶきみな笑いをあげると、
「おまえたちの力ではこのわしは倒せまい――」
おどろおどろした低い声でいった。
「わしはおまえたちと闘うつもりはない――」
「だ、黙れ、竜王ーっ！　その手に乗るかっ！」

アレンは、剣を構えてにじり寄り、コナンもセリアも呪文の態勢をとった。
「わしは竜王ではない――――!」
「な、なにっ?」
突進しようとしたアレンは、思わず足をとめた。
「竜王ではない――――!」
そういうと、突然、地響き（じひび）がした。
ドラゴンの巨体が、地響きを立てながらはげしく揺れた。
揺れながら、ドラゴンは見る見るうちに姿を変え、どんどん小さくなっていった。
鋭い二本の角が消え、翼が消え、背びれも消え、鱗も消えた。
大きく裂けた口もしぼみ、巨大な足も手も、爪も縮んだ。
三人は、あ然として見ていた。
そして、地響きが終わると、ドラゴンはセリアよりもひと回り小柄（こがら）な魔物に姿を変え、目の前の玉座に座って、ゼィゼィ――と、ぶきみにのどを鳴らしながらじっと三人をにらんでいたのだ。
口許（くちもと）にかすかな笑みを浮かべているが、眼は異様に鋭く輝いている。
「だ、だれだっ?　竜王でなきゃだれなんだ!」
アレンが叫んで、剣の柄（つか）をにぎり変えた。
「おまえたちこそだれだ――――?」

おどろおどろした低い声で聞いた。
「ローレシアの王子アレンだ！」
「ぼくは、サマルトリアの王子コナン！　そして――こっちが、ムーンブルクの王女セリアだ！」
「そうか――。ロトとアレフの子孫どもか――。わしは、竜王の子孫だ――」
「な、なにっ？　竜王の子孫？」
三人は、驚いた。
「どうして竜王の子孫がこんなとこにいるんだっ？」
アレンが聞き、
「またアレフガルドを支配しようとしてるんだなっ！」
コナンが叫んだ。
「いや――。幽閉(ゆうへい)されておるのだ――。天上界の神々からな――」
「幽閉――？」
アレンはコナンと顔を見合わせた。
「この島から勝手に動けないのだ――」
そういって、竜王の子孫は、そのいきさつを話し始めた――。
神々の一族である竜神の末裔(まつえい)として生まれた竜王は、人間を保護する神として天上界に君臨す

るはずだった。
　だが、竜王が誕生したとき母である竜の女王はすでにこの世になく、竜王はいずことも知れぬ暗い洞窟で、魔界を支配する大冥界の大魔神によって、悪の権化として育てられたのだ。
　ある日、若き竜王を呼んで、大魔神はこう告げた。
「竜王よ。もはやこの世界におってもそなたの益するところはない。そなたの母上、竜の女王から地上界を奪い取った精霊ルビスの国アレフガルドにむかうがいい。今こそ、その地を征服し、母上の仇を討つがいい。そして、光の球を奪い返すのだ。さすれば、おまえの本来の力を取り戻し、地上界のみならず、天上界をも支配できる絶対的な力を持つであろう――」
　こうして四〇〇年前、竜王は大魔神に騙されているとも知らずに、配下の魔物を率いてアレフガルドを侵略したのだ。
　このことが、竜神の末裔としてあるまじき行為だとして、天上界の神々の怒りに触れたのだ。
　その竜王が、二二〇年前にロトの血をひくアレフによって倒されると、竜神の末裔たちは天上界の神々の裁きを受けたのだ。
　そして、竜王の子孫は、その戒めとしてこの島に幽閉されたのだ。
　この島で、竜王の子孫として、竜王の罪を償わなければならないのだ。
「だが、あと二〇〇年――」

そういって、竜王の子孫は溜息をついた。
「あと二〇〇年で、免罪(めんざい)される——。天上界の神々から罪を許されるのだ。そして、わしは竜神として、天上界に帰れる——。それまでは、どんなことがあろうと、じっとこの島に閉じこもって、竜王の罪を償わなければならんのだ——。もし、この島から一歩でも出たら、永遠に天上界から追放されてしまうからな——」
そして、竜王の子孫はじっと三人を見つめると、
「大神官ハーゴンを倒しに行くのだな——」
と、いった。
「そうだ!」
アレンが力強く答えると、
「だが、邪神の像がなければ、ロンダルキア山脈の洞窟へは入れんぞ——。ハーゴンの神殿(しんでん)へもな——」
「なにっ?　邪神の像を知っているのか?」
アレンがたずねた。
「邪神の像を邪神の祭壇(さいだん)に捧(ささ)げると、大冥界から大魔神が降臨するといわれておる——。竜王を悪の権化に育てた大魔神がな——。おそらくハーゴンは、大魔神をこの地上界に呼び出すつもりなのだろう——」

「大魔神をこの世界に!!　もしそうなったら——?」
竜王の子孫はその不安に答えるかのように話し出した。
「おそらく、この地上界は永久にハーゴンと大魔神の手に——」
「そんな——!」
アレンたちは、顔を見合わせた。
「だが、邪神に呪われた開かずの扉を開け、邪神の像を手にできる者はこの世にただひとり——。牛頭神(ケンタウルス)の月、牛頭神(ケンタウルス)の日に生まれたロトの血をひく乙女(おとめ)をおいて他にない——」
「そうか、それでやつらはセリアを——!」
「だが、邪神の像のある神殿は恐ろしい熔岩に囲まれたところだと聞いた。もっとも水の羽衣があれば簡単だがな」
「水の羽衣?」
「燃え盛る炎や、鉄をも熔かす高熱からも身を守ることができるといわれておる羽衣だ。だが、その水の羽衣を織れる者もこの世にただひとり——。テパの村におるドン・モハメだけだといわれておる——」
「そのテパの村ってどこにあるんだ?」
「ロンダルキア山脈の西にある、山深いところだ。満月の塔(とう)のそばのな——」
「満月の塔?」

アレンは、「邪神の像を手に入れるには、その前に満月の塔に隠されておるという『月のかけら』を手に入れなければならない――」といった、ドラゴンの角の北の塔の魔女の言葉を思い出した。

アレンは月のかけらのことをたずねた。だが、竜王の子孫は首を横に振った。

「それじゃ、邪神の像があるのは、東方の大海のどこなんだ？　島か？」

「それはわからん――」

「だけど、どうしてぼくたちにそんなことを教えるんだ？」

今度はコナンがたずねた。

「ハーゴンのやり方が気に入らないからだ――。大冥界から大魔神を呼んで、世界を自分の手に入れようとするその魂胆が――」

「もうひとつだけ教えてくれ」

またアレンがたずねた。

「盲目の魔女を捜してここに来た。どこにいるか知らないか？」

「盲目の魔女――？」

「かって竜王に仕えていた三姉妹の魔女のひとりだ」

「それなら、大灯台の塔におると聞いたことがある――。昔のことだがな――」

「大灯台？」

「アレフガルド大陸とロンダルキア大陸の中間にある島の灯台だ――。おお、そうだ。ロトとア

レフの子孫たちよ――。おまえたちにこれを進ぜよう」
そういって、玉座の後ろの棚から剣を取って、アレンに差し出した。
鞘も鍔も柄も、ぼろぼろに錆びついている、みすぼらしい剣だ。
「ロトの剣だ――」
「えっ？　これが？」
三人は、愕然として剣を見た。
「こ、これがあのロトの剣――？」
アレンが、おもむろに受け取って鞘から抜いた。刃もぼろぼろに錆びついている。
鏡のような青々とした刃、油がしたたりそうな光沢、華麗な鍔、手の平にぴたりと吸いつくような美しい柄――アレンの想像していたロトの剣はそういう気高くて華麗で美しい剣だった。その剣とは、似ても似つかぬものだった。
だが、よく見ると、鍔は不死鳥が翼を広げて飛翔しているロトの紋章を象ったものだ。柄には宝石が埋めてある。
「ロンダルキア山脈の洞窟に、稲妻の剣と呼ばれている魔剣がある――」
竜王の子孫はいった。
「その電撃を浴びせれば、剣は復活し、往年の輝きと力を取り戻すはず――」
アレンは、柄をしっかりと握りしめてみた。

ぼろぼろに錆びてはいても、勇者ロトやアレフが同じこの柄を握ったのだ。きっとなにかが、この手に伝わってくるかもしれない。ロトの鎧を着たときのように。ロトの楯を握ったときのように。ロトの兜をかぶったときのように――。

だが、なにも伝わってこなかった――。

5　強奪

音もなく雪が降りつづいていた。

だが、風が弱いだけ助かった。風が強いと波が荒れるからだ。

アレフガルド大陸の中海から海峡を抜けて外洋に出たラーミア号は、アレフガルド大陸とロンダルキア大陸の中間にある大灯台を目指して、航海をつづけていた。暦はとっくに竜の月から王の月に変わっていた。

そして、ラダトームの港を出航してから一〇日目の朝、まる一日降りつづいた雪がやっとやむと、ぬけるような青空が広がっていた。だが、身を切るような冷たい風が吹いていた。

その日の昼食のあと、アレンは船室のベッドに横になりながら、竜王の子孫や魔女たちから聞いたことを順序立てて考えていた――。

――竜王の子孫は、『ハーゴンの神殿』に行くためには『邪神の像』を手に入れなければならな

いといった。だが、ハーゴンたちも、大冥界から大魔神を呼ぶために、『邪神の像』を狙っている。とすると、『邪神の像』をなんとしても先に手にいれなければならない。竜王の子孫は、『セリア』がいなければ『邪神の像』は得られないともいった。幸い『セリア』はここにいる。

あと必要なものは――北の塔の魔女は『満月の塔』で『月のかけら』を手にいれなければならないといった。その『満月の塔』は、『テパの村』の近くにある。その『テパの村』に『水の羽衣』を織る『ドン・モハメ』という人物がいる。北の塔の魔女にもらった『雨露の糸』は、その『水の羽衣』となにか関係があるのだろうか？

とにかく――『水の羽衣』と『月のかけら』を手に入れたら、『ロンダルキア大陸のはるかかなたの東方の大海』へ行って、『邪神の像』を手に入れる。それがあれば、『ロンダルキア山脈の洞窟』に入れる。そして、『稲妻の剣』を捜してロトの剣を復活させ、『ハーゴンの神殿』に行く――。

それにしても――。三姉妹のもうひとりの魔女は、一体なにを教えてくれるのだろうか――？　それとも、なにを持っているのだろうか――？　いずれにせよ――。

そこまで考えて、アレンは、食後のあと片づけをしているセリアを見た。

セリアさえ守れば、ハーゴンたちはどんなにあがいても『邪神の像』を手に入れることはできないのだ――。セリアさえ守れば――。

そう思ったときだった。突然、甲板に出ているコナンの声が聞こえた。

「おーい、島だ！　大灯台の島だ！」
アレンとセリアとガナルの三人は、急いで船室から飛び出した。
はるか前方の水平線に、まっ白な雪をかぶったなだらかな島が見える。
さらに近づくと、島の東の岬の上にそびえる八層の大灯台が肉眼でもよく見えた。大灯台の西の入江には、戸数四、五〇ばかりの小さな集落がある。
アレンたちは、その集落にラーミア号を寄せることにした。
だが、入江には船着き場がなかった。
小さな漁船が数隻、砂浜に引きあげられているだけだった。
アレンたち三人はガナルを船に残して、小舟を漕いで砂浜に乗りあげると、岬の大灯台へとむかった。
集落は、まるで死んだようにひっそりと静まり返っていた。
集落のなかの道は除雪してあったが、ほどなく集落を抜けると道が消え、一面の雪原になった。
雪は、膝まで積もっている。風は、雪を巻きあげながら吹き抜けていった。
二時間後――。三人はやっと大灯台に着くと、雪原を振り返った。
三人の足跡だけが、白銀の世界にえんえんと線のようにつづき、はるかそのむこうに集落と入江が小さく見えた。
大灯台は、風の塔やドラゴンの角の塔と同じように、何百万個もの石を積み重ねて造られた壮

大なものだった。
だが、いたるところ崩れ落ちて、廃墟のようになっている。
三人は、なかに入ると、慎重に奥へとすすんだ。
なかは、複雑な迷路になっていた。石柱が崩れ落ち、天井に穴が開いている。
やっと見つけた階段をあがって、さらに奥にすすんだときだった。
いきなり石柱の陰の暗がりから、白い魔物がすさまじいいきおいで襲いかかってきた。
「うわあっ！」
三人は、かろうじて身をかわした。
バギーン——。
つぎの瞬間、ものすごい音が響いた。
いきおいあまった白い魔物は石壁に激突し、壁を粉々に打ち砕いたのだ。
白い魔物。それは全身に包帯を巻いたミイラ男だった。
ミイラ男はすぐさま体勢を整えて襲いかかってきた。身軽で敏速だ。
三人は、すばやくかわしてばらばらに散った。そして、コナンは頭上で印を結ぶと、
「セリア！」
と、叫んだ。以前、グレムリンを倒したときの戦法で攻撃しようと思ったのだ。
すかさずセリアも杖を頭上にかざした。そして、コナンと呼吸を合わせて、渾身の力で杖を振

りおろした。とたんに、
「ギャオオーッ！」
ミイラ男は、はげしく体を痙攣させながら悲鳴をあげた。
すさまじい真空の渦と、強烈な火炎の球がミイラ男に炸裂したのだ。
つぎの瞬間、燃えながら粉々に千切れた無数の包帯の破片が、花火のようにいきおいよく宙に舞った。
包帯が吹っ飛ぶと、なかからどろどろに肉体の腐ったリビングデッドが姿を現したのだ。たちまち一帯を強烈な腐敗臭がおおった。
すぐそばで剣を振りおろそうとしていたアレンは、思わず口と鼻を押さえて立ちどまり、コナンもセリアも口と鼻を押さえて思わず後退した。
包帯がなくなると、リビングデッドの動きは極端に鈍くなった。
だが、また攻撃しても、腐敗臭がさらに強烈になるだけなのだ。
「に、逃げろっ！」
まっ先にコナンが叫び、三人は奥へと逃げ去った。
三人は、階段を見つけて上にあがると、さらに奥へすすんだ。
そのとき、後方から巨大な鋭い槍がすさまじい速さで飛んで来た。
「危ない！」

はっと殺気を感じたアレンは、すばやくコナンとセリアを押し倒して床に伏せた。
槍は唸りをあげながら三人の頭上をかすめて、前方の石壁に当たった。
振りむくと、全身黄色の毛でおおわれた巨大な魔物が、長い槍を構えて猛然と突進して来ていた。アレンの三倍もあろうかという獣人、ゴールドオークだ。
三人は慌てて三方に逃げた。と、
「あーっ！」
コナンが悲鳴をあげて倒れた。
ゴールドオークの鋭い槍が右腿をかすめたのだ。
ざっくりと破けた傷口から血が噴き出していた。
ゴールドオークは、残忍な笑いを浮かべながら槍を振りかざすと、倒れているコナンに穂先をむけていきおいよく振りおろした。
「うわあーっ！」
コナンは観念した。
穂先が喉元に突き刺さろうとしたそのときだった。風のように突進したアレンが、一瞬速く剣で穂先を斬り落とした。
「ウオオオーッ！」
怒りに狂ったゴールドオークは、槍を捨てて猛然とアレンに襲いかかった。

アレンは必死に攻撃した。だが、致命的な打撃を与えられず、一旦ゴールドオークから離れた。
そのときだった。
「ウギャオオオーッ！」
いきなりゴールドオークが悲鳴をあげてはげしく全身を痙攣させた。
セリアが、アレンがゴールドオークから離れるのを待ってバギの呪文をかけたのだ。
すさまじい真空の渦が、ゴールドオークの体を斬り裂いたのだ。
すかさずアレンは大きく宙に跳んで、
「たーっ！」
ゴールドオークの首を目がけて剣を振りおろした。
ガギッ――鈍い音がした。剣を持つ手にははげしい衝撃があった。
ゴールドオークはがくっと膝をついた。だが、アレンの剣はゴールドオークの首に刺さったままだった。斬り落とせなかったのだ。ゴールドオークは最後の力を振りしぼってなおもアレンに襲いかかろうとした。
「うりゃあああーっ！」
アレンは気合を入れ、渾身の力で首を斬り落とした。
一面にどす黒い血飛沫が飛び、ゴールドオークの首が無残に床に転がった。
今まで闘った魔物のなかで、一番手強い相手だった。

「コナン、大丈夫かっ？」
アレンは急いで駆け寄り、革袋から布を取り出して、コナンの腿の傷口をしっかりと結わえた。だが、まともには歩けそうになかった。
三人はさらに奥へ、奥へとすすんだ。
魔物たちはつぎつぎに襲いかかってきた。魔力で墓場からよみがえったガイコツのアンデッドマンは、鋼鉄の剣をかざして頭上から襲いかかってきたし、獰猛なサーベルウルフや、しつこい巨大トンボのドラゴンフライの群れや、巨大な大アリのラリホーアントが容赦なく襲いかかって来たのだ。
だが、アレンとセリアは、ケガをしたコナンを必死にかばいながら、魔物たちを倒して、やっと最上階にのぼる階段までたどり着いた。そして、最上階にあがって、
「あっ？」
思わず三人は身構えた。
魔女ではなく、まっ白な仮面をかぶり、白いローブに紫のマントをまとった祈禱師が、中央の小さな祭壇の前で待ち構えていたのだ。ローブの胸には、魔鳥が飛翔する黒の紋章がある。ハーゴン配下の祈禱師である。
「ロトとアレフの血をひく者どもじゃな──」
祈禱師の声は、女の声だった。

「どうして知ってるんだっ？」
アレンは驚いて聞いた。
だが、祈禱師は答えずに、すかさず持っていた杖を頭上にかざした。
「待てっ！　魔女はどこだっ！」
慌ててアレンが叫んだ。
「魔女？」
「そうだ！　盲目の魔女がここにいるはずだ！」
「ふっははは。そんな魔女なぞとっくにおらんわ！」
「なにっ？　き、貴様、まさかっ！」
「昔のことなぞ、知らぬわいっ！」
そう答えて、祈禱師が呪文を唱えようとしたときだった。
突然、ゴオオオッ――と音を立てて、灼熱の白い火炎が祈禱師を襲った。
「うわああああっ！」
祈禱師は悲鳴をあげながらいきおいよく吹き飛ばされ、壁にはげしく全身を打って床に落ちた。
ほんの一瞬のことだった。マントもローブも黒く焼け焦げていた。黒焦げの仮面が床に転がり落ちた。女祈禱師は白目を剝いて気を失っていた。
あまりのすさまじい光景に、三人は息をのんだ。

すると、祭壇の前の宙の一点で、ピカーと白光が弾けると、その白光は光り輝きながらはげしく渦を巻いたのだ。目のくらむような、まぶしい光の渦だった。
その渦がすーっと一点に吸いこまれるように小さくなると、ひとりの若者が左手を大きくかざして立っていた。そして、その白光は、大きくかざした若者の左手の指にはめてある白玉の指輪に吸われて消えた。
「な、何者だっ？」
アレンは叫んだ。
がっちりとした背の高い若者だ。長い髪を首のところでひとつに束（たば）ね、長剣を背中にさげている。ガルドだ。
ガルドは、氷のような冷たい目で三人をじっと見ると、
「王女をもらいに来た——」
抑揚（よくよう）のない低い声でいった。
「な、なにっ？」
三人は、さっと顔色を変えた。
すかさずアレンは身構え、コナンは慌ててセリアの前に移動した。
「くそっ！　貴様もハーゴンの手下かっ！」
アレンは剣をかざして斬りかかった。

ガルドは、微動だにせず口許にかすかに笑みを浮かべていた。
アレンは、渾身の力をこめて剣を振りおろした。
もらった——と、思った。だが、つぎの瞬間、アレンの剣はむなしく空を斬っていた。
「あっ？」
目の前からガルドの姿が消えていたのだ。一瞬、アレンは自分の目を疑った。だが、慌てて振りむくと、ガルドは口許にかすかに笑みを浮かべなから平然と後ろに立っていたのだ。
「く、くそっ！　いつの間にっ！」
アレンは身をひるがえしてふたたび斬りかかった。
だが、剣はまたむなしく空を裂いた。またガルドの姿が消えたのだ。
「チキショーッ！」
ガルドは、いつの間にか左後方に立っていた。アレンは、さらに斬りかかった。
アレンは、旅をつづけている間に、一段と腕をあげてはいた。
疾風のように斬りかかり、目にもとまらぬ速さで剣を振りおろす。
攻撃の速度、正確さ、破壊力はもちろん、俊敏さ、瞬発力、集中力、判断力——すべてにおいて旅に出る前とは比較にならないほどに。
だが、何度斬りかかっても、ガルドは音もなく風のように目の前から消えた。どの方向に消えたか、その瞬間を見極めることができないのだ。

アレンは、攻撃をやめて、肩で荒い息をしながら間合いを測った。
そのときだった。印を結んでいたコナンが、渾身の力をこめてギラの呪文をかけ、同時にセリアもかざしていた杖を、振りおろした。しかし——
コナンの放った火炎の球は、ガルドの前ですーっと消え、セリアの放ったすさまじい真空の渦もまた、ガルドの前であえなくかき消された。
「うっ！　な、なんてやつだ——！」
コナンとセリアは、あ然とした。
だが、コナンはふたたび印を結び、セリアも杖を頭上にかざした。すると、
「遊びはこれまでだ。むだに血を流したくないからな——」
ガルドは、ふっと鼻で笑ったのだ。
「このやろーっ！」
アレンが、猛然と剣を振りかざして斬りかかった。
もう半歩、いや四分の一歩速く斬りこめばなんとかなる。消える方向さえわかれば、なんとか攻撃できる——間合いを測りながらそう思ったのだ。
「覚悟ーっ！」
しかし、アレンの剣はむなしく空を斬った。
だが、そのときアレンは、頭上を跳ぶガルドの姿を一瞬ながらも確認できた。長い髪の毛の先

がかすかになびくのが見えたのだ。後方に着地する——アレンはとっさにそう判断すると、後ろにすばやく身をひるがえし、一歩深く踏みこんだ。そして、
「たーっ！」
思いっきり剣を振りかざした。
が、すでにそこにガルドの姿はなかった。そのときだった。
「キャーッ！」
セリアの悲鳴があがったのは。
「セリアッ？」
はっと見ると、ガルドがセリアを押さえつけて、喉元に鋭い剣の刃先を突きつけていた。
そのそばで、コナンがまっ青になってうろたえている。アレンの頭上に跳んだガルドは、一瞬ぱっと宙に姿を消すと、つぎの瞬間、背中の長剣を抜いてセリアの後ろに現れていたのだ。
「離せーっ！」
アレンは、叫びながら斬りかかろうとした。
アレンの動きを制すかのように、ガルドは剣の刃先をぴたっとセリアの白い喉元に触れさせた。
「うっ！」
思わずアレンは立ちどまった。これ以上近づけなかった。
「ふっふふふ——。さらばだ——」

ガルドが、左手を高々とかざすと、指にはめてある指輪の白玉からピカーッと白光が弾け、ガルドのまわりを目のくらむようなまぶしい白光が稲妻のように走った。
「あーっ？」
アレンとコナンは、愕然とした。
白光が消えると、ガルドとセリアの姿も消えていたのだ。
「セリアーッ！　セリアーッ！」
アレンとコナンは、必死に叫んだ。
だが、聞こえてくるのは外の風の音ばかりだった。
アレンは、セリアの名を叫びながらそばの窓に駆け寄った。
だが、荒涼とした雪原には、ここへ来る途中に三人がつけた足跡があるだけだった。他にはだれの足跡もない。人影もない。飛ぶ鳥もいなかった。
アレンは、すかさず反対側の窓に駆け寄った。
だが、まっ白な雪に埋もれた岬の先端と、果てしなく広がる海があるだけだった。
どこを見ても、ガルドとセリアの姿はなかった。
「ちっきしょう！　なんてこったっ！」
コナンは、床に座りこんで泣きながら叫んだ。
「くっ——くそっ——！」

アレンは、ありったけの力で剣を握りしめた。
怒りと悔しさに、その手がはげしく震えた。アレンの目に涙が浮いていた。
四歳のとき、母ルシアが病死した。そのとき以来の涙だった——。

小説　ドラゴンクエストII
悪霊の神々[上]

一九八九年十月十五日　初版
著　者　高屋敷英夫
設定協力　横倉　廣
編集人　千田幸信

発行者　福島康博
発行所　株式会社エニックス
東京都新宿区西新宿7-5-25　西新宿木村屋ビル5F　〒160
印刷所　大日本印刷
乱丁・落丁本はお取り替え致します。
原作　ゲーム・ドラゴンクエストII悪霊の神々
シナリオ　堀井雄二